

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第58集

かみ の はる い せき
上 ノ 原 遺 跡

(第Ⅱ分冊 縄文時代以降 図版編)

東九州自動車道建設 (西都～清武間)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIV

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

上ノ原遺跡 正誤表

第I分冊

誤	正
挿図目次 第117図 石器実測図(石鏃)	挿図目次 第117図 石器実測図(挟入石器)
45頁 スケール 0 5cm	45頁 スケール 0 5m
170頁 第117図 石器実測図(石鏃)	170頁 第117図 石器実測図(挟入石器)

第II分冊

誤	正																
216頁 16行 (2)集積遺構	216頁 16行 (2)集石遺構																
219頁 18行 明確な集中は	219頁 18行 明確な焼土の集中は																
237頁 上ノ原遺跡・炉穴一覧表 <table border="1" style="margin: 10px auto; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">番号</th> <th style="width: 85%;">遺構番号</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="text-align: center;">SO2</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">5</td> <td style="text-align: center;">SO3</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">6</td> <td style="text-align: center;">SO4</td> </tr> </tbody> </table>	番号	遺構番号	4	SO2	5	SO3	6	SO4	237頁 上ノ原遺跡・炉穴一覧表 <table border="1" style="margin: 10px auto; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">番号</th> <th style="width: 85%;">遺構番号</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="text-align: center;">SP2</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">5</td> <td style="text-align: center;">SP3</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">6</td> <td style="text-align: center;">SP4</td> </tr> </tbody> </table>	番号	遺構番号	4	SP2	5	SP3	6	SP4
番号	遺構番号																
4	SO2																
5	SO3																
6	SO4																
番号	遺構番号																
4	SP2																
5	SP3																
6	SP4																
292頁 下から1行目 鋳刺ぎが	292頁 下から1行目 鋳刺ぎが																
293頁 2行目 外面に線描遺井文を	293頁 2行目 外面に線描遺井文を																

報告書抄録

誤	副書名	東九州自動車道(西部~清武間)建設に伴う埋蔵文化財報告書
	シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書XIV
正	副書名	東九州自動車道(西部~清武間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIV
	シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

本文目次

第IV章 縄文時代早期の遺構と遺物	215
第1節 遺構	215
(1) 土坑 (SC)	215
(2) 集石遺構 (SI)	216
(3) 炉穴 (SP)	218
第2節 遺物	243
(1) 土器	243
(2) 石器	245
(3) 石鏃	246
(4) スクレイパー	248
(5) 異形石器	248
(6) 石錐	248
(7) 磨石・敲石	248
(8) 石皿	248
(9) 台石	249
(10) 石核	249
(11) 二次加工のある剥片	249
(12) 使用痕のある剥片	249
第V章 縄文時代中期以降の遺構と遺物	270
第1節 遺構	270
(1) 掘立柱建物 (SB)	270
(2) 土坑 (SC)	272
(3) 溝状遺構 (SE)	274
(4) 近世墓 (SX)	274
第2節 遺物	288
(1) 縄文時代中期の土器	288
(2) 縄文時代後期の遺物	289
(3) 縄文時代晩期の土器	289
(4) その他の縄文土器	290
(5) 古代の土器	291
(6) 中世から近世にかけての陶磁器類	292
(7) 縄文時代中期以降の石器	293
第VI章 上ノ原遺跡の自然科学分析	323
I. 上ノ原遺跡の土層とテフラ	323
II. 上ノ原遺跡における植物珪酸体分析(1)	328
III. 上ノ原遺跡における放射性炭素年代測定結果(1)	330
IV. 上ノ原遺跡における植物珪酸体分析(2)	332
V. 上ノ原遺跡における花粉分析	337
VI. 上ノ原遺跡における放射性炭素年代測定結果(2)	345
第VII章 まとめ	348

插图目次

第1图	上/原遼跡繩文早期十坑実測図	221
第2图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(1)	222
第3图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(2)	223
第4图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(3)	224
第5图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(4)	225
第6图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(5)	226
第7图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(6)	227
第8图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(7)	228
第9图	上/原遼跡繩文早期集石遺構実測図(8)	229
第10图	上/原遼跡繩文早期炉穴(1)	231
第11图	上/原遼跡繩文早期炉穴(2)	232
第12图	上/原遼跡繩文早期炉穴(3)	233
第13图	上/原遼跡繩文早期炉穴(4)、(5)	235~236
第14图	上/原遼跡繩文早期遺構内遺物(1)	238
第15图	上/原遼跡繩文早期遺構内遺物(2)	239
第16图	上/原遼跡繩文早期遺構内遺物(3)	240
第17图	上/原遼跡繩文早期土器分布図	251~252
第18图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(1)	253
第19图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(2)	254
第20图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(3)	255
第21图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(4)	256
第22图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(5)	257
第23图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(1)	261
第24图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(2)	262
第25图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(3)	263
第26图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(4)	264
第27图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(5)	265
第28图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(6)	266
第29图	上/原遼跡繩文早期包含層出土土器実測図(7)	267
第30图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(1)	275
第31图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(2)	276
第32图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(3)	277
第33图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(4)	278
第34图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(5)	279
第35图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(6)	280
第36图	上/原遼跡掘立柱建物跡実測図(7)	281
第37图	上/原遼跡土坑実測図(1)	282
第38图	上/原遼跡土坑実測図(2)	283
第39图	上/原遼跡土坑実測図(3)	284
第40图	上/原遼跡溝状遺構実測図	285
第41图	上/原遼跡繩文時代遺構出土遺物実測図	286
第42图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器分布図	295~296
第43图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(1)	297
第44图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(2)	298
第45图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(3)	299
第46图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(4)	300
第47图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(5)	301
第48图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(6)	302
第49图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(7)	303
第50图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(8)	304
第51图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(9)	305
第52图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(10)	306
第53图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(11)	307
第54图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(12)	308
第55图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(13)	309
第56图	上/原遼跡繩文時代中期以降出土土器実測図(14)	310
第57图	石器出土分布状況	317~318
第58图	上/原遼跡繩文中期以降出土土器実測図(1)	319
第59图	上/原遼跡繩文中期以降出土土器実測図(2)	320
第60图	上/原遼跡繩文中期以降出土土器実測図(3)	321

第IV章 縄文時代早期の遺構と遺物

第1節 遺構

縄文時代早期の遺構として、土坑8基、集石遺構16基、炉穴38基（単体6基、群をなすもの4群）が検出された。ほとんどの遺構は縄文時代早期の包含層であるV層、VI層で検出されたが、土坑、炉穴の一部には、削平のためVI層以下の面で確認されたものもある。

なお、遺構内で確認された遺物については、第14図～第16図に実測図を、表33～表34に観察表を掲載している。また、観察表で用いている土器分類については、後述「2 遺物」編の包含層の出土の縄文時代早期土器の分類に準拠している。

(1) 土坑 (SC)

土坑は8基（B区1基、C基5基、D区2基）が検出され、いずれも検出面、埋土状況等から、縄文時代早期の遺構と判断した。

SC28

B区C14グリッドの第VI層掘り下げ中に検出。長径145cm、短径90cmの楕円形プランを呈し、深さは45cmを測る。埋土はV層、VI層が自然堆積した状態が確認された。遺構上部の約1/2は削平を受けていた。

SC29

C区G5グリッドの第VIb層の掘り下げ中、VIb層下位で検出。長径165cm、短径80cmの楕円形プランを呈し、深さ50cmを測る。埋土はV層が自然堆積した状態が確認された。遺構上部の大半が耕作のトレンチャーのため、筋状に攪乱を受けていた。

SC30

C区H5グリッドで表土除去後、第VIb層面の精査中に検出。長径約70cm、短径約50cm、深さ20cmを測る。位置的にSC30、SC31、SC32と並ぶ形で分布している。いずれも遺構上部は耕作のため削平を受け、その上、確認調査のトレンチのため全体形の1/3～1/2が喪失しており、正確な構築面、全体形は確認できなかったが、埋土がSC28、SC29に類似したV層土の堆積状態が確認されたので早期遺構とした。

SC31

C区H5グリッドで表土除去後に第VIb層面で検出。SC30の北川約50cmに位置し、長径約95cm、短径約60cmを測る。SC30同様、削平とトレンチのため、両サイドが喪失していたが、楕円形プランと思われる。

SC32

C区H5グリッドで表土除去後に第VIb層面で検出。SC32の北西側約1mに位置し、長径約70cm、短径約60cm、深さ25cmを測る。トレンチのため、全体形の約1/2が喪失しているが、楕円形プランと思われる。

SC33

C区G2グリッドの南端で表土除去後、第IX層面で検出。長径約110cm、短径約90cmの楕円形プランを呈する。埋土はV層、VI層が自然堆積した状態で確認された。断面形はすり鉢状を呈し、最深部の検出面からの深さは約20cmを測る。

SC34

D区O13グリッドのほぼ中央で第VI層掘り下げ中に検出。長径200cm、短径150cmの方形プランを呈し、埋土はV層、VI層が自然堆積した状態で確認された。深さは約15cmを測り、埋土下位から土器片(2、3)が確認された。2は斜方向に貝殻条痕文を施した条痕文土器、11は櫛状工具による羽状の条痕文を施した桑ノ丸式土器である。

SC35

D区I11グリッドで第VI層の掘り下げ中にVI層上面で検出。長径165cm、短径110cmの不整形プランを呈し、埋土はVI層土と褐色土が混ざった状態で確認された。深さは約40cmを測る。埋土中位から斜方向の貝殻条痕文を施した土器片(1)が出土した。

なお、SC34、SC35は遺構の形態、出土遺物から、堅穴住居跡の可能性も伺える。

(2) 集積遺構 (SI)

縄文早期の集石遺構として16基(VI層で15基、V層で1基)が確認され、その分布は調査区全体に広がっている。遺構の形態は次の3つに分類される。

I類(掘り込みがなく、配石を持たないもの)、II類(掘り込みがあり、配石を持たないもの)、III類(掘り込みがあり、配石を持つもの)。16基のうち、I類6基(23号～26号、28号、31号)、II類3基(27号、29号、38号)、III類7基(30号、32号～37号)が確認された。

いずれも構成礫は円礫または破碎礫が利用され、一部には熱を受けたためと思われる赤変がみられた。

SI23

A区I13グリッドの第VI層面掘り下げ中に検出。長径約200cm、短径約130cmの範囲に礫が分布しており、ゴボウ耕作のトレンチャーのため底面まで筋状に攪乱を受けて、はっきりした全体形は確認できなかった。構成礫は約90個の赤化した円礫、破碎礫からなり、分散した状態で検出された。また、掘り込みの状態もはっきり確認できず、配石も認められなかった(I類)。構成礫の間から斜方向の貝殻条痕文を施した土器片(5)が確認された。

SI24

B区南端のC17グリッドで、表土除去後の第VI層面で検出。長径約170cm、短径約100cmの範囲に礫が分散していた。トレンチャーのため底面まで筋状の攪乱を受け、全体形は確認できなかった。約80個の構成礫が2つに分かれる形で集中しており、2基の集石遺構である可能性も伺える。24号、25号、26号と3基が並ぶ形で位置しているが、いずれも削平を受けており、また掘り込み、配石とも確認できなかった(I類)。

SI25

B区C17グリッドで、表土除去後の第VI層面で検出。SI24の西側約2mに位置し、長径約85cm、短径約70cmの不整形プランを呈する。遺構上部は耕作のための削平を受けて、そのために礫が分散したと考えられる。約70個の円礫、破碎礫が幾分集中する形で確認された（I類）。

SI26

B区B17グリッドで、表土除去後の第VI層面で検出。SI25の西側約2mに位置し、長径約60cm、短径約40cmの範囲に約40個の礫が集中する形で確認された。トレンチャーのため底面まで筋状に攪乱を受けているが、円形あるいは楕円形のプランの一部と考えられる（I類）。

SI27

C区I5グリッドで表土除去後、第VIa層で検出。トレンチャーのため全体の1/3が喪失しているが、長径約90cm、短径約70cmの楕円形のプランと考えられる。検出面からの深さ約20cmの明確な皿状の掘り込みが見られ、構成礫の中央に約20cmの大型の破碎礫が1個みられたが、配石は確認できなかった（II類）。

SI28

C区I5グリッドで表土除去後の第VIa層で、SI27の南東側約2mの位置で検出された。トレンチャーのために、底面まで筋状に攪乱を受けている。長径約80cm、短径約70cmの範囲に約90個の礫が分断される形で検出された。明確な掘り込み、配石は確認できなかった（I類）。

SI29

C区E7グリッドで表土除去後、第VI層面で検出。直径約100cmの円形プランを呈する。深さ約20cmの皿状の掘り込みの中に、約210個の礫が集中し、その大半は赤変が認められた。構成歴の中央に約20cmの大型の礫が1個みられたが、配石は確認できなかった（II類）。

SI30

C区E7グリッドで第V層掘り下げ中に検出。直径約130cmの円形プランを呈する。深さ約30cmの皿状の掘り込みの中に、約250個の礫が集中する形で配置されていた。配石は底面に20cmの大型礫が1個、その周囲を囲むように礫が配置されていた（III類）。

SI31

C区G5グリッドで表土除去後、第VIb層面で検出。周囲にSC29、SP2が分布している。トレンチャーのため、底面まで筋状の攪乱を受けている。長径約70cm、短径約50cmの範囲に約40個の礫が認められたが、明確な掘り込みや配石は確認できなかった（I類）。

SI32

D区K12グリッドで第VI層掘り下げ中に検出。SI32からSI38まで7基の集石遺構が集中して分布する中に位置している。長径約115cm、短径約100cmの楕円形プランを呈し、深さ約25cmの掘り込みの中に礫が集中して位置されていた。また底面には20cm前後の大型の礫が6個、配石として認められた（III類）。構成礫の間から3条から4条の沈線分を施した土器片（6）が確認された。西側に約30個の礫の集中がみられるが、SI32と異なる集石遺構の可能性が伺える。

SI33

D区L12グリッドで第Ⅵ層掘り下げ中に検出。直径約190cmの円形プランを呈し、深さ約35cmの皿状の掘り込みの中に構成礫がびっしり集中した状態で認められた。また、礫間の埋土も硬くしまった黒色土が認められた。床面には20cm～30cm大型礫が10個、配石として認められた(Ⅲ類)。

SI34

D区K12グリッドで第Ⅵ層掘り下げ中に検出。SI33の西側約1.8mに位置している。長径240cm、短径200cmの楕円形プランを呈し、本遺跡で検出した集石遺構中もっとも大型のものである。深さ約40cmの掘り込みの中に構成礫が集中していること、埋土が硬くしまった黒色土であること、床面に大型の配石が認められることなど、SI33に類似している(Ⅲ類)。

SI35

D区L13グリッドで第Ⅵ層掘り下げ中に検出。長径約90cmの円形プランを呈する。深さ約20cmの皿状の掘り込みと底面に20cm前後の大型の配石が認められた(Ⅲ類)。構成礫の間から山形押型文を施した土器片(7)が確認された。

SI36

D区L12グリッドで第Ⅵ層掘り下げ中に検出。長径約150cm、短径約110cmの楕円形プランを呈し、深さ約15cmの皿状の掘り込み中に約160個の礫が集中して認められた。底面に20cm前後の大型の配石が認められた(Ⅲ類)。

SI37

D区L12グリッドで第Ⅵ層の掘り下げ中に検出。長径約170cmの円形プランを呈し、深さ約40cmの掘り込みの中に300個の礫が集中して認められた。底面にはやや小型の配石が認められた(Ⅲ類)。なおSI35からSI37の3基は調査の都合上、掘り込み中の構成礫を除去した状態で実測を行った。

SI38

D区K12グリッドで第Ⅴ層の掘り下げ中に、SI32と並ぶ位置で検出。長径80cm、短径65cmの楕円形プランを呈し、深さ約15cmの皿状の掘り込みの中に約60個の礫が集中する状態で配置されていたが、配石は認められなかった(Ⅱ類)。構成礫の間から楕円押型文を施した土器片(4)が確認された。

(3) 炉穴 (SP)

炉穴は単体で検出されたものが6基、切り合い状態で群をなすもの4群(32基)の計38基が確認された。いずれも耕作による擾乱を受け、遺構掘り込み面は不明である。また、一部はゴボウ耕作のトレンチャーのため、部分的に削平を受けている。

SP1-1～SP1-3

B区C17グリッドでⅤb層の掘り下げ中に検出。3基の切り合い状態が確認された。SP1-2にはブリッジが残り、炉部が煙道にかけての底面に焼土、炭化物が確認された。SP1-2からは貝殻条痕文を施した土器片(13)、SP1-3からは剥片(36)が出土した。

なお、SP-2の底面付近で認められた炭化物を試料として、放射性炭素年代測定を行ったところ、

^{14}C 年代B.P.9250 \pm 50年(補正 ^{14}C 年代B.P.9230 \pm 50年)の値が得られた。

SP2

C区G5グリッドで表土除去後、VI層面で検出。埋土はVIa層及び黒褐色土で、東端はトレンチで削平を受け喪失していた。西端底面には焼土の集中が確認でき、炉部と考えられる。

SP3

C区H2グリッドで表土除去後、第IX層面で検出。SP4の北側約1cmの位置で並ぶ形にある。どちらも削平を受け、遺構底部付近の一部しか確認できなかった。SP3からは土器片(16)、使用痕のある剥片(37)が出土した。

SP4

C区H2グリッドの第IX層で、SP3同様、遺構底部付近を部分的に確認。SP4からは土器片(15)が出土した。

SP5

P11グリッドで表土除去後に第VII層で検出。SP6の東側約30cmの位置に並ぶ形で検出。遺構上部と南半は削平を受けている。埋土は黒褐色土が主だが、遺構中央の底面に焼土が集中する部分があり、炉部と考えられる。SP5からは貝殻条痕文を施した土器片(14)が出土した。

SP6

P11グリッドで表土除去後に第VII層で検出。SP5同様遺構上部と南半は削平を受け、埋土状況もSP5に似る黒褐色土と一部焼土がみられた。炉部と判断できる明確な集中は確認できなかった。

SP7-1~SP7-10

N12、O12グリッドで第VIb層面の掘り下げ中に、10基の切り合い状態で検出。その中でもSP7-1からSP7-4は、SP7-1が最も構築時期が古く、その後SP7-2、SP7-3、SP7-4と構築されていったと考えられる。同じくSP7-6からSP7-8についても、SP7-6が古くSP7-8の順に構築されたと考えられる。また、SP7-1の南端、SP7-7の北端、SP7-8の北端、SP7-9の東端、SP7-10の北端の底面にはそれぞれ焼土の集中がみられ、炉部と考えられる。

なお埋土中より土器片(8~12、17~23、27、28)、石器(29~33、35、38)が出土している。特に、土器はIa類、Ib類の土器が多く、本遺構の構築時期を考える上で関連が伺える。

SP8

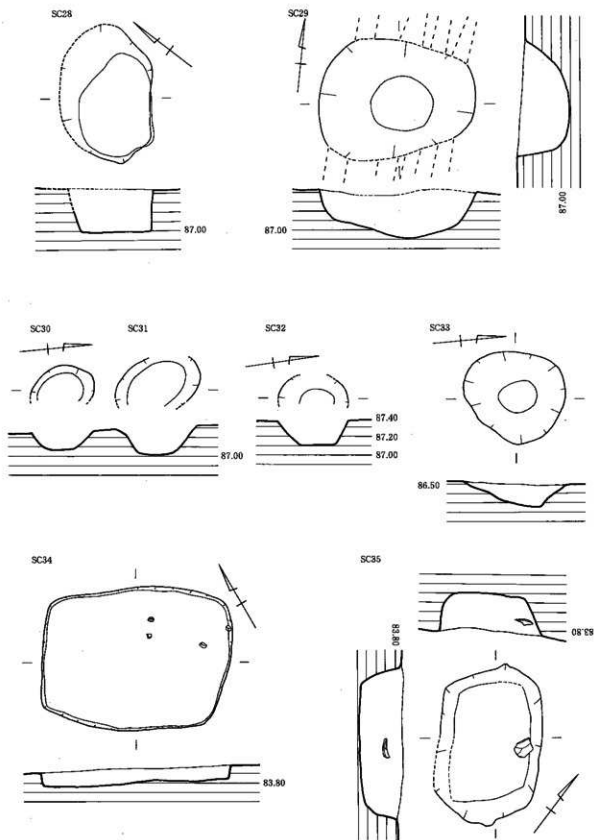
P12グリッドで表土除去後に第VIIb層で検出。北端底部には焼土の集中がみられ、炉部と考えられる。また、貝殻条痕文を施した土器片(24~26)が出土している。

SP9

K10グリッドで表土除去後に第IX層面でSP9-1からSP9-9にかけて9基の切り合い状態で検出。遺構上部は削平を受け確認できなかった。構築時期に関しては、SP9-1の一部を再利用してSP9-2、SP9-3を構築したこと、同じくSP9-7からSP9-8、SP9-9を構築していったことが伺える。また、SP9-1の東端、SP9-2の北端、SP9-7の西端、SP9-9の南端の底部には焼土の集中がみられ、炉部と考えられる。埋土中から使用痕のある剥片(34)が出土している。

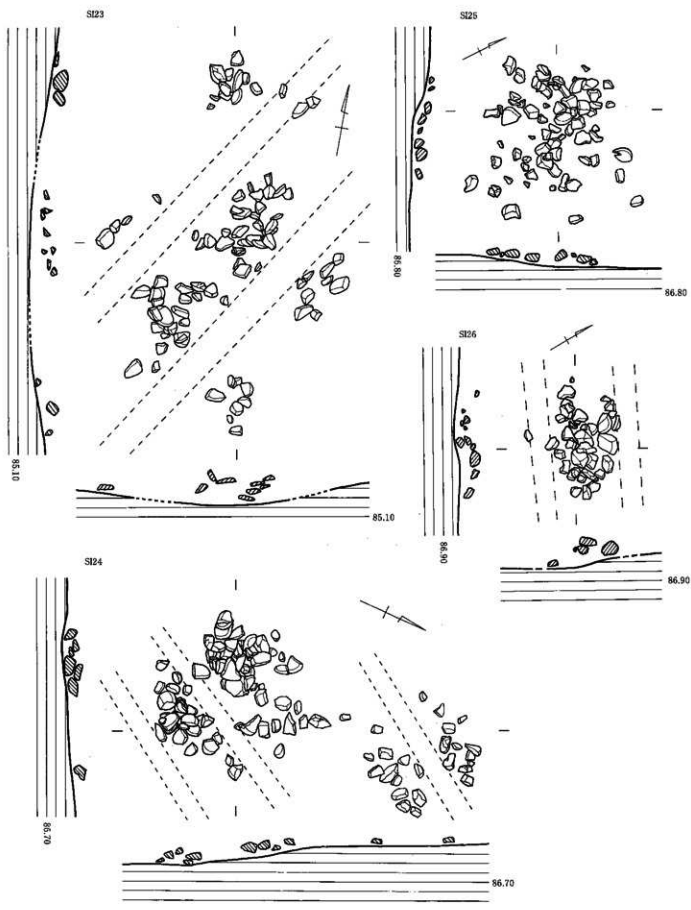
SP10

L10グリッドで表土除去後に第IX層面でSP10-1からSP10-10にかけての切り合い状態で検出。SP9同様、削平のため遺構上部は確認できなかった。構築時期に関してはSP10-1の一部を利用してSP10-2、SP10-3を再構築したこと、同じくSP10-5の後にSP10-4、SP10-6、SP10-7を再構築していったことが伺える。また、SP10-9の南端、SP10-10の北端の底部には焼土の集中がみられ、炉部と考えられる。

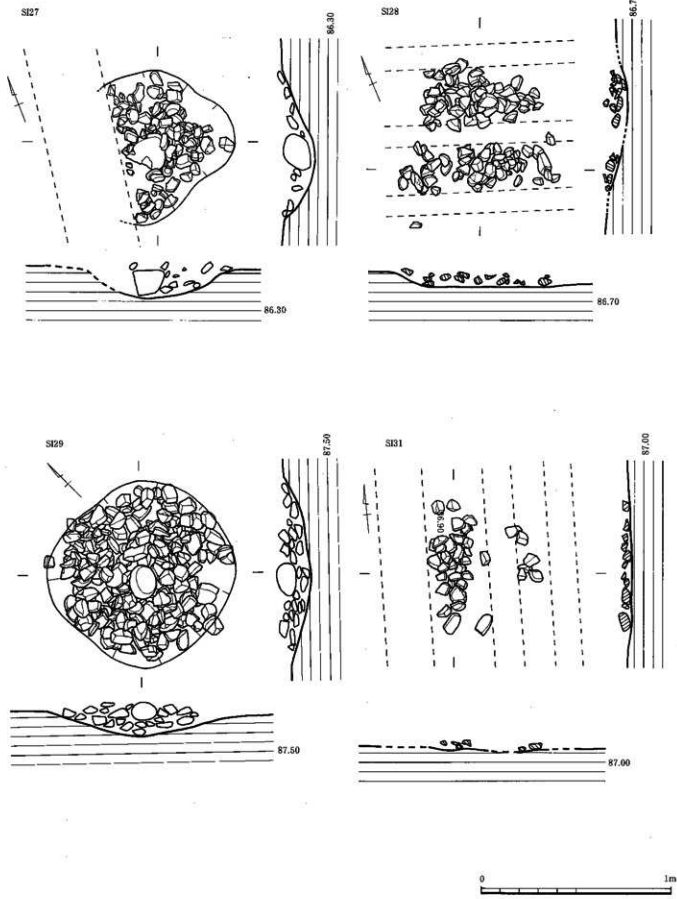


第1圖 上ノ原遺跡縄文早期土坑実測図

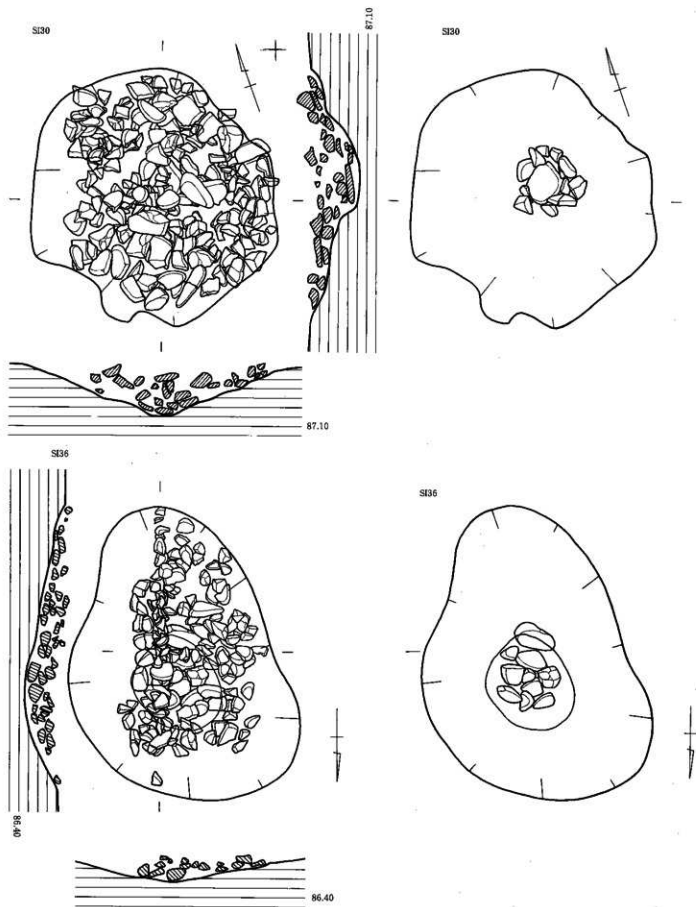




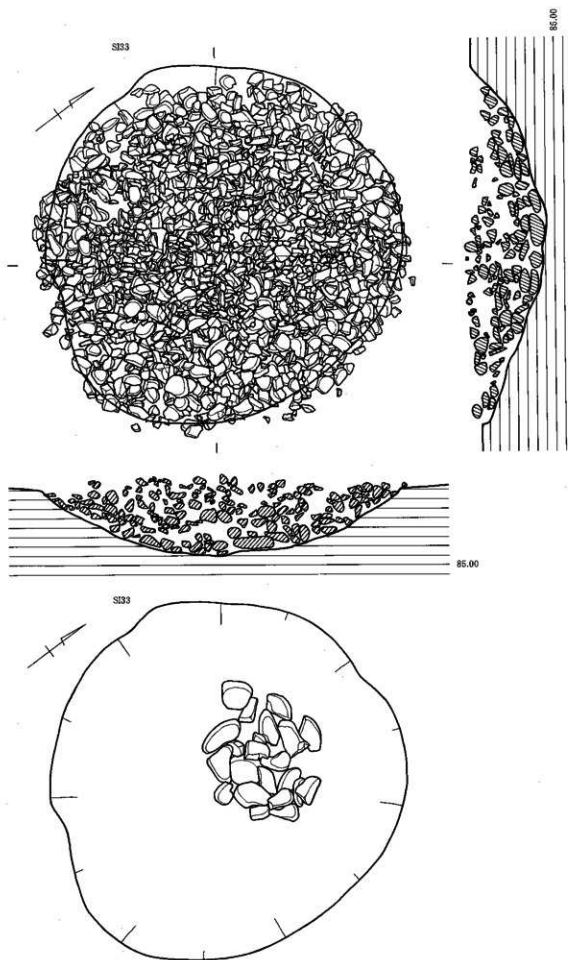
第2図 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(1)



第3圖 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(2)

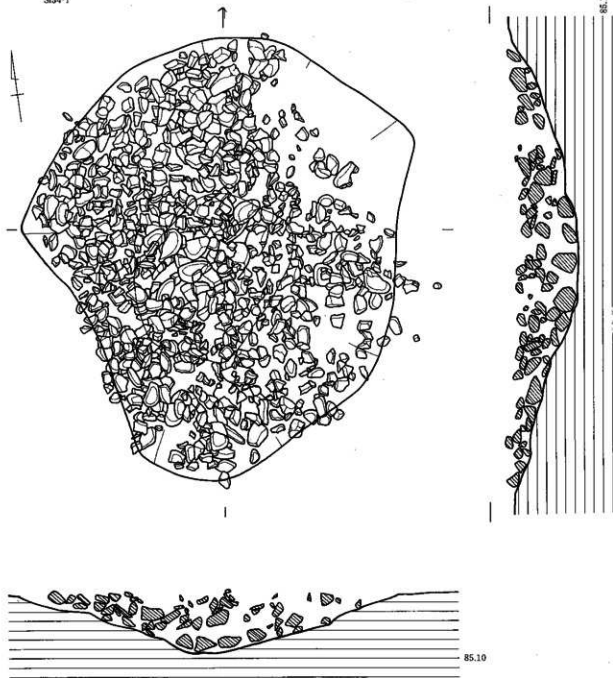


第4図 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(3)



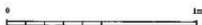
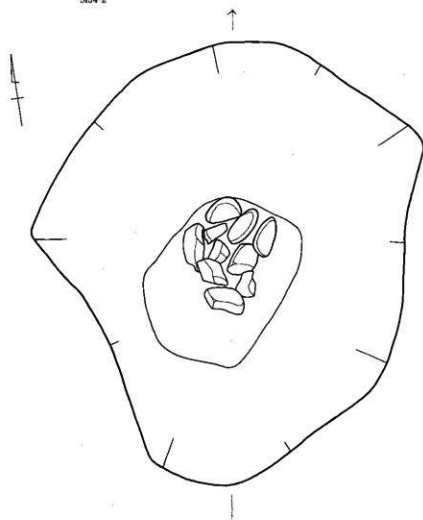
第5図 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(4)

SI34-1

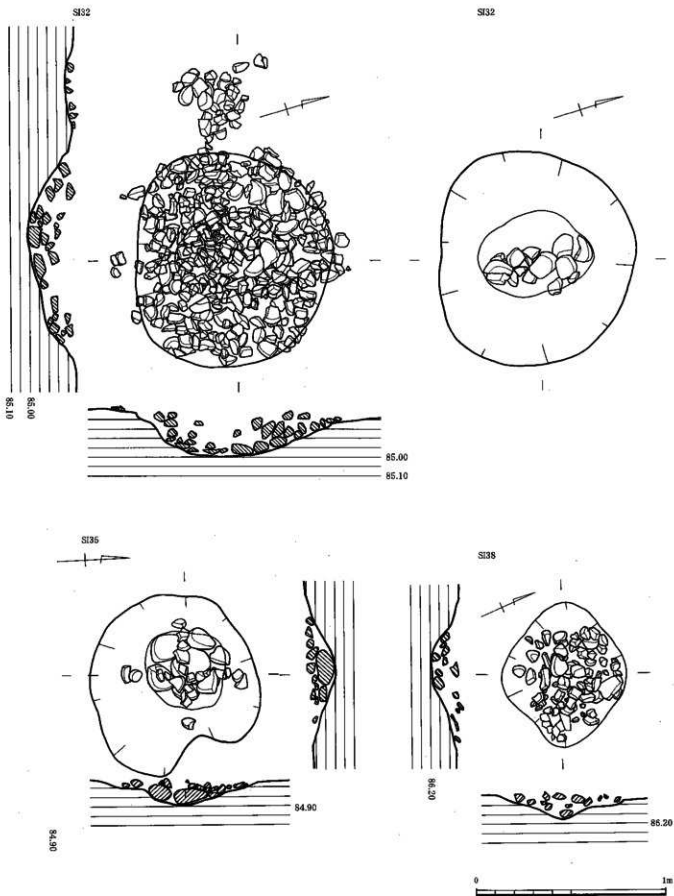


第6図 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(5)

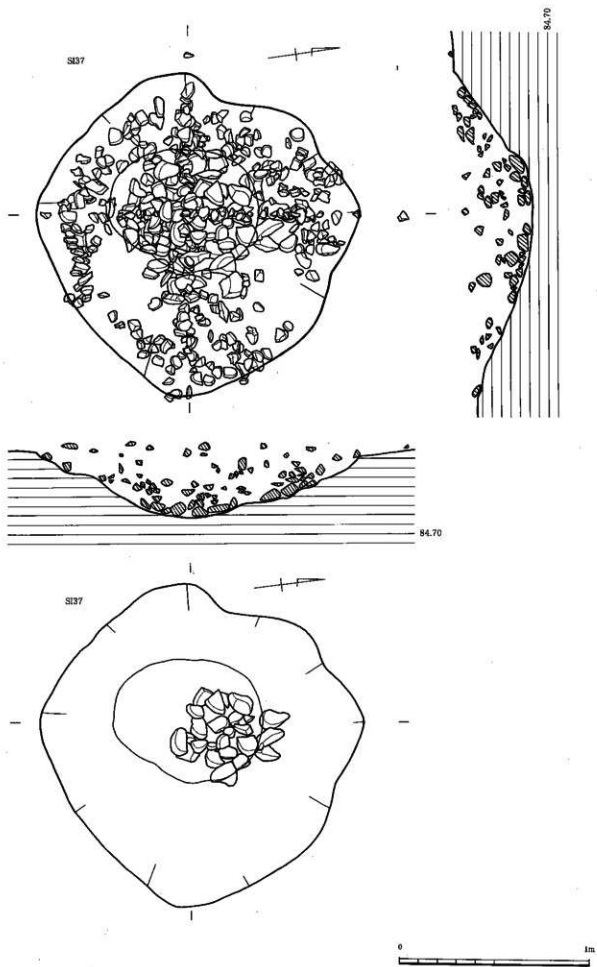
SI34-2



第7図 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(6)



第8圖 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(7)



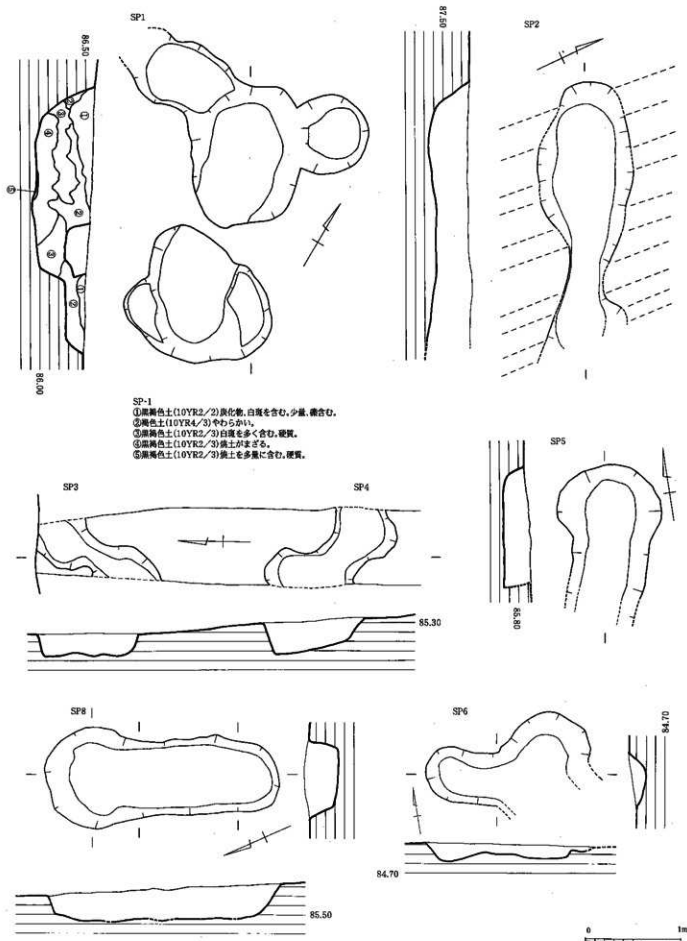
第9圖 上ノ原遺跡縄文早期集石遺構実測図(8)

表30 上ノ原遺跡・土坑(縄文早期)一覽表

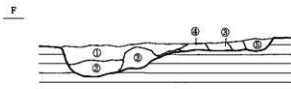
番号	遺構番号	位置	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物	備考
1	SC28	C14	VI層	145	90	45		
2	SC29	G5,H5	VI層b	165	90	50		
3	SC30	H5	VI層b	70	50	20		
4	SC31	H5	VI層b	95	90	30		
5	SC32	H5	VI層b	70	50	25		
6	SC33	G2	③層	110	90	20		
7	SC34	O13	VI層b	200	150	15	土器片 (2, 3)	
8	SC35	N13	VI層	165	110	40	土器片 (1)	

表31 上ノ原遺跡・集石一覽表

番号	遺構番号	位置	検出面	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底込	積数	配石	形状	炭化物	遺物	備考
1	SI23	I13	VI層	200	130	10	-	90	無	疎	無	土器片 (5)	
2	SI24	C17	VI層	170	100	0	-	80	無	疎	無		
3	SI25	C17	VI層	85	70	0	-	70	無	疎	無		
4	SI26	B17	VI層	60	40	0	-	40	無	疎	無		
5	SI27	I5	Via層	90	70	20	有	-	無	密	無		
6	SI28	I5	Via層	80	70	10	-	90	無	密	無		
7	SI29	E7	VI層	100	100	20	有	210	無	密	無		
8	SI30	E8	VI層	130	130	30	有	250	有	密	無		
9	SI31	G5	Vib層	70	50	0	-	40	無	疎	無		
10	SI32	K12	VI層	115	100	25	有	-	有	密	有	土器片 (6)	
11	SI33	L12	VI層	190	190	35	有	-	有	密	有		
12	SI34	K12	VI層	240	200	40	有	-	有	密	有		
13	SI35	L13	VI層	90	90	20	有	-	有	密	有	土器片 (7)	
14	SI36	L12	VI層	150	110	15	有	160	有	密	有		
15	SI37	L12	VI層	170	170	40	有	300	有	密	有		
16	SI38	K12	VI層	80	65	15	有	60	有	密	有	土器片 (4)	

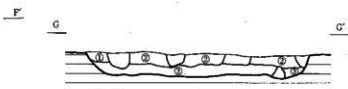


第10図 上ノ原遺跡縄文早期炉穴(1)



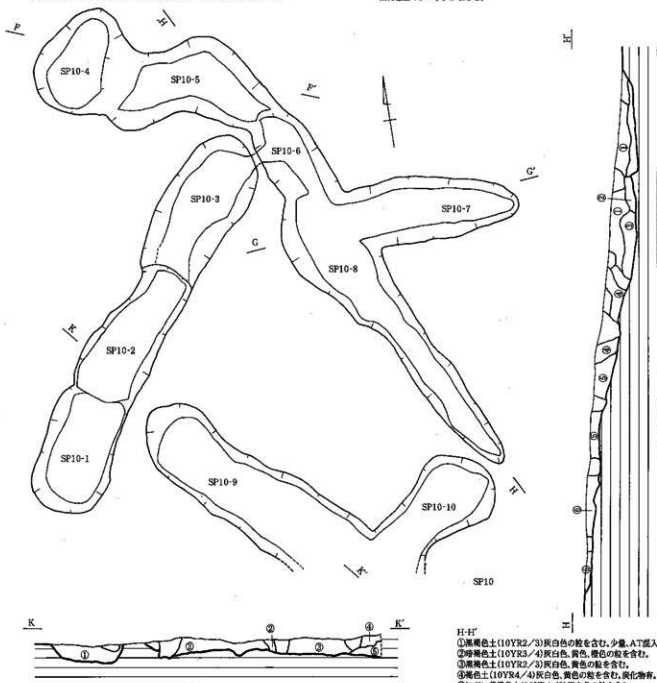
F-F'

- ①暗褐色土(10YR3/2)やわらかく、湿水性有。
- ②暗褐色土(10YR3/3)灰白色、黄色の火山灰を含む、硬く、ブロック状の固まりになる。
- ③黄褐色土(10YR5/8)さらに、ブロック状のATがはいる。
- ④にぶい黄褐色土(10YR4/3)最少の灰白色の火山灰を含む、やわらかい。
- ⑤暗褐色土(10YR3/1)灰白色、ATの火山灰まじり、ザラザラした土質。



G-G'

- ①暗褐色土(10YR3/4) やわらかく、黄褐色土のブロックがまじる。
- ②褐色土(10YR4/4) 灰白色、黄色の火山灰を含む、黄褐色土のブロックが混入。
- ③暗褐色土(10YR3/3) 白色、黄色の火山灰を含む、黄色褐色土、黄褐色土のブロックがまじる。



H-H'

- ①黄褐色土(10YR2/3)灰白色の粒を含む、少量、AT混入。
- ②暗褐色土(10YR3/4)灰白色、黄色、褐色の粒を含む。
- ③暗褐色土(10YR2/3)灰白色、黄色の粒を含む。
- ④褐色土(10YR4/4)灰白色、黄色の粒を含む、炭化物有。
- ⑤にぶい黄褐色土(10YR4/3)灰白色の粒を含む。
- ⑥褐色土(10YR4/4)AH主体、炭化物有。

0

1m

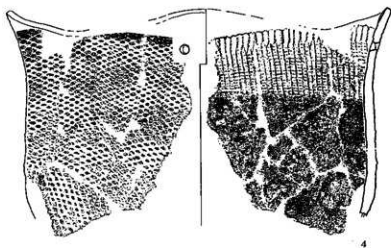
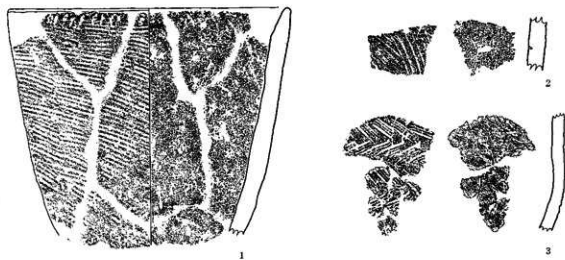
K-K'

- ①暗褐色土(10YR3/4) 灰白色の粒を含む、硬質。
- ②暗褐色土(10YR3/4) 灰白色、藍色の粒を含む、炭化物有、硬質。
- ③暗褐色土(10YR3/3) 灰白色、黄色、褐色の粒を含む、炭化物、焼土有、硬質。
- ④褐色土(10YR4/4) 灰白色、黄色、褐色の粒を含む、炭化物、焼土有、硬質。
- ⑤焼土層 全体にオレンジ色、硬質。

第11図 上ノ原遺跡縄文早期炉穴(2)

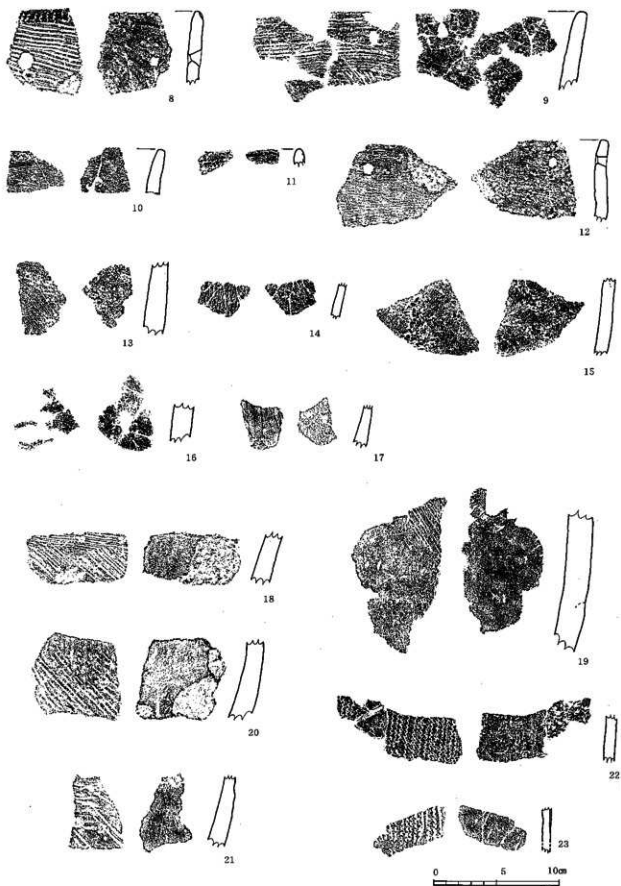
表32 上ノ原遺跡・炉穴一覽表

番号	遺構番号	位置	検出面	長径×短径×深さ (cm)	積土	炭化物	遺物	備考
1	SP1	SP1-1	C17	Vib層下位	100×60×15	-	-	
2		SP1-2	C17	Vib層下位	300×110×60	有	有	(13)
3		SP1-3	C17	Vib層下位	120×70×20	-	-	(36)
4	SO2		G5	V層下位	280×100×30	有	-	
5	SO3		H2	④層下位	120×50×20	-	-	(16×37)
6	SO4		H2	④層下位	90×40×30	-	-	(15)
7	SP5		P11	V層	160×80×30	有	有	(14)
8	SP6		P11	V層	170×50×20	有	-	
9	SP7	SP7-1	N12	Vib層	340×100×20	有	-	(18)
10		SP7-2	O12	Vib層	290×80×50	-	-	(8)
11		SP7-3	O12	Vib層	150×90×20	-	-	(19×22×23)
12		SP7-4	O12	Vib層	230×110×60	-	-	(11×38)
13		SP7-5	O12	Vib層	220×110×50	-	-	(9×10×21) (27×35)
14		SP7-6	O12	Vib層	200×100×75	-	有	
15		SP7-7	O12	Vib層	180×110×70	有	有	(30)
16		SP7-8	O12	Vib層	250×120×80	有	有	(20×29×33)
17		SP7-9	O12	Vib層	225×110×70	有	有	(12×28×32)
18		SP7-10	O12	Vib層	275×100×70	有	有	(28×31)
19	SP8		P12	Vib層	250×110×30	有	有	(24×26×26)
20	SP9	SP9-1	K10	Ⅹ層	230×80×15	有	有	(34)
21		SP9-2	K10	Ⅹ層	135×80×25	有	有	
22		SP9-3	K10	Ⅹ層	150×80×45	-	-	
23		SP9-4	K10	Ⅹ層	95×55×30	-	-	
24		SP9-5	K10	Ⅹ層	110×80×25	-	-	
25		SP9-6	K10	Ⅹ層	180×120×70	-	-	
26		SP9-7	K10	Ⅹ層	130×80×60	有	-	
27		SP9-8	K10	Ⅹ層	130×80×55	-	-	
28		SP9-9	K10	Ⅹ層	190×80×40	有	-	
29	SP10	SP10-1	L10	Ⅹ層	130×75×20	-	-	
30		SP10-2	L10	Ⅹ層	210×70×20	-	-	
31		SP10-3	L10	Ⅹ層	150×80×15	-	-	
32		SP10-4	L10	Ⅹ層	120×70×10	-	-	
33		SP10-5	L10	Ⅹ層	160×80×35	-	-	
34		SP10-6	L10	Ⅹ層	110×60×20	-	-	
35		SP10-7	L10	Ⅹ層	180×70×20	-	-	
36		SP10-8	L10	Ⅹ層	360×80×25	-	-	
37		SP10-9	L10	Ⅹ層	250×65×20	有	-	
38		SP10-10	L10	Ⅹ層	140×70×25	有	-	

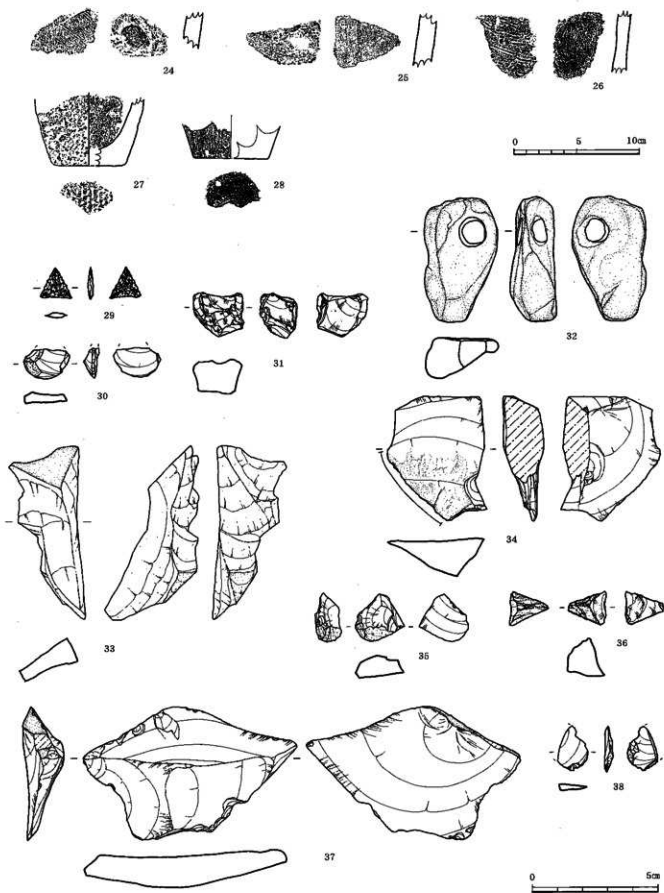


0 5 10cm

第14圖 上ノ原遺跡縄文早期遺構内遺物(1)



第15圖 上ノ原遺跡縄文早期遺構内遺物(2)



第16圖 上ノ原遺跡縄文早期遺構内遺物(3)

表23 上ノ原遺跡 遺構出土土器観察表(1)

図番号	出土遺構	層階	部位	文様および図案		色 調		胎 土	分 類	備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
1	SC35	深鉢	口縁部	口縁部上端に貝殻条線刻文、下位に斜方向の貝	丁寧なナデ	橙	にぶい黄褐色	1cm以下の黒色粒、白色粒を含む。	Ib	スズ付蓋
2	SC34	深鉢	胴部	斜方向の貝殻条線文	丁寧なナデ	透黄褐色	橙	1cm以下の白色粒、光沢黒色粒を含む。	I	
3	SC34	深鉢	胴部	工具による横方向の段状文	横または斜方向のナデ、あるいはヘラナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	1cm以下の白色粒を多く含む。	III	
4	SI38	深鉢	口縁部	横方向の横円押型文	上層に縦位の縦注線文、下位に格子目押型文、その下にヨコナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	4cm以下の灰白色粒、透黄褐色粒を含む。	Nb	蓋状口縁部、赤漆一層入付蓋、内面灰化物付蓋
5	SI23	深鉢	胴部	斜方向の貝殻条線文	丁寧なナデ	橙	にぶい黄褐色	1cm以下の灰白色粒、灰褐色粒を含む。	I	
6	SI32	深鉢	胴部	3~4条の沈線文	ヨコナデ	橙	黒褐色	1cm以下の黒色粒を含む。	VI	
7	SI35	深鉢	胴部	横方向の山形押型文	ナデ	珪濁	にぶい黄褐色	2cm以下の柱状の光沢黒色粒を含む。	Iva	
8	SP7-2	鉢	口縁部	口縁部上端に貝殻条線刻文、下位に斜方向の貝	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色粒、透黄褐色を含む。	Ib	スズ付蓋
9	SP7-5	深鉢	口縁部	横および斜方向の貝殻条線文	横方向のヘラミガキ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1.5cm以下のにぶい黄褐色粒を含む。	Ic	灰化物、スズ付蓋
10	SP7-5	深鉢	口縁部	斜方向の条線文	横方向のヘラミガキ	暗灰色	灰黄褐色	1.5cm以下の乳白色半透明の砂粒を含む。	Ic	スズ付蓋
11	SP7-4	深鉢	口縁部	横方向の貝殻条線刻文	横方向のヘラミガキ	橙	橙	1cm以下の黒色透明粒を含む。	I	スズ付蓋
12	SP7-9	深鉢	口縁部	横および斜方向の工具によるナデ	ナデ、磨面痕らしい窪み	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3cm以下の褐色、灰色砂粒、1cm以下の透明粒を含む。	Ic	
13	SP1-2	深鉢	胴部	斜方向のナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	1cm以下の乳白色粒を含む。	VI	スズ付蓋
14	SP5	深鉢	胴部	縦方向の条線文	丁寧なヨコナデ		にぶい黄褐色	1cm以下の乳白色、褐色透明の砂粒を含む。	VI	スズ付蓋
15	SP4-1	深鉢	胴部	縦方向のナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐色	3cm以下の褐色、灰色砂粒、1cm以下の黒色透明粒を含む。	VI	
16	SP3-1	深鉢	胴部	風化が著しいミガキ	ミガキ	灰褐色	にぶい赤褐色	2cm以下の灰色砂粒を含む。	VI	
17	SP7-10	深鉢	胴部	縦方向のミガキ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	白色、黒色光沢粒を含む。	VI	
18	SP7-1	深鉢	胴部	横および斜方向の条線文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1.5cm以下の透黄褐色粒を含む。	I	
19	SP7-3	深鉢	胴部	朱痕の上からナデ	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	透黄褐色	3cm以下の赤褐色砂粒、1cm以下の透明粒を含む。	I	
20	SP7-8	深鉢	胴部	斜方向の貝殻条線文	斜方向のナデ	にぶい黄褐色	灰褐色	6mm以下の褐色の粒、2.5mm以下の透明粒、1cm以下の褐色、黒色粒を含む。	I	
21	SP7-5	深鉢	胴部	横および斜方向の貝殻条線文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1cm以下の白色粒を多く含む。	I	
22	SP7-3	深鉢	胴部	縦位の貝殻条線刻文	たてナデ	橙	灰黄褐色	1cm以下の透明粒を含む。	II	
23	SP7-3	深鉢	胴部	横形押し付き穿穿の下位に縦位の貝殻条線刻文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黒色光沢粒、乳白色粒を含む。	Ia	
24	SP6-1	深鉢	胴部	斜方向の貝殻条線文	ミガキ	珪濁	にぶい黄褐色	1cm以下の白色粒を含む。	I	
25	SP6-2	深鉢	胴部	ナデ	縦方向のミガキ	橙	にぶい黄褐色	1cm以下の黒色粒を多く含む。	VI	
26	SP6-3	深鉢	胴部	斜方向の貝殻条線文	斜方向のミガキ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	1.5cm以下の石灰、1cm以下の輝石を含む。	I	
27	SP7-5	深鉢	底部	風化が著しいミガキ	丁寧なたてナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1cm以下の灰色微細粒を含む。	底部	磨石粒、高砂小窪
28	SP7-9	深鉢	底部	ミガキ	風化が著しく不明	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2cm以下の石灰粒、1cm以下の輝石を含む。	底部	磨面していないナデ

表34 上ノ原遺跡 遺構内出土遺物観察表(2)

図番号	出土遺構	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
29	SP7-8	石鏃	12.60	12.80	2.40	0.2	黒曜石	片鏃基部欠損
30	SP7-7	剥片	1.20	1.81	0.60	0.8	黒曜石	
31	SP7-10	剥片	1.70	2.00	1.50	5.0	黒曜石	
32	SP7-9	骨鏃品	4.95	2.90	1.85	31.0	ホルンフェルス	穿孔有り
33	SP7-8	剥片	6.90	3.00	1.00	26.0	ホルンフェルス	
34	SP9	使用痕剥片	4.95	3.95	1.60	22.2	流紋岩f	
35	SP7-5	剥片	1.90	1.95	1.10	2.7	黒曜石	
36	SP1-3	剥片	1.30	1.50	1.50	1.3	黒曜石	
37	SP3-2	剥片	5.30	8.50	1.60	38.4	流紋岩c	
38	SP7-4	剥片	1.80	1.20	0.35	0.3	黒曜石	

第2節 遺物

縄文時代早期の遺物は、第Ⅳ層（アカホヤ層）直下の第Ⅴ層及びⅥa層を主な包含層として、土器片約1100点、石器類約1530点が出土した。また、遺物のうち一部は遺構内で確認されているが、それらは前述の遺構編で触れた通りである。

(1) 土器

本遺構では出土した土器は、器面に施された文様、形態上の特徴をもとにⅠ類からⅦ類に分類できる。その中でもⅠ類（貝殻条痕文土器）、Ⅱ類（貝殻条痕文円筒形土器、楔形突帯文土器）で全体の大半を占めている。また、分布については図17に示す通りであるが、A区からD区にかけては地形の傾斜に関わらず、Ⅴ層、Ⅵ層面の残存範囲に広く分布しており、いくつかのまとまりが見られる。対してB区、C区での分布量は比較的少なく、空白部も見られる。

また、層的には、第Ⅴ層26%、第Ⅵ層71%、不明のもの3%の比率で出土している。

以下、類別にしたがって説明していく。

Ⅰ類（第18～19図 39～67）

器形は円筒形に類似するが、口縁部は幾分外反し、底部は胴部に比較して径が小さくなるのが特徴である。胴部器壁には、横または斜方向の貝殻条痕文が施され、口唇部および内面は丁寧なナデまたはミガキ調整が施されている。いわゆる「前平式土器」に類するが、胴部に対して底部がすぼまる器形から、宮崎市 椎屋形第2遺跡で1-a：前平式土器βに分類された土器に相当すると考えられる。

口縁部は口縁部上端の施文によって、

Ⅰa類…縦または斜方向の短沈線様の条痕文があるもの（39～47）

Ⅰb類…縦または斜方向の貝殻腹縁刺突文があるもの（48～53）

Ⅰc類…Ⅰa類、Ⅰb類のような口縁部上端の施文を有さないもの（54～62）

に細分することができる。

胴部施文には斜方向の貝殻条痕文（39～46など）、横方向の貝殻条痕文（47、49、54、57など）、縦方向と斜方向を組み合わせたもの（56）がある。

63～67は、Ⅰ類土器の底部と考えられるもので、平底を呈する。いずれも内面、外面ともに丁寧なナデ、またはミガキが施されている。63～65は、外面に胴部から続く斜方向の貝殻条痕文とその下位に丁寧なナデが施され、胴部径に比較して底部径が著しく小さくなる。66、67は胴部器壁に厚みがある。

Ⅱ類（第20図 68～80）

器形は円筒形を呈する。口唇部には連続刻みが施され、口縁部上端の外面には、横または斜方向の貝殻腹縁刺突文を施し、その下位に楔形突帯が貼り付けられているのが特徴である。また、器壁はⅠ類に比べて幾分薄手である。

口縁部の施文によって、次の3類に細分できる。

IIa類…楔形突帯が連続して貼り付けられ、胴部器壁に、縦または斜方向の貝殻復縁刺突文、あるいは横方向の貝殻条痕文が施されている。いわゆる「知覧式土器」といわれるもの。(68～71)

IIb類…楔形突帯があり、胴部器壁に貝殻復縁による押し引き文が施されている。いわゆる「吉田式土器」といわれるもの。(80)

IIc類…楔形突帯を有しないが、口唇部の刻みと口縁部上位の貝殻腹縁刺突文が、IIa類、IIb類に似るもの。(72～74)

胴部片の中で、74は横方向の条痕文と菱形の貝殻腹縁刺突文からIIc類と考えられるが、75～77は貝殻腹縁刺突文の施文からIIa類に類すると考えられる。

底部(78、79)はいずれも平底で、78の器壁には縦位の刻みが、79は斜方向の貝殻条痕文が施されている。器形、色調、胎土の状態から、II類土器の底部と判断した。

III類 (第20図 81～83)

器形は円筒形を呈し、櫛状工具または貝殻復縁によって羽状もしくは斜方向の沈線文が施されている。口唇部はていねいなナデまたはミガキ調整が、内面は粗いミガキが施されている。口縁部がやや内湾し、口唇部がやや内側に傾くもの(81、82)、口唇部が丸みを帯び、直口する口縁部のもの(83)が見られる。いわゆる「桑ノ丸式土器」といわれるものである。

IV類 (第21図 84～95)

口縁部がゆるやかに外反する深鉢形の土器で、器壁外面に山形あるいは楕円の回転施文が施されている、いわゆる「押型文土器」である。施文の違いにより次の2つに分類される。

IVa類…器壁に縦または横方向の山形押型文を施したもの(84～88、95)

IVb類…器壁に横または斜方向の楕円押型文を施したもの(89～94)

84は器壁外面には方向の山形押型文を、内面には原体条痕と外面同様の横方向の山形押型文が施され、その下位は丁寧なヨコナデである。胴部片には縦方向(85、86)と、斜方向(87、88)の山形押型文が見られる。いずれも内面は、横または縦方向のナデ調整が施されている。

89の内面は縦位の原体条痕の下位に斜方向のナデが施されている。90の内面には縦位の原体条痕の下位に格子目押型文が施されている。SI38で確認された土器片(第14図)と同一個体と思われる。91は内面、外面ともに横または斜方向の楕円押型文が施されている。胴部片(92～94)の外表面には斜方向の楕円押型文が施され、内面は横または斜方向のナデである。

95は斜方向の山形押型文の施された底部で、いくぶん上げ底気味の平底である。底面には植物葉の圧痕が見られる、いわゆる「木の葉底」である。

IV類土器は、L12～M12グリッド、K13～M13グリッドに集中して分布しており、これはSI32～SI38の分布と一致している。

V類 (第21図 96~100)

直口する口縁部から胴部上位にかけて貝殻復縁による縦位の連続刺突文が施されている。口唇部および内面は丁寧なナデまたはミガキが施され、口唇部は丸みを帯びている。この類の土器は、熊本県山鹿市の蒲生・上ノ原遺跡等で「中原式土器」として報告されているものに相当すると考えられる。

96~98は口縁部上位に貝殻復縁刺突文、その下位に横ナデが施され、内面は丁寧なナデまたはヘラミガキが施されている。99、100は、貝殻復縁刺突文の下位に工具による押圧分が施され、内面は丁寧なナデまたはヘラミガキが施されている。

VI類 (第22図 101)

101は底部付近だけであるが、器壁外面には斜方向の丁寧なナデを施し、沈線で区画した中に捺糸文が施されている。内面にはヨコナデ調整が施されている。

いわゆる「塞ノ神式土器」である。

VII類 (第22図 102~108)

これまで分類したものに含まれないものや少量出土の土器を、この類に集めた。

いずれも器形は深鉢形を呈する。102は外面には斜方向の条痕文を施し、口唇部および内面はていねいなナデが施されている。103は内面、外面ともに横または斜方向のミガキが施された無文土器である。104は内面横または斜方向のナデの施された無文土器である。105は内面にはナデ、外面には粗いミガキの施された無文土器である。器壁に穿孔を意図したと思われる窪みがみられる。106は外面には斜方向の条痕文を施し、その上に3条の横方向の貝殻復縁刺突文が施されている。口唇部および内面はていねいなナデが施されている。

胴部片 (107、108) は、器壁に斜方向の条痕文が施され、内面には丁寧なヨコナデまたはミガキが施されている。

底部 (第22図 109~111)

VI類同様、所属不明の底部をまとめた。いずれも内面、外面ともにナデ調整が施され、109は、外面に一部斜方向の条痕文が見られる。109、110については、底部の厚みなどからI類土器の底部である可能性が伺える。

(2) 石器

石器類は約1530点が、主に第V層および第VI層より出土した。内訳は石器82点、剥片、碎片約1440点、石核6点である。遺構内出土を除く包含層出土の石器組成は、石鏃60点、スクレーパー3点、石錐2点、敲石、磨石14点、石皿、台石各1点、異形石器1点である。

使用された石材は、石鏃では47点が黒曜石、チャート5点、流紋岩類5点、その他(砂岩、ホルンフェルス等)3点であった。剥片、碎片の石材は、剥片約850点の内、黒曜石が約560点、チャート2点、流紋岩類約290点で、碎片では260点のうち、黒曜石240点、チャート5点、流紋岩類15

点であった。また、剥片の中でV層出土約250点の内、黒曜石を使用が230点、同じく砕片の中でV層出土約60点がすべてが黒曜石使用と、黒曜石の多用が見られた。

(3) 石 鏃 (第23～24図 112～149)

石鏃は、主に第V層で21点、第VI層36点、一部第IVa層でも3点の、計60点が出土している。分布を見ると、B区での39点出土し、特にグリッドC14では13点(V層7点、VI層6点)出土、その周囲のグリッドB14～B16、C15ではグリッド内で4～5点出土と集中がみられる。

石鏃はその形状により正三角形(I類)、二等辺三角形(II類)、異形鏃(III類)その他、未製品等(IV類)の4類に大別し、I類、II類についてはその基部の形態により平基(Ia類、IIa類)、浅い凹基(Ib類、IIb類)、V字形凹基(IIc類)、U字形凹基(II'd類)と細分した。以下、分類に従って説明したい。

Ia類 (第23図 112～116)

全体形が正三角形を呈しており、基部及び両側辺は直線的に作り出されている。基部に挟りは見られない。8点確認のうち6点がB区(V層4点、VI層2点)で、2点がD区第VI層で出土している。また、遺構内から出土の29も、本類に属すると考えられる。

112、113は両側辺が幾分丸みを持ち、114は直線的に作られている。115、116は幾分全体形が大きなタイプで、他のものに比べて厚みもある。また、116は正面に自然面が残り、全体形が幾分変則気味であるがIa類とした。

石材はすべて黒曜石が用いられている。

Ib類 (第23図 117～130)

全体形が正三角形を呈しており、基部には浅い挟りが見られる。側辺がやや膨らみ丸みを帯びるタイプと直線的なタイプがある。22点確認のうち18点がB区(V層7点、VI層11点)で出土、他にA区、D区から1点、C区から2点、いずれも第VI層から出土している。

117、118は本遺跡で出土した石鏃の中で最も小型なタイプで、薄手で重量も軽い。119、120、125は両側辺が幾分丸みを持つタイプ、123、124は両側辺が直線的なタイプで、先端部、脚端部が鋭く作られている。

石材は22点中、黒曜石が20点、チャートが2点である。

IIa類 (第23図 131～134)

全体形が二等辺三角形を呈しており、基部、側辺は直線的に作り出されている。基部に挟りは見られない。5点確認のうち3点がB区第V層で、2点がA区(IVa層、V層各1点)で出土している。

131、132はI類に類似した小型のタイプで、基部、両側辺ともに直線的である。133は幾分全体形が大きなタイプで両側辺、基部が丸みを持っている。134は全体形がさらに大型で、厚み、重量が増している。

石材は5点中3点に黒曜石が、133、134の2点に流紋岩類が用いられていた。

IIb類 (第23図 135~141)

全体形が二等辺三角形を呈しており、基部には浅い袈りがみられる。11点確認されたうち7点がB区(V層3点、VI層4点)で、C区VI層で3点、D区VI層で1点出土している。

135は小型で全体形はIIa類に類似しているが、両側辺がかなり丸みを持っている。136、137は直線的な側辺、鋭角的な脚端部などIb類に類似している。138~140は、幾分全体形が大型になるタイプで、厚みも増している。また、側辺が幾分内湾する。141は、全体形が大型で厚み、重量も増し、IIa類に類似している。

石材は11点中10点に黒曜石が、141にだけ流紋岩類が用いられていた。

IIc類 (第24図 142~144)

全体形が二等辺三角形を呈しており、基部にはV字状のやや深い袈りがみられる。また、これまでの類に比較して、全体形がかなり大型なタイプである。3点がA区、C区、D区の第VI層で1点ずつ出土している。

142は砂岩を用いて作られ、脚端が一部欠損しているが、基部の袈りの状態から本類に含めた。側辺が幾分、内湾するように作られている。143は黒曜石を用いて、脚端が鋭角的に作られている。144は、黒曜石を用いて作られ、基部の袈りがかなり深く、II d類に類似している。また両側辺がかなり内湾する。

II d類 (第24図 145~147)

全体形が二等辺三角形を呈しており、基部にはU字状の深い袈りがみられる。IIc類同様、全体形がかなり大型で、いずれも脚端が丸みを持っている。いわゆる「鉞形鏃」といわれるものである。3点がA区から2点(V層、VI層各1点)、B区第VI層から1点、出土している。

145はチャートを用いており、他の2点に比べて幾分小型なタイプである。基部の袈りは全体長の約1/3に及び、かなり深いU字状を呈している。146はホルンフェルスを用いており、本遺跡で出土した石鏃の中で最も大型なタイプである。基部の袈りは全体長の約1/4である。

147はチャートを用いた大型なタイプである。基部の袈りは全体長の1/2に近く、深いU字状を呈している。

III類 (第24図 148~149)

I類、II類に含まれなかったもので、2点がA区(IV層、VI層各1点)から出土している。

いずれも縦長の全体長に対して最大幅が狭くなっている。148は、両側辺が丸みをもって外湾し、わずかに脚部が張り出すように作られている。基部にはほとんど袈りがみられず、直線的に作られている。149は、両側辺が幾分丸みを持ち、基部にはU字状の袈りがみられる。

IV類

石鏃の未製品と思われるもの6点が、B区から4点（V層2点、VI層2点）D区から2点（IV層、VI層各1点）出土した。

石材は、5点が黒曜石、1点がチャートである。

(4) スクレイパー（第24図 150～152）

スクレイパーは3点が、A区から2点（V層1点、VI層1点）、D区から1点出土している。

150は、流紋岩aの厚みのある不定形剥片から作られている。1面には自然面が残り、右側縁と下縁に刃部加工がなされている。151は、流紋岩fの縦長剥片の欠損したものから作られている。両側縁に刃部加工がなされている。152は、黒曜石の厚みのある剥片から作られている。両側縁に刃部加工がなされている。

(5) 異形石器（第25図 153）

異形石器は1点が、B区第VI層から出土している。黒曜石の細長の縦長剥片の両側縁に加工を施して作られている。石錐同様に皮革、骨角器等に穿孔するためのものと思われる。

(6) 石錐（第25図 154、155）

石錐は2点が、D区（V層1点、VI層1点）から出土している。

154は、砂岩のやや扁平な円礫の両端に切り込みを施した、打欠石錐である。155は一部欠損がみられるが、154同様、砂岩の円礫を用いた打欠石錐である。

(7) 磨石、敲石（第25～26図 156～165）

磨石、敲石は14点が、C区第VI層から9点、B区から2点、（V層1点、VI層1点）、D区第VI層から2点、A区第VI層から1点、出土している。

156、157は、厚みのある砂岩、尾鈴酸性岩類の円礫を用い、両端に敲打痕と表面、裏面に広く摩擦痕がみられ、磨石と敲石に兼用されていたことが伺える。他に159、161、165も、同様の敲打痕と摩擦痕がみられ、磨石、敲石の兼用であったと考えられる。

160はやや扁平な砂岩の円礫を用い、正面と側面の一部に摩擦痕が残る磨石である。162、164は、厚みのある砂岩または尾鈴酸性岩類の円礫を用い、両面と一部側面に摩擦痕がみられる。

158は、厚みのある砂岩の円礫を用い、上部と側面に敲打痕が残る敲石である。163は、縦長棒状の砂岩円礫を用い、両端と側面に敲打痕が残る敲石である。

(8) 石皿（第27図 166）

石皿は、1点がC区第VI層で出土した。大型の砂岩の自然礫を用い、正面に広く摩擦痕がみられ、その中央に凹面部が残る。磨石、敲石（156、161、162）と同一層で出土しており、組み合わせて使用されていたことが伺える。

(9) 台石 (第27図 167)

台石は、1点がC区第VI層で出土した。大型のホルンヘルスの自然礫を用い、正面中央に敲打による凹面部がみられる。

(10) 石核 (第27図 168~170)

石核は、5点がB区第V層から出土した。

168~170は、いずれも黒曜石の石核である。168、169は、打面転移を繰り返し、複数の方向から剥離作業を行ったと考えられ、多様な方向の剥離面が残っている。対して、170は、主に上面とその180° 反対面を打面として剥離作業を行ったと考えられるもので、剥離面の方向が揃っている。

(11) 二次加工のある剥片 (第28図 171~177)

二次加工のある剥片は18点が、B区から11点 (V層6点、VI層5点)、C区第VI層から5点、D区第VI層から2点、出土した。

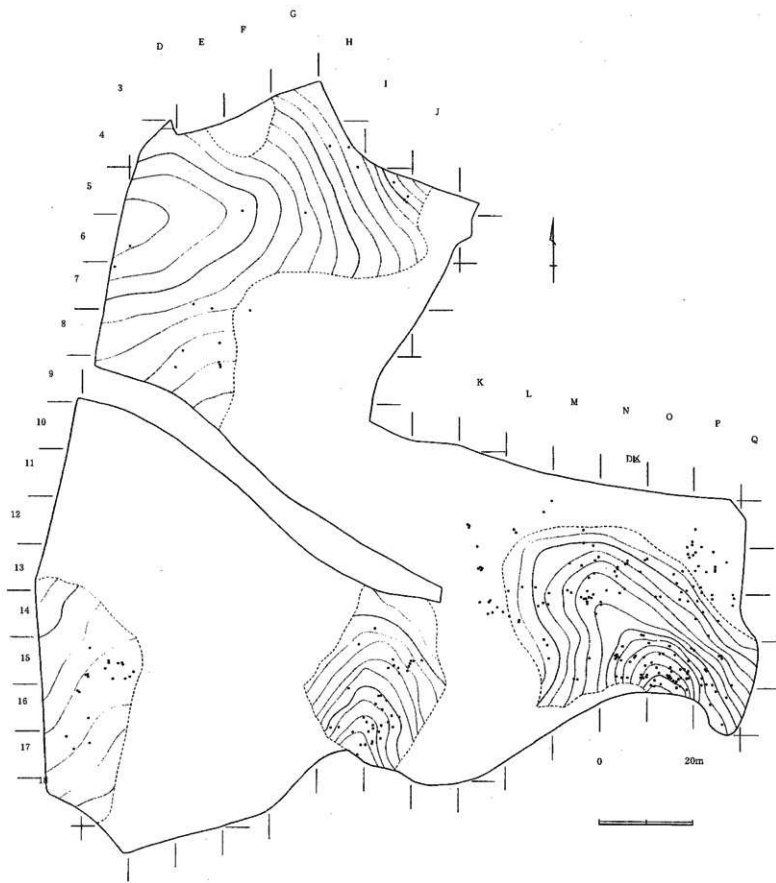
171は、流紋岩fの縦長剥片の下部及び側縁下部に加工が施されている。尖頭器類の基部加工を意識した可能性が伺える。172、174は流紋岩bの縦長剥片の両側縁に加工が施されている。173は、流紋岩eの厚みのある不定形剥片の正面及び左側縁に加工が施されている。175は、黒曜石の薄手の縦長剥片の下部から右側縁にかけて加工が施されている。176は、黒曜石のやや厚みのある不定形剥片の左側縁から下部にかけて加工が施されている。177は、黒曜石の縦長剥片の右側縁に加工が施されている。

(12) 使用痕のある剥片 (第28図 178~189)

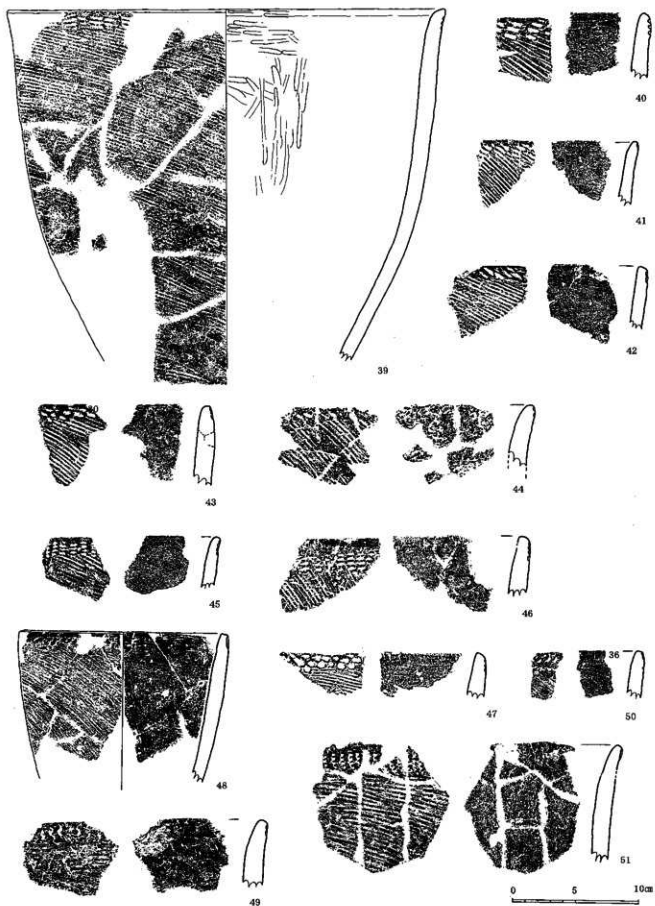
使用痕のある剥片は16点が、A区第VI層から1点、B区から3点、(V層1点、VI層2点)、C区第VI層から5点、D区第VI層から7点、出土した。

使用痕のある剥片には、縦長剥片の側縁に使用痕がみられるもの (178~180、182、183、188、189)、縦長剥片だが、全長に対して横幅が広がる寸詰まり幅広の剥片の側縁及び下部に使用痕がみられるもの (181、184、185~187)

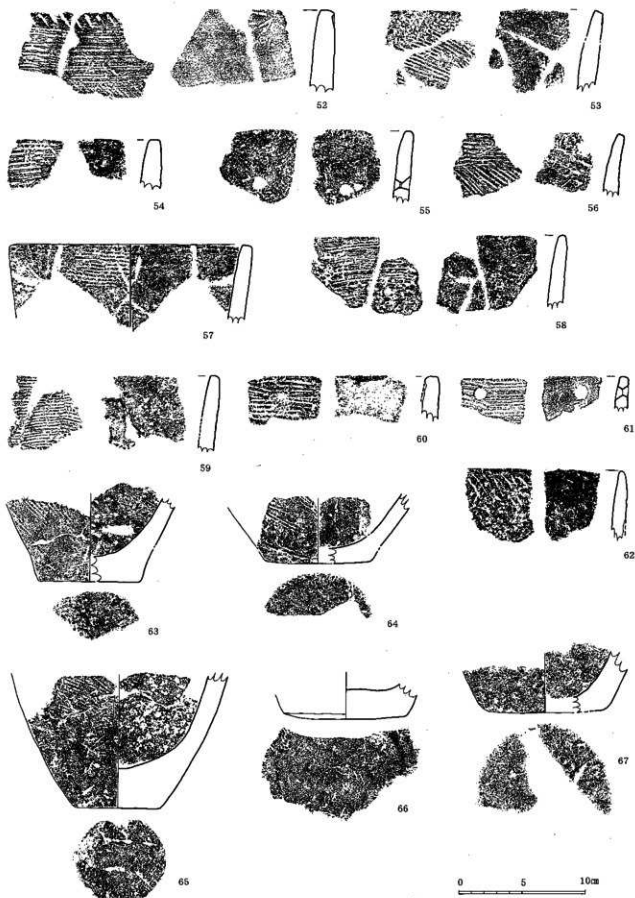
石材は、黒曜石が3点、流紋岩類が9点、ホルンヘルスが4点である。



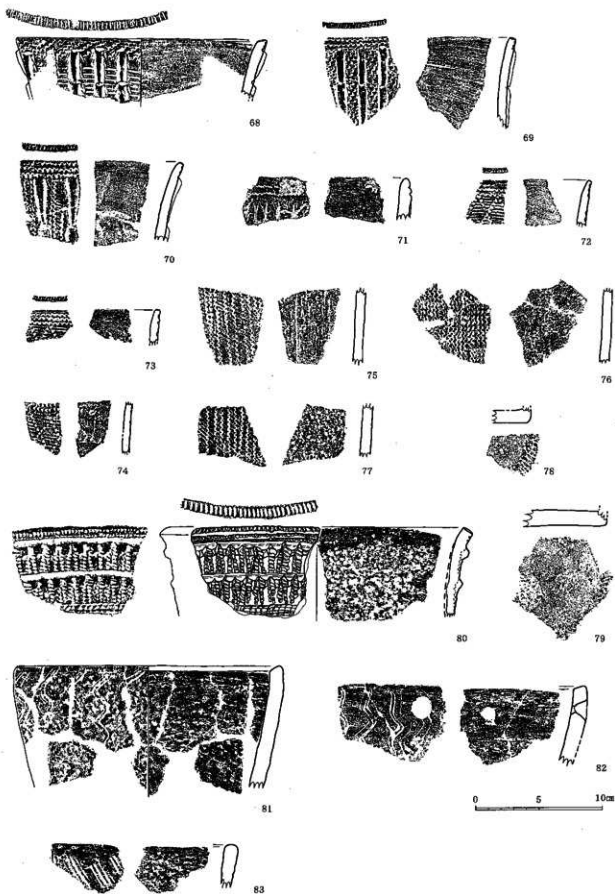
第17図 上ノ原遺跡縄文早期土器分布図



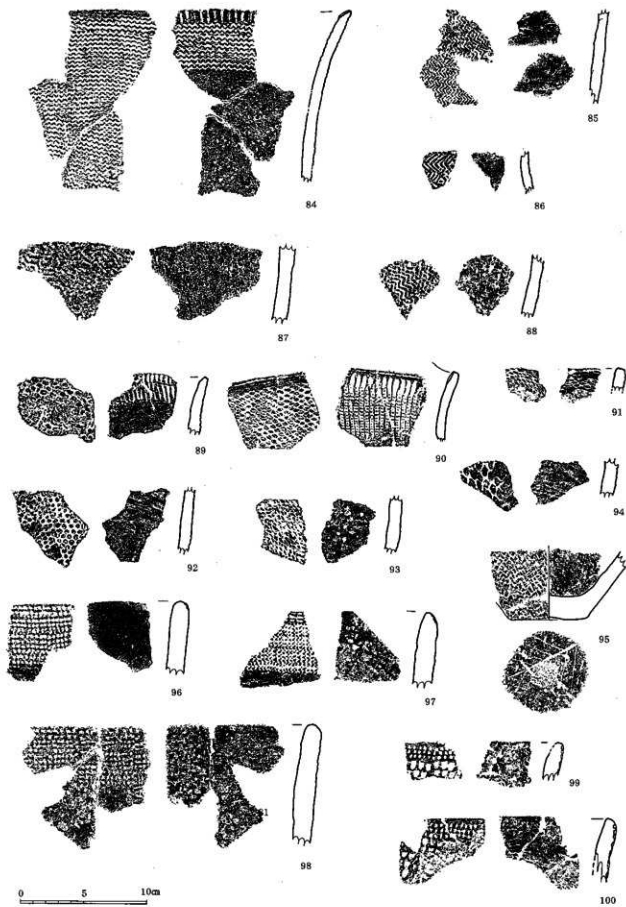
第18圖 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土土器実測圖(1)



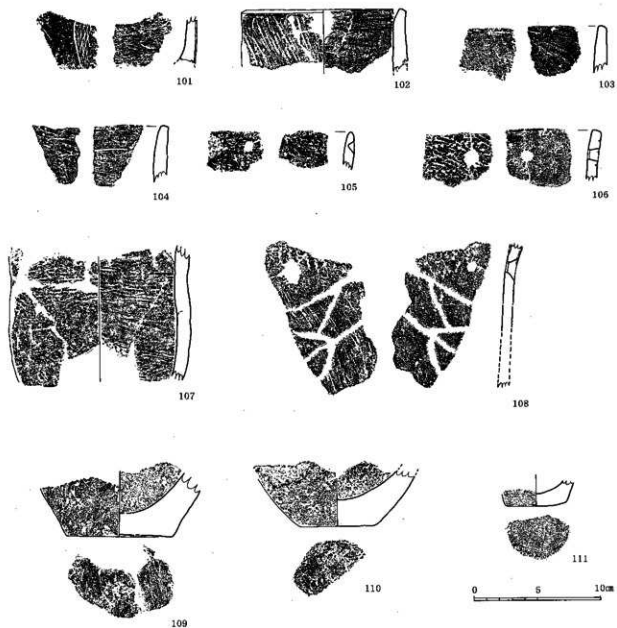
第19図 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土土器実測図(2)



第20図 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土土器実測図(3)



第21图 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土土器実測図(4)



第22図 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土土器実測図(5)

表35 上ノ原遺跡 土器観察表(1)

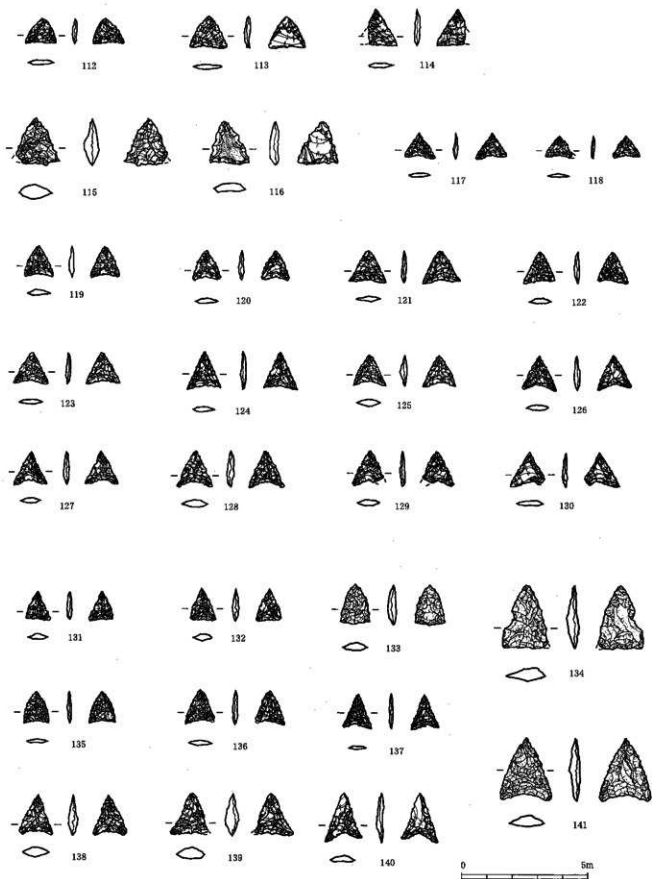
図録号	区	部 位	文 様 及 び 調 整		色 調		胎 土	分期	備 考
			外 面	内 面	外 面	内 面			
39	A	口縁部一割部	斜方向の貝殻条痕文	縦方向のヘラミガキ	櫻	にぶい糖	1mm以下の灰白粒	Ia	
40	A	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
41	A	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
42	D	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
43	D	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
44	D	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
45	C	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
46	B	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ia	
47	D	口縁部	よこ方向、斜方向の貝殻条痕文					Ia	
48	D	口縁一割部	斜方向の貝殻条痕文					Ib	
49	D	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					Ib	
50	A	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ib	
51	C	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ib	
52	D	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					Ib	
53	B	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ib	
54	D	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					Ic	
55	B	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ic	
56	B	口縁部	よこ方向、斜方向の貝殻条痕文					Ic	
57	D	口縁部	よこ方向、斜方向の貝殻条痕文					Ic	
58	D	口縁部	よこ方向の条痕文					Ic	
59	A	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					Ic	
60	D	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					Ic	
61	A	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					Ic	
62	A	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					Ic	
63	D	底部	斜方向の貝殻条痕文の上を下部のみ縦または斜方向のミガキ					I	
64	A	底部	横および斜方向の貝殻条痕文、横または縦方向のミガキ					I	
65	A	底部	斜一割方向のミガキ、一部に斜方向の貝殻条痕文、横もしくは斜方向のミガキ					I	
66	B	底部	横方向のミガキ、ミガキ					I	
67	C	底部	丁寧なミガキ					I	
68	A	口縁部	楕形貼り付き突帯	ヘラケズリー部ナデ	にぶい糖 にぶい糖		1mm以下の白色粒、黄色粒	IIa	
69	D	口縁部	楕形貼り付き突帯	斜方向のケズリーの横ヘラナデ	櫻	櫻		IIa	
70	D	口縁部	楕形貼り付き突帯	横方向のヘラミガキ	櫻	櫻	1mm以下の光沢粒	IIa	
71	D	口縁部	貝殻条痕文、たて方向沈線文					IIa	

表36 上ノ原遺跡 土器観察表(2)

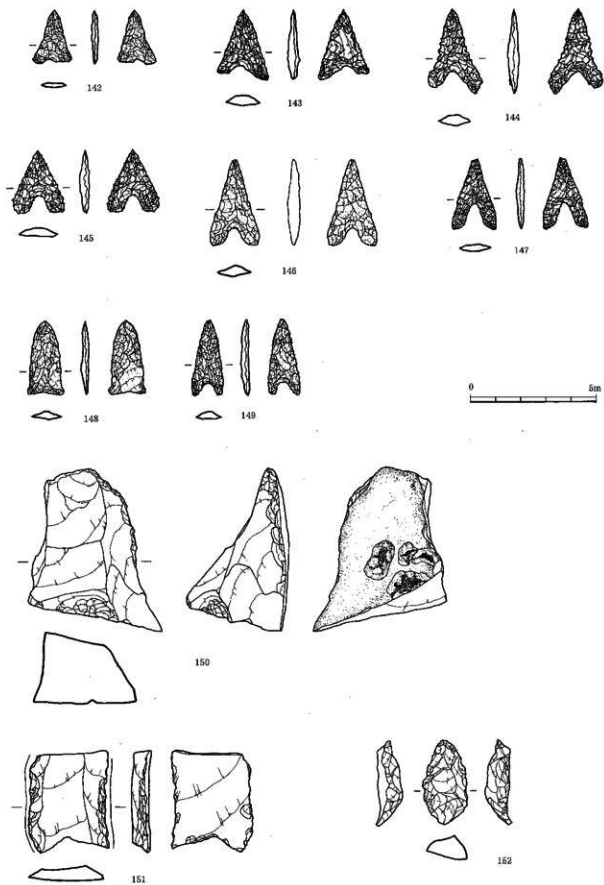
図番号	区	部 位	文 様 及 び 調 整		色 調		胎 土	分類	備 考
			外 面	内 面	外 面	内 面			
72	D	口縁部	横筋に3条の貝殻産線刺突文、浅い横方向の貝殻条刺突文の上を斜格子状に貝殻産線刺突文	横又は斜方向のヘラミガキ	にぶい赤褐色	にぶい橙	2mm以下輝石1mm以下の石英	IIc	
73	A	口縁部	横方向、斜方向貝殻産線刺突、	横方向のヘラミガキ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	2mm以下の石英、1.5mm以下の輝石	IIc	
74	A	胴部	斜格子状に貝殻産線刺突文、斜方向の浅い貝殻条刺突文	縦方向のケズリの後、よこナデ	にぶい褐色	明赤褐色	2mm以下の長石	IIc	
75	D	胴部	斜方向条痕、タテ方向産線刺突	縦方向のケズリ	にぶい黄褐色	にぶい橙	1.5mm以下の透明な光沢粒	II	
76	D	胴部	タテ方向の貝殻産線刺突	たてケズリののち斜方向の丁寧なナデ	にぶい褐色	明赤褐色	1mm以下の石英、長石、輝石粒	II	
77	D	胴部	斜方向条痕、タテ方向産線刺突	斜方向のケズリ	にぶい黄褐色	にぶい橙	2mm以下の透明な光沢粒、0.5mm以下の褐色色粒及び灰褐色粒	II	
78	A	蓋部	ナデの上に沈線による縦方向の連続刻み	知籠系または前平系				II	
79	D	蓋部	斜方向の貝殻条刺突文	知籠系または前平系				II	
80	C	口縁部	横筋貼り行き突帯	横方向のヘラナデカミガキ	にぶい橙	にぶい褐色	3mm以下の乳白色粒、浅黄褐色、黒色粒	IIb	
81	A	口縁部	たて方向の沈線文					III	
82	D	口縁部	波状の平行沈線文					III	
83	D	口縁部	斜方向の貝殻条刺突文					III	
84	D	口縁部	よこ方向の山形押型文					IVa	
85	D	胴部	たて方向の山形押型文					IVa	
86	C	胴部	たて方向の山形押型文					IVa	
87	A	胴部	よこ方向の山形押型文					IVa	
88	A	胴部	斜方向の山形押型文					IVb	
89	D	口縁部	横円押型文					IVb	
90	D	口縁部	横円押型文、横筋7と同一筋体	斜格子状、横筋7による連続的沈線文	灰黄	にぶい黄	2mm以下の角閃石、石英、薄紫色の砂粒	IVb	
91	A	口縁部	横円押型文					IVb	
92	D	胴部	横円押型文					IVb	
93	D	胴部	横円押型文					IVb	
94	A	胴部	横円押型文					IVb	
95	D	蓋部	山形押型文、木の葉汪倉	押型文土器				IVa	
96	C	口縁部	貝殻産線による連続刺突文					V	
97	C	口縁部	貝殻産線による連続刺突文					V	

表37 上ノ原遺跡 土器観察表(3)

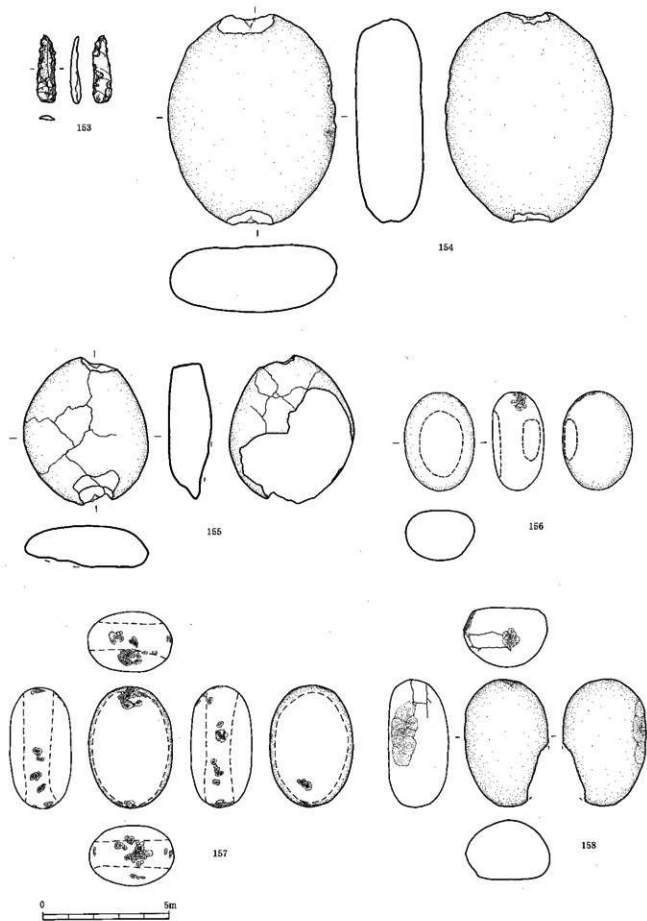
図番号	区	部 位	文 様 及 び 調 整		色 調		胎 土	分類	備 考
			外 面	内 面	外 面	内 面			
98	C	口縁部	貝殻磨縁による連続刺突文					V	
99	A	口縁部	工具によるれ棒汪文					V	
100	A	口縁部	刺突文					V	
101	C	高部付近	区画内に網目状刺突文					VI	
102	D	口縁部	斜方向の貝殻条痕文					VI	
103	D	口縁部	斜方向のミガキ					VI	
104	A	口縁部	よこ方向の貝殻条痕文					VI	
105	A	口縁部	斜方向のナデ					VI	
106	D	口縁部	無文					VI	
107	C	口縁部	斜方向の貝殻条痕文、連続刺突文					VI	
108	C	胴部	斜方向の条痕文					VI	
109	D	底部	縦方向のミガキ、やや上げ筋						
110	C	胴一底部	斜または横方向のミガキ、ミガキ						
111	A	高部	縦方向のミガキ、ミガキ						



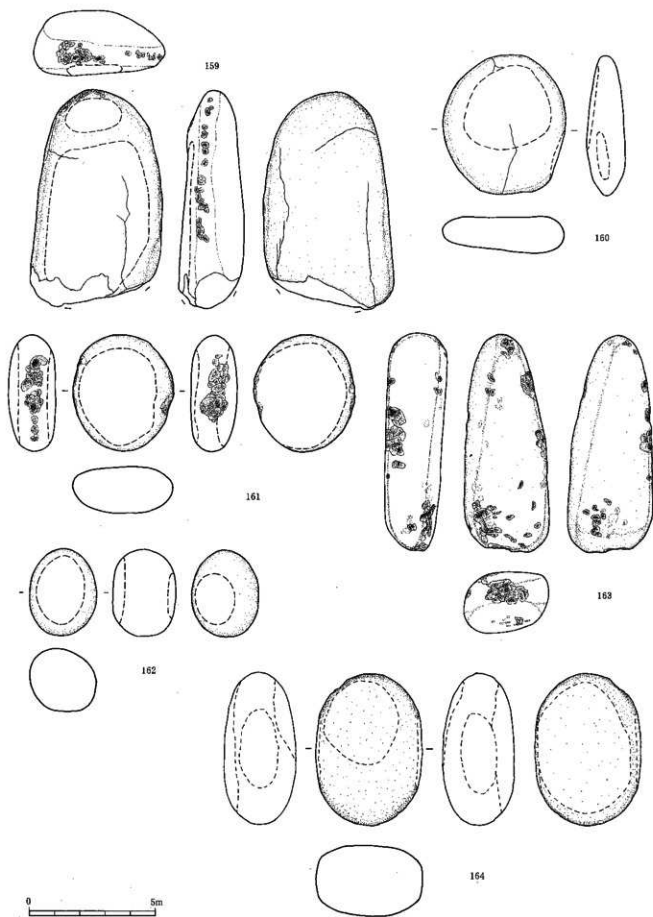
第23图 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測図(1)



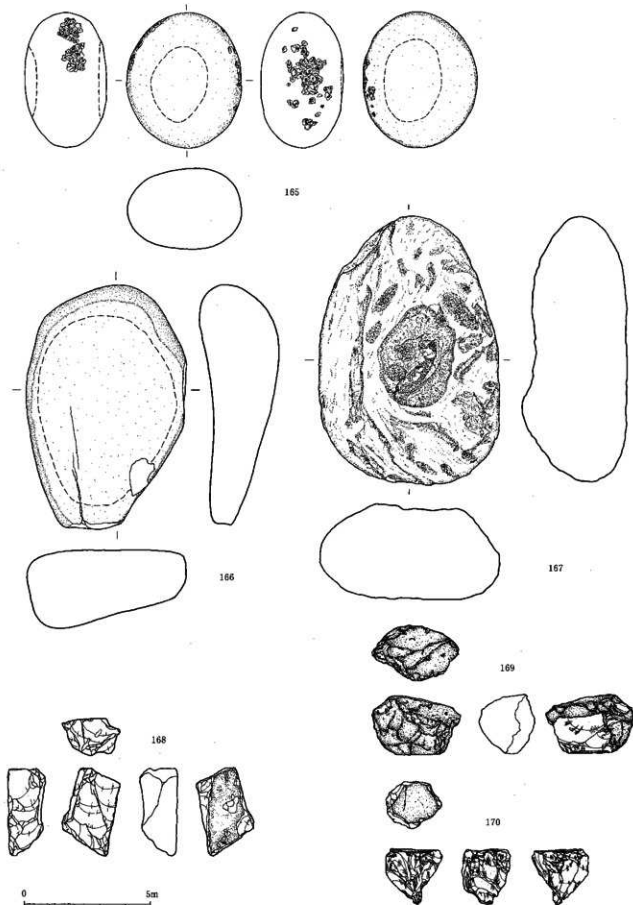
第24圖 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測図(2)



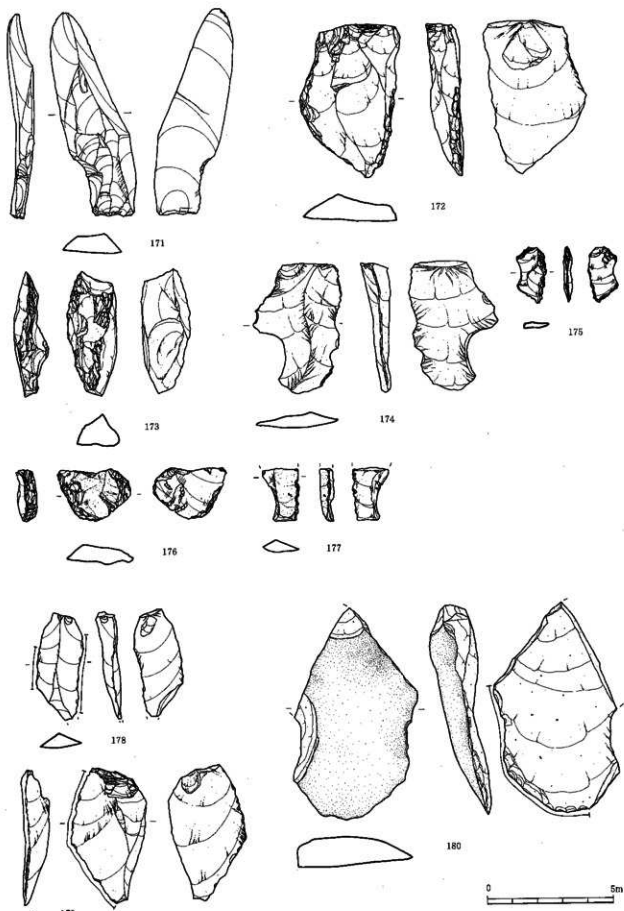
第25図 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測図(3)



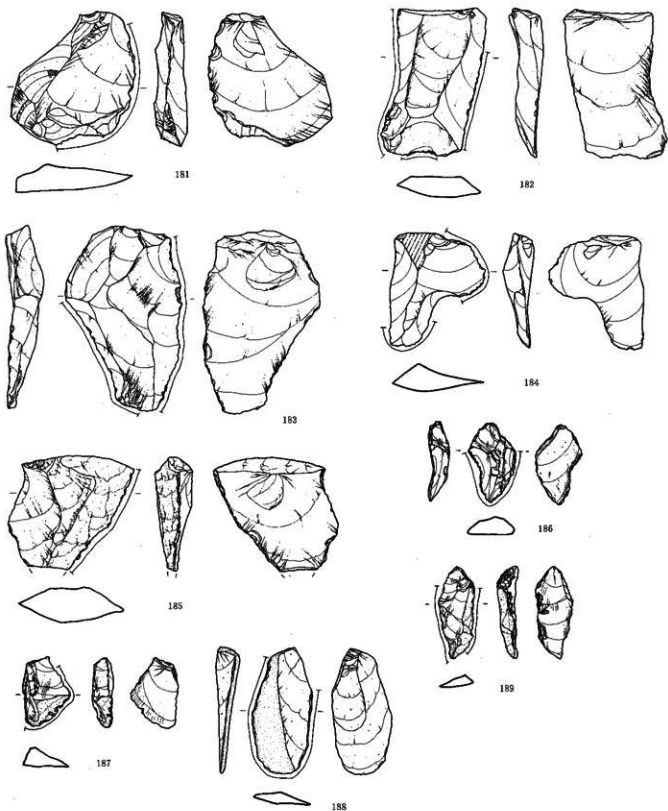
第26圖 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測図(4)



第27图 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測図(5)



第28圖 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測圖(6)



第28圖 上ノ原遺跡縄文早期包含層出土石器実測圖(7)

表38 上ノ原遺跡石器計測表(1)

図番号	区	層	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
112	B	V	B14	石鏃	1.04	1.25	0.21	0.2	黒曜石	I-a
113	B	VI	B16	石鏃	1.29	1.47	0.23	0.3	黒曜石	I-a
114	B	V	C16	石鏃	(1.47)	(1.16)	0.24	(0.3)	黒曜石	I-b 片脚部欠損
115	B	VI	C15	石鏃	(1.90)	(1.64)	0.62	(1.2)	黒曜石	I-a 片脚部欠損
116	D	VI	N12	石鏃	1.83	1.58	0.35	0.9	黒曜石	I-a
117	B	VI	B16	石鏃	1.08	1.22	0.18	0.1	黒曜石	I-b
118	B	V	C14	石鏃	(0.89)	(1.04)	0.19	(0.1)	黒曜石	I-b 片脚部欠損
119	B	VI	C14	石鏃	1.26	1.17	0.26	0.2	黒曜石	I-b
120	C	VI	G5	石鏃	1.21	1.12	0.26	0.2	黒曜石	I-b
121	B	V	B15	石鏃	1.31	1.52	0.21	0.2	黒曜石	I-b
122	B	VI	C16	石鏃	1.28	1.26	0.25	0.2	黒曜石	I-b
123	B	VI	D14	石鏃	1.78	1.40	0.19	0.2	黒曜石	I-b
124	B	V	B14	石鏃	1.49	1.35	0.19	0.3	黒曜石	I-b
125	B	VI	C15	石鏃	1.24	1.32	0.30	0.2	黒曜石	I-b
126	D	VI	P12	石鏃	1.45	1.35	0.21	0.3	黒曜石	I-b
127	B	VI	C15	石鏃	1.32	1.34	0.26	0.2	黒曜石	I-b
128	B	VI	B14	石鏃	1.46	1.42	0.31	0.4	黒曜石	I-b
129	B	VI	B15	石鏃	(1.39)	(1.25)	0.24	(0.3)	黒曜石	I-b 片脚部欠損
130	B	VI	C14	石鏃	(1.39)	(1.38)	0.22	(0.3)	黒曜石	I-b 片脚部欠損
131	B	V	B16	石鏃	1.16	0.97	0.25	0.1	黒曜石	II-a
132	B	V	C-14	石鏃	1.31	1.02	0.29	0.2	黒曜石	II-a
133	A	VI	o-14	石鏃	1.63	1.22	0.35	0.6	流紋岩f	II-a
134	A	V	H-16	石鏃	(2.53)	(1.78)	0.48	(1.7)	流紋岩f	II-a 片脚部欠損
135	D	VI	M-12	石鏃	1.27	1.05	0.19	0.2	黒曜石	II-b
136	B	VI	B-14	石鏃	1.34	(1.18)	0.24	(0.3)	黒曜石	II-b 片脚部欠損
137	B	VI	C-14	石鏃	1.45	1.10	0.15	0.1	黒曜石	II-b
138	C	VI	E-4	石鏃	1.63	1.35	0.39	0.5	黒曜石	II-b
139	B	V	C-15	石鏃	(1.69)	(1.53)	0.56	0.8	黒曜石	I-b 片脚部欠損
140	B	V	C-13	石鏃	1.99	1.48	0.26	0.4	黒曜石	II-b
141	C	VI	C-7	石鏃	2.52	2.02	0.51	1.6	流紋岩f	II-b
142	A	VI	J-14	石鏃	2.16	1.54	0.28	0.6	砂岩	II-c
143	D	VI	P-13	石鏃	(2.82)	(2.05)	0.44	(1.2)	黒曜石	II-c 片脚部欠損
144	A	V	o-14	石鏃	3.42	2.20	0.49	1.7	黒曜石	II-d
145	B	VI	C-16	石鏃	2.52	2.11	0.42	1.4	チャート	II-d
146	A	VI	n-13	石鏃	(3.43)	2.01	0.52	(2.1)	スリワケルス	II-d 先端部チャオイ欠損
147	C	VI	E-7	石鏃	(2.83)	1.78	0.38	(1.1)	チャート	II-c 先端部チャオイ欠損
148	A	VI	l-15	石鏃	2.96	1.47	0.32	1.3	流紋岩f	II
149	A	IV	o-14	石鏃	(3.04)	1.29	0.34	1.1	流紋岩f	II 先端部チャオイ欠損
	B	V	C-14	石鏃	(0.95)	1.34	0.36	(0.4)	黒曜石	I-a 先端部欠損
	D	VI	P-12	石鏃	(0.97)	1.13	0.38	(0.3)	黒曜石	I-a 先端部欠損
	B	V	C-14	石鏃	(1.29)	1.71	0.48	(0.9)	黒曜石	I-a 先端部欠損
	A	VI	L-13	石鏃	(1.45)	(1.34)	0.27	(0.3)	黒曜石	I-b 先端部、片脚部
	B	V	B-15	石鏃	(1.12)	(1.28)	0.26	(0.2)	黒曜石	I-b 先端部、片脚部
	B	V	B-16	石鏃	(1.38)	(1.48)	0.24	(0.4)	黒曜石	I-b 先端部、片脚部
	B	VI	B-16	石鏃	(0.69)	1.22	(0.29)	(0.2)	黒曜石	I-b 先端部欠損
	B	V	C-14	石鏃	(1.03)	(1.47)	0.27	(0.3)	黒曜石	I-b 先端部欠損
	B	VI	C-14	石鏃	1.34	1.44	0.48	0.6	チャート	I-b
	B	V	C-14	石鏃	(1.42)	(1.09)	(0.45)	(0.5)	黒曜石	I-b 半分欠損
	C	VI	D-8	石鏃	(1.89)	(1.54)	0.44	(1.1)	チャート	I-b 片脚部欠損
	B	V	B-14	石鏃	(1.44)	(0.98)	0.22	(0.3)	黒曜石	II-a 片脚部欠損
	B	VI	C-14	石鏃	(0.92)	1.04	0.22	(0.1)	黒曜石	II-b 先端部欠損
	C	VI	E-6	石鏃	(1.06)	(0.86)	0.26	(0.1)	黒曜石	II-b 片脚部欠損
	B	VI	C-15	石鏃	(1.22)	1.69	(0.29)	(0.5)	黒曜石	II-b 先端部欠損
	B	V	C-14	石鏃	(0.99)	1.53	(0.32)	(0.4)	黒曜石	II-b 先端部欠損
	B	VI	C-14	石鏃	(0.72)	(0.79)	(0.26)	(0.1)	黒曜石	IV 先端部のみ
	B	V	B-15	石鏃	(1.45)	(0.96)	(0.24)	(0.3)	黒曜石	IV 半分欠損
	D	IV	M-11	石鏃	(2.08)	(1.34)	0.54	(1.6)	チャート	IV 片脚部欠損
	B	V	C-16	石鏃	1.60	1.30	0.55	0.9	黒曜石	IV 未製品
	B	VI	B-14	石鏃	2.05	1.70	0.60	0.6	黒曜石	IV 未製品
	D	VI	N-12	石鏃	1.75	1.35	0.30	0.7	黒曜石	IV 未製品

表39 上ノ原遺跡 石器計測表(2)

図番号	区	層	出土位置	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考	
150	A	VI	J-14	スクレーパー	6.60	5.30	3.30	80.00	流紋岩a		
151	A	V	o-14	スクレーパー	4.05	3.23	0.65	10.50	流紋岩f		
152	D	VI	N-12	スクレーパー	3.30	1.85	0.90	4.60	黒曜石		
153	B	VI	C17	翼形石鏃	2.70	0.75	0.40	0.60	黒曜石		
154	D	VI		石鏃	6.60	8.40	2.10	220.00	砂岩		
155	D	V	M-12	石鏃	5.92	4.90	1.70	52.00	砂岩		
156	C	VI	E7	敲石・磨	7.85	5.50	4.10	244.30	砂岩		
157	A	VI	M15	敲石・磨	9.70	6.70	4.80	453.40	尾鈔酸性岩		
158	D	VI	O13	敲石	10.10	6.68	4.70	390.00	砂岩		
159	D	VI	p13	敲石・磨	17.40	10.45	5.20	1118.80	砂岩		
160	B	VI	C14	磨石	11.20	9.75	3.10	417.30	砂岩		
161	C	VI	E7	敲石・磨	9.40	8.00	3.80	398.50	砂岩		
162	C	VI	E7	磨石	6.95	5.34	5.00	279.10	尾鈔酸性岩		
163	C	VI	D8	敲石	17.35	6.80	4.90	768.90	砂岩		
164	C	VI	G4	磨石	12.10	6.40	5.70	834.60	砂岩		
165	B	V	B16	敲石・磨	10.80	9.10	6.50	984.10	砂岩		
		C	VI	H5	敲石・磨	11.00	4.60	3.05	226.80	流紋岩f	
		C	VI	I4	敲石・磨	8.10	7.10	3.60	298.10	尾鈔酸性岩	
		C	VI	D6	磨石	9.90	7.70	3.85	436.50	尾鈔酸性岩	
		C	VI	J4	敲石	9.20	7.50	5.65	482.60	砂岩	
166	C	VI	E7	石鏃	19.50	12.70	6.30	2000.00	砂岩		
167	C	VI	E5	台石	21.40	14.40	8.25	3600.00	ネリソフェルス		
168	B	V	B14	石核	3.50	1.50	1.50	10.80	黒曜石		
169	B	V	B14	石核	2.31	3.50	2.20	16.40	黒曜石		
170	B	V	C14	石核	2.20	2.20	1.90	8.00	黒曜石		
		B	V	B14	石核	2.80	4.30	2.00	22.20	黒曜石	
		B	V	C14	石核	10.00	6.05	3.60	184.40	ネリソフェルス	
178	D	VI	N12	使用痕跡片	4.30	1.95	0.90	4.40	流紋岩f		
179	B	VI	B16	使用痕跡片	5.40	3.05	1.20	12.20	流紋岩b		
180	B	V	C15	使用痕跡片	8.40	4.96	2.30	61.10	流紋岩f		
181	C	VI	H5	使用痕跡片	5.35	4.95	1.35	28.30	流紋岩f		
182	D	VI	M12	使用痕跡片	5.90	4.15	1.35	23.30	流紋岩f		
183	A	VI	I4	使用痕跡片	7.35	4.60	1.55	40.30	流紋岩f		
184	C	VI	H3	使用痕跡片	4.55	3.80	1.20	11.10	ネリソフェルス		
185	C	VI	G3	使用痕跡片	4.55	4.95	1.50	25.30	流紋岩f		
186	B	VI	C14	使用痕跡片	3.15	1.85	0.85	2.10	黒曜石		
187	D	VI	P13	使用痕跡片	2.75	1.85	0.85	2.40	黒曜石		
188	D	VI	N12	使用痕跡片	5.00	2.40	1.00	5.80	ネリソフェルス		
189	D	VI	O12	使用痕跡片	3.65	1.45	0.80	2.80	黒曜石		
		C	VI	D4	使用痕跡片	2.25	1.75	0.65	1.90	流紋岩b	
		C	VI	H3	使用痕跡片	4.15	2.40	0.90	5.50	流紋岩f	
		D	VI	O12	使用痕跡片	3.80	7.25	0.75	21.80	ネリソフェルス	
		D	VI	O12	使用痕跡片	3.50	6.45	0.95	21.30	ネリソフェルス	
171	C	VI	E6	二次加工剥片	8.27	3.25	1.05	16.70	流紋岩f		
172	C	VI	D4	二次加工剥片	6.10	4.06	1.35	29.10	流紋岩b		
173	C	VI	F5	二次加工剥片	4.90	1.95	1.30	10.50	流紋岩e		
174	C	VI	E9	二次加工剥片	5.15	3.50	1.15	10.50	流紋岩b		
175	B	VI	C15	二次加工剥片	2.20	1.20	0.35	0.50	黒曜石		
176	B	V	B14	二次加工剥片	2.00	2.90	0.80	3.60	黒曜石		
177	C	VI	E6	二次加工剥片	2.05	1.45	0.50	1.10	黒曜石		
		B	V	B14	二次加工剥片	2.00	2.90	0.80	3.60	黒曜石	
		B	V	B16	二次加工剥片	2.25	1.70	0.80	2.50	黒曜石	
		B	V	C14	二次加工剥片	1.45	1.70	0.55	1.30	黒曜石	
		B	V	C14	二次加工剥片	2.70	1.70	0.60	2.40	黒曜石	
		B	V	C14	二次加工剥片	1.80	1.85	0.50	1.60	黒曜石	
		B	VI	C14	二次加工剥片	1.45	1.35	0.20	0.40	黒曜石	
		B	VI	C14	二次加工剥片	2.10	2.50	0.80	3.20	黒曜石	
		B	VI	C15	二次加工剥片	1.80	2.10	0.70	2.50	黒曜石	
		B	VI	C15	二次加工剥片	2.25	1.45	0.50	1.30	黒曜石	
		D	VI	M12	二次加工剥片	2.40	1.90	1.05	3.90	黒曜石	
		D	VI	N12	二次加工剥片	2.40	2.00	0.45	1.90	流紋岩f	

第V章 縄文時代中期以降の遺構と遺物

第1節 遺構

縄文時代以降（アカホヤ降灰以降）の遺構として、土坑11基、ピット群、掘立柱建物跡18棟、溝状遺構3条、近世墓1基が確認された。耕作による削平のため、遺構上部が確認できないものもあるが、埋土状況、出土遺物からピット群、掘立柱建物跡、溝状遺構は中性の遺構と考えられる。同じく、土坑は縄文時代から中世にかけてと構築時期にはばかがあると考えられる。

(1) 掘立柱建物 (SB) (第30～36図)

C区からD区にかけて約300のピットが検出された。その中で18棟の掘立柱建物跡が確認された。分布についてみると、G10からH10、H11グリッドにかけて10棟の集中がみられるほか、主軸の向きがN-45°～60°-W方向のもの11棟、N-30°～40°-E方向のもの7棟に大別される。いずれも遺構上部が削平を受けているため、正確な構築面は不明であるが、建物のプラン、周辺ピット内の遺物から、中世の遺構と考えられる。

SB1

G8、G9グリッドで検出。2間×3間の建物でSB2と重複関係にある。北西端に入り口と思われる1間の廂を有する。廂の柱穴径は15cm～20cm、深さ10cm～25cmと、身舎の柱穴40cm～60cmと比較して小さくなる。

SB2

G8グリッドで検出。1間×2間の建物だが、奥行400cm～420cm、桁行400cmと、ほぼ正方形のプランを呈する。SB1、SB2ともに主軸方向は同一で、重複関係にあるが、先後関係は不明である。

SB3

F9、G9グリッドにまたがり、SB1、SB2の南側に隣接する位置で検出。建物の西側の部分が削平を受けており全体プランは不明だが、1間×2間あるいは3間の規模が考えられる。主軸方向は、SB1、SB2と直交する向きである。

SB4

H10、H10グリッドにまたがる形で検出。1間×3間の建物で、SC46と重複関係にあるが、先後関係については不明である。柱穴径は30cm～60cm、桁行の柱穴間は200cm～250cmである。主軸方向は北西を向き、SB3、SB6、SB7等に類似する。

SB5

H9グリッドで検出。2間×2間の建物で他の遺構との重複関係はみられないが、主軸の方向はSB1、SB2、SB11等に類似している。

SB6

G10、H10グリッドで検出。1間×3間の建物で北東側に一面廂を有する。SB10、SB15と重複関係にあるが、主軸方向は直交する。柱穴は直径30cm前後～60cm、深さ40cm前後のものが大半で、

桁行の柱穴間は170cm～210cmである。

SB7

H11、I11グリッドで検出。2間×3間の建物でSB14と重複関係にあり、主軸方向も類似する。

SB8

G9、G10グリッドにまたがる位置で検出。建て替えの跡と思われる柱穴の重複がみられるが、2間×3間の建物である。SB9と重複関係にあり、主軸方向も類似する。柱穴径は20cm～50cm前後とばらつきがあるが、柱穴間の距離は梁行、桁行ともに180cm～200cmと一定のレベルで揃っている。

SB9

G10、H10グリッドで検出。削平のため、北東隅の柱穴が1カ所欠けているが、2間×3間の建物である。主軸上両端の柱穴は、長方形のプランからはずれる位置にあり、棟持柱としての用途が伺える。SB8、SB10と重複関係にあり、主軸方向はSB8に類似し、SB10と直交する。

SB10

G10、H10グリッドで検出。削平のため、北東隅の柱穴が1カ所欠けているが、1間×3間の建物である。SB6、SB9、SB16と重複関係にあり、主軸方向、プランともにSB15に類似する。

SB11

H8、I8グリッドで検出。1間×3間の建物で、北西側と南東側に廂を有する。SB12と重複関係にあり、主軸方向は直交する。柱穴径は40cm～60cm、深さは10cm～60cmとばらつきがあるが、桁行の柱穴間の距離は190cm～220cmである。

SB12

G8、H8グリッドで検出。2間×3間の建物である。SB11と重複関係にあるが、主軸方向は直交する。柱穴径30cm～50cm、深さ20cm～70cmとかなりばらつきがある。

SB13

I7グリッドで検出。1間×1間の建物で、主軸方向はSB11に類似する。柱穴径20cm～50cm、深さ20cm～40cmとばらつきがある。

SB14

H11、I11グリッドで検出。1間×2間の建物でSB7と重複関係にあり、主軸方向も類似する。柱穴径30cm～40cm、桁行の柱穴間の距離180cm～190cmと一定のレベルで揃っている。

BS15

G10、G11、H10、H11グリッドにまたがる位置で検出。1間×3間の建物でSB6と重複関係にあり、主軸方向は直交する。柱穴径、深さはかなりばらつきがあるが、桁行の柱穴間の距離は200cm～220cmと一定のレベルで揃っている。

SB16

G10グリッドでSB10、SB17と重複するかたちで検出。2間×4間の建物で、主軸方向はSB17に類似する。柱穴径、深さ、柱穴間の距離ともかなりばらつきがみられる。

SB17

G10グリッドでSB8、SB10に隣接する位置で検出。1間×3間の建物で、SB16と重複関係にある。

主軸方向はSB8、SB16に類似し、SB10と直交する。柱穴径、深さはかなりばらつきがあるが、桁の柱穴間の距離は170cm~200cmである。

SB18

F9、F10、G10グリッドでSB8に隣接する位置で検出。1間×1間の建物で北西側に1間の廂を有する。主軸方向はSB8に類似する。柱穴径は30cm~40cmと揃っているが、深さ、柱穴間の距離はばらつきがある。

(2) 土坑 (SC) (第37~39図)

縄文時代前期以降の土坑として11基が検出された。いずれもアカホヤ降灰以降のものであるが、構築時期は縄文時代から中世とばらつきがあると考えられる。以下、比定される構築時期ごとに述べたい。

SC37

A区P15グリッドの第IVa層掘り下げ中に、SE1を切る形で検出。長径160cm、短径140cmの不整形プランを呈する。検出面からの深さは80cmを測り、埋土は二次アカホヤが混ざる黒色土が確認された。埋土底部付近の炭化物を試料として行った放射性炭素年代測定では¹⁴C年代B.P.930±50年(補正¹⁴C年代B.P.950±50年)という値が得られた。この結果からは、構築時期が平安時代である可能性が伺える。

SC38

A区Nグリッドの第V層掘り下げ中に、V層直上で検出。直径80cmの円形プランを呈し、深さ40cmを測り、埋土はIVa層が確認された。埋土中より土器片(190、191)が出土した。190は、横方向の条痕文を施した深鉢の頸部、191は縄文の上に浅い沈線を施した深鉢の胴部である。いずれも、縄文時代中期に比定される土器片で、遺構の構築時期についても関連が伺える。

SC39

A区O14グリッドの第V層掘り下げ中に、V層直上で検出。長軸165cm、短軸150cmの方形プランを呈し、深さは20cmを測り、埋土はIVa層が確認された。埋土中より土器片(192~195)が出土した。192は横方向、斜方向のタタキが施された壺の胴部、193は縦方向のハケメが施された壺の頸部、194は縦方向、斜方向のミガキの施された鉢、195は横方向のハケメが施され、内面にはケズリがみられる甕である。192、193は古墳時代に、194は弥生時代に、195は平安時代に比定される。遺構の構築時期については、平安時代以降であることが伺える。

SC40

A区I13グリッドの第VI層掘り下げ中に検出。長径215cm、短径165cmの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは140cmを測る。埋土は主としてIVa層の混ざる黒色土が確認され、SC37の埋土状況に類似していた。構築時期もSC37に近いと想定される。

SC41

C区H5グリッドで表土除去後に、第VI層面でSC42の南側約8mの位置で検出。長径180cm、短径110cmの楕円形プランを呈する。検出面からの深さは110cmを測り、埋土は、SC42に類似した

Ⅳa層の混ざる黒色土が確認された。

SC42

C区H4グリッドで表土除去後に、第Ⅵ層上面で検出。長径250cm、短径120cmの楕円形プランを呈する。検出面からの深さは125cmを測り、埋土は、主としてⅣa層の混ざる黒色土が自然堆積する状態で確認された。

SC43

C区16グリッドで表土除去後に、第Ⅸ層面でSC41の南東側約14mの位置で検出。長径215cm、短径160cmの楕円形プランを呈する。深さは120cmを測り、埋土状況はSC41、SC42に類似した、Ⅳa層の混ざる黒色土が自然堆積する状態で確認された。

なお、SC41からSC42の埋土状況はSC37に類似しており、構築時期についても近いものと考えられる。

SC44

C区E8グリッドで表土除去後に、第Ⅴ層面で検出。長径115cm、短径80cmの楕円形プランを呈する。深さは135cmを測り、埋土には黒色土、黒褐色土にⅣb層のブロックが底部近くまで混ざっている状態が確認された。底部には、小穴17カ所が確認された。小穴はいずれも長径20cmから30cm、深さ40cmから10cmを測る。遺構の形状、小穴の状態から、陥とし穴遺構の可能性が伺える。また、構築時期については、埋土状況、遺構の形態などから縄文時代と比定されるが、詳細は不明である。

SC45

I11グリッドで表土除去後、X層面で検出。長径190cm、短径170cmの楕円形プランを呈する。削平を受けているが、検出面からの深さは75cmを測り、埋土はⅣ層を含む黒色土、Ⅴ層を含む明黄褐色土が確認された。また埋土中に10cmから30cm前後の自然礫が確認された。

SC46

I10グリッドで表土除去後、X1層面で検出。長径180cm、短径100mの楕円形プランを呈する。削平のため遺構上部と南側の1/3は喪失し、確認できなかった。検出面からの深さ40cmを測り、埋土はⅣa層を含む黒色土、褐色土が確認された。

SC47

I9グリッドで表土除去後、X1層面で検出。長径200cm、短径150cmの楕円形プランを呈する。遺構上部の西側1/3は削平を受け、確認できなかった。検出面からの深さは35cmを測り、埋土はSC46に類似したⅣa層を含む黒色土、褐色土が確認された。

SC45～SC47は、いずれも構築時期については不明だが、分布、形状等からSC41～SC43に類似すると考えられる。

なお、SC41～SC43については、ほぼ同一高線上に並ぶこと、遺構の形状、深さ等が類似することから、同一時期に構築された陥し穴遺構であることが伺える。同じく、SC40、SC45～SC47についても、分布、形状等に関連が見られ、陥し穴遺構の可能性が伺える。

(3) 溝状遺構 (SE)

溝状遺構3条はいずれもA区西端のIVa層掘り下げ中に検出された。埋土は黒色土とIVa層が混ざった状態が確認された。SE1、SE2は平行する形で、北方向に南に向かって延びている。SE3は西から東に延びる形でSE2に合流している。いずれも遺構の端は徐々に浅くなり消滅している。

SE1

P15グリッドからP14グリッドにかけて、南の谷側から北に上がる形で検出。長さ18m、幅180cm～110cm、深さは最も深い部分で35cmを測る。SC37と重複関係にあるが、埋土状況等から、SE1の方が古いと考えられる。底面ははっきりとした硬化面が確認され、道として利用されたことが伺える。遺構埋土の上部で、青磁の底部(285)が出土したが、遺構との関連は不明である。

SE2

SE1と同じ向きでP15グリッドからP14グリッドに延びる形で検出。長さ約12.5m、幅120cm～50cm、最も深い部分で20cmを測る。

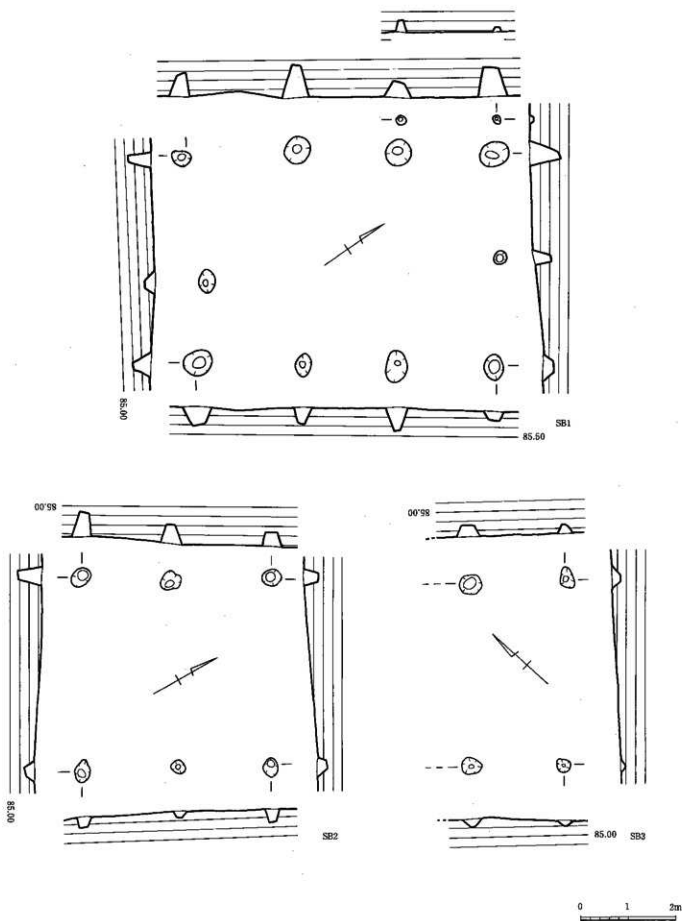
SE3

SE2に直交する向きでP14グリッドからO14グリッドに延びる形で検出。長さ約12.5m、幅90cm～60cm、最も深い部分で10cmを測る。

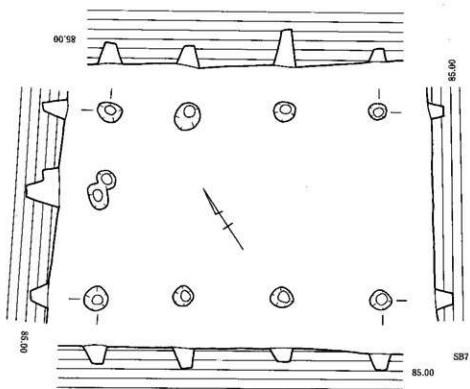
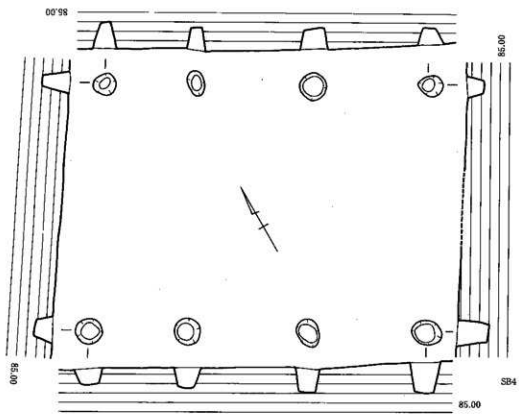
なお、SE1～SE3は、図示していないが、古代のものと思われる土師器の小片が数点出土しており、ほぼ同一時期の遺構と考えられる。また、構築時期については、SC37より古い平安前が想定されるが、詳細は不明である。

(4) 近世墓 (SX)

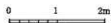
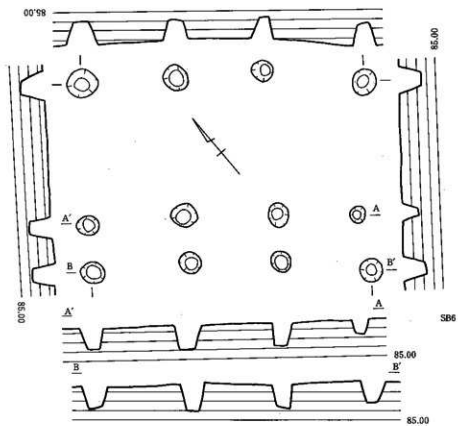
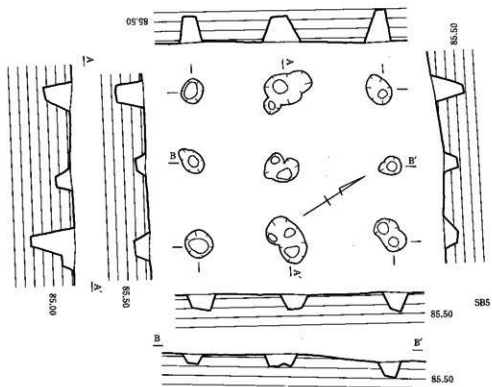
C区H9グリッドで表土除去後、第IX層面での検出。削平のため、遺構上部は喪失し、底部付近のみが確認された。直径120cmの円形プランを呈し、検出面からの最深部は10cmを測る。遺構中央に比べ、周囲が一段低くなり、底面には、桶管の底部圧痕が確認された。また、底部圧痕の部分には、リング状の粘土が張り付けられていた。



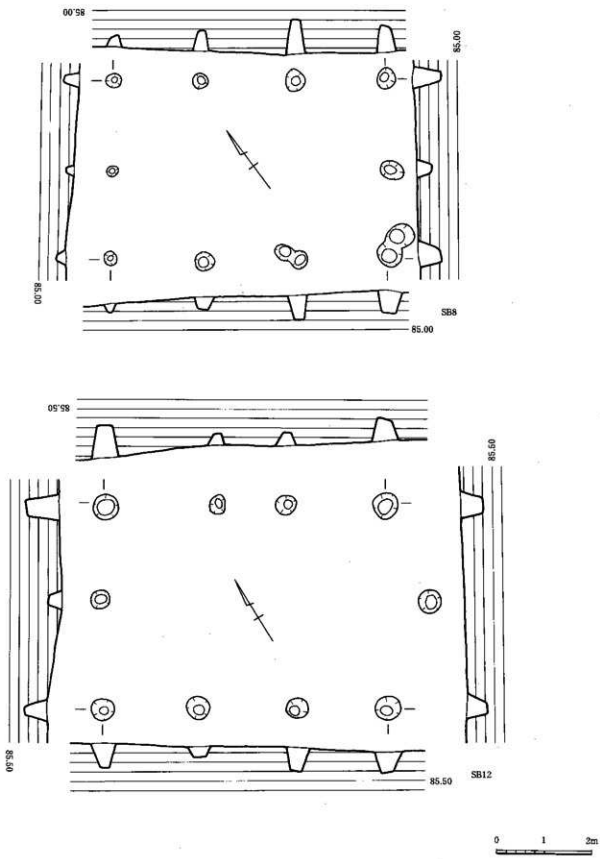
第30圖 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測図(1)



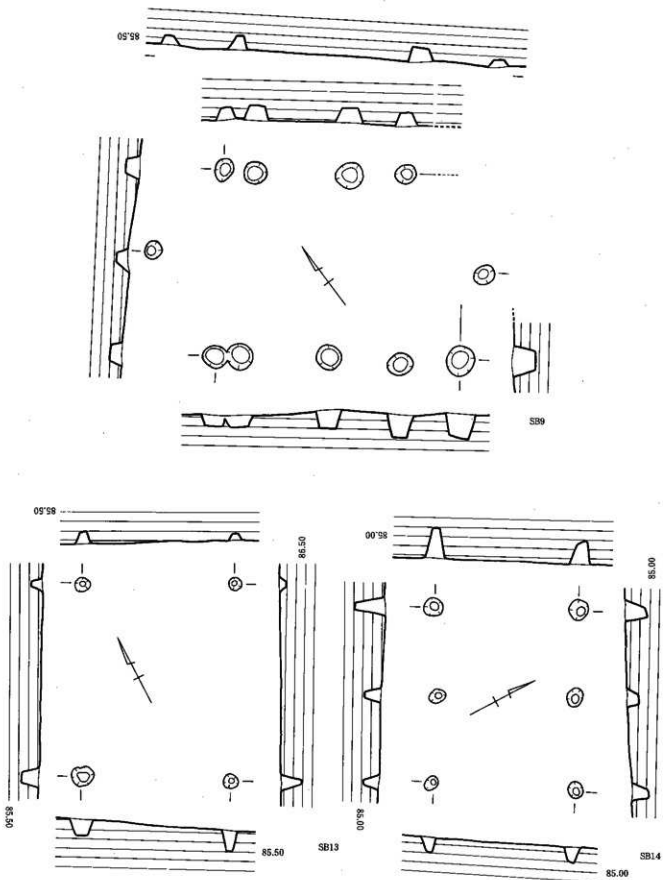
第31圖 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測図(2)



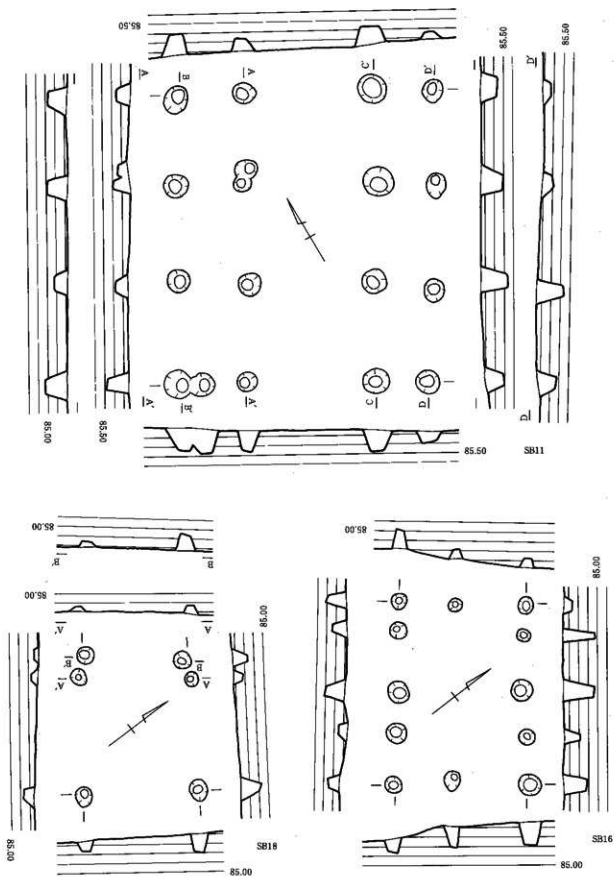
第32圖 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測図(3)



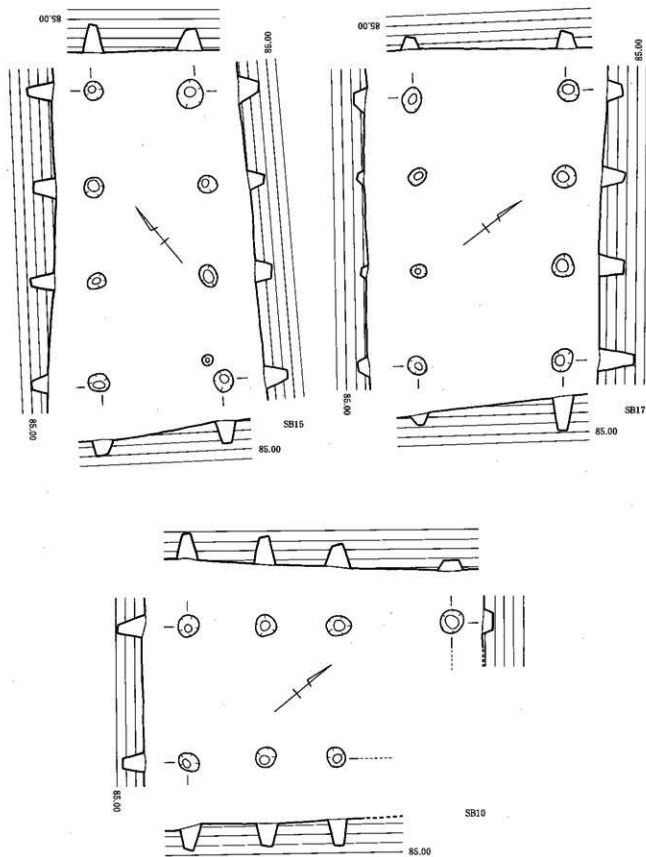
第33図 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測図(4)



第34圖 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測圖(5)

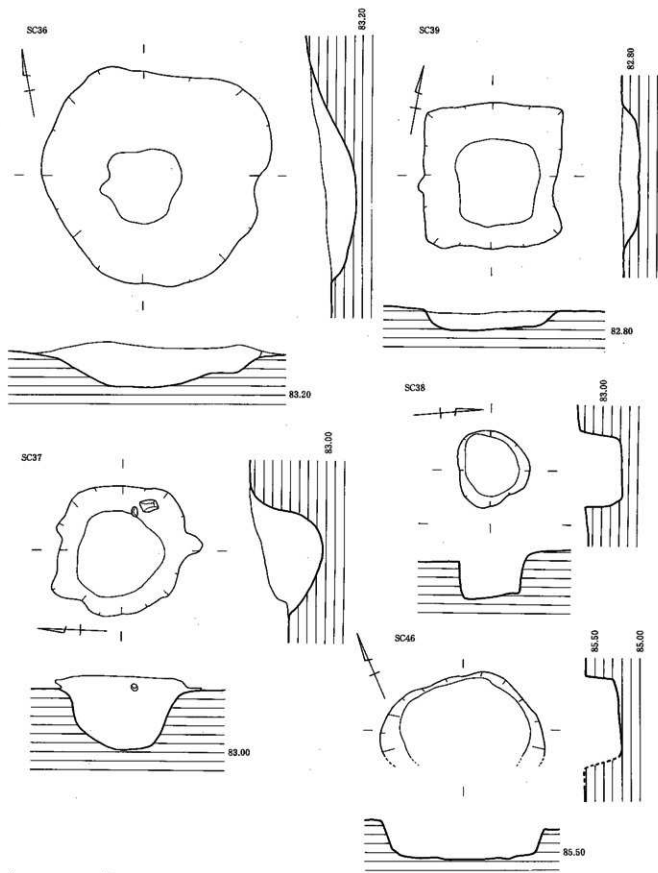


第35圖 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測図(6)

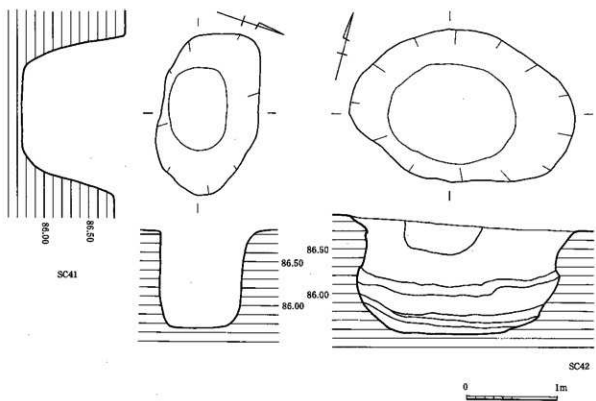
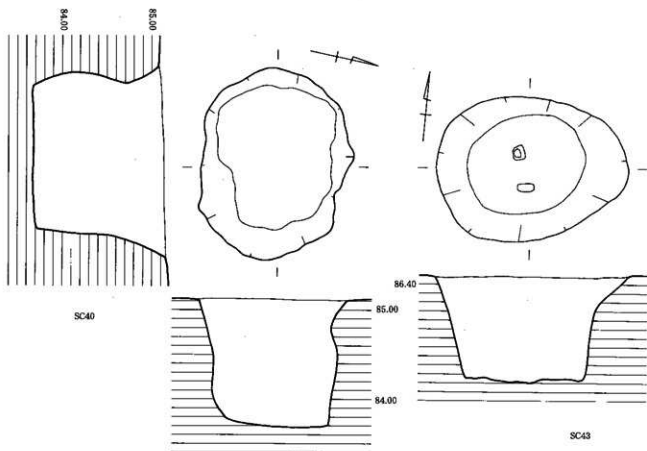


第36図 上ノ原遺跡掘立柱建物跡実測図(7)

0 1 2m

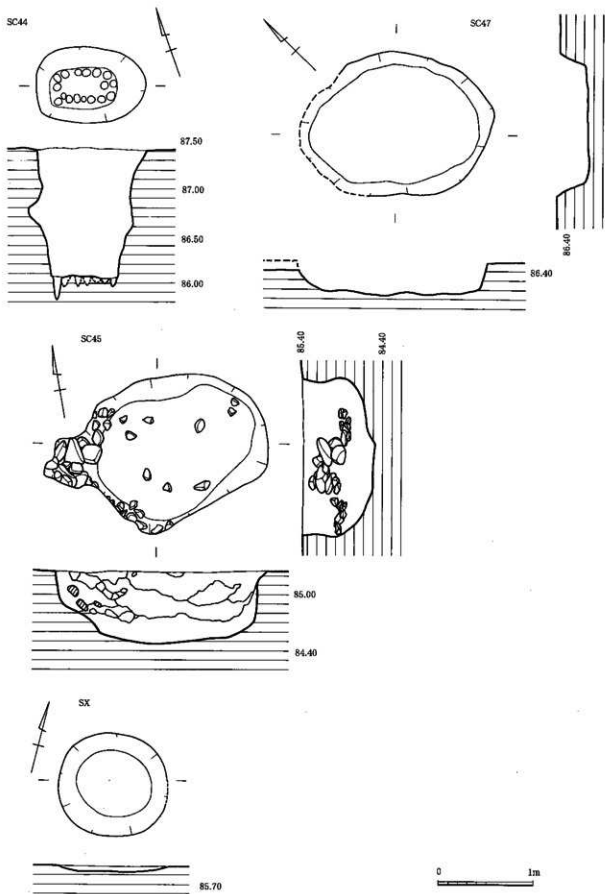


第37図 上ノ原遺跡土坑実測図(1)

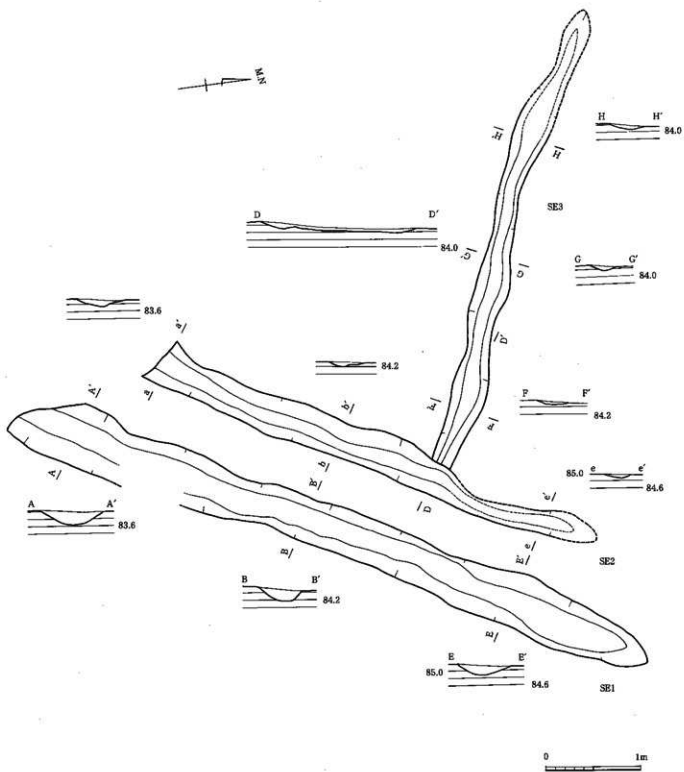


0 1m

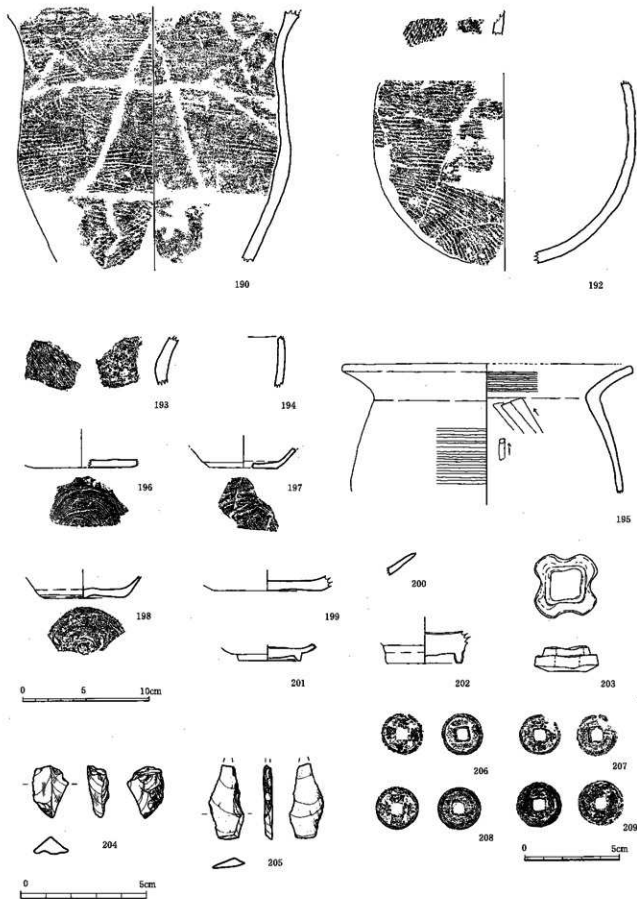
第38図 上ノ原遺跡土坑実測図(2)



第39圖 上ノ原遺跡土坑実測図(3)



第40圖 上ノ原遺跡溝状遺構実測図



第41圖 上ノ原遺跡縄文時代遺構出土遺物実測図

表40 上ノ原遺跡 遺構出土遺物観察表

回番号	変形番号	出土遺構	器種	部位	文様および調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
190	3	SC3B	甕	胴部～胴部	横方向の貝殻半痕文。その上に彫りナデ	横方向の貝殻半痕文。その上に一音彫りナデ	にぶい黄褐色	橙にぶい黄褐色	2cm以下の半透明。黒色。白色粒を含む。	スス付跡
191	83	SC3B	穿鉢	胴部	横文の上に2本の浅い半痕竹葉文	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	3cm以下の乳白色粒を多く含む。	
192	4	SC39	甕	胴部～胴部	横方向のタタキ	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	2cm以下の半透明。橙の粒を多く含む。	
193	5	SC39	甕	胴部	斜方向のハケメ	ヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	3cm以下の茶色。黒色粒を含む。	
194	6	SC39	鉢	胴部	タテ。斜方向のミガキ	丁寧なヨコナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	2cm以下の赤褐色粒。1.5cm以下の半透明。灰色粒を含む。	
195	12	SC39	甕	口縁部～胴部	口縁部から胴部にかけてヨコナデ。胴部はヨコハケ	上唇はヨコハケ。下唇はタテ。斜方向のヘラケスリ	橙	橙	1.2cm以下の赤褐色粒。4cm以下の褐色灰色粒を含む。	外周スス付。内面炭化物付跡
196	13	SH-P5	杯	口縁部			洗黄褐色	洗黄褐色	精良	
197	14	SH-P5	杯	底部	ヘラ切り底	回転ナデ	洗黄褐色	洗黄褐色	精良	
198	15	SH-P4	杯	底部	ヘラ切り履し底	ナデ	橙	橙	精良	
199	16	SH-P6	杯	底部	ヘラ切り履し底	回転ナデ	橙	にぶい褐色	3cm以下の褐色粒を含む。	内周スス付跡
200	17	SH-P8	杯	底部	ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	乳白色の微細粒を含む。	
201	286	SH-P2	碗	底部	施釉 蛇の目輪は青	施釉 黒胎			精良	
202	285	SE1	香子	身	施釉	施釉 黒胎	灰 オリーブ	にぶい赤褐色	灰、糖灰	
203	287	SH-P3	甕	底部	施釉 黒胎。歯押さえ		緑胎		精良	

回番号	変形番号	出土遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	胎種	備考
204	150	SC45 ①	二次加工	2.02	1.45	0.8	1.1	黒曜石	
205	154	SC45 ②	二次加工	2.95	1.4	0.3	0.9	流紋岩	

第2節 遺物

縄文時代中期以降の遺物は、第II層から第IVa層にかけて土器約2,300点、石器類184点が出土した。特に、第IVa層で土器約2,000点、石器類170点出土と集中していた。また、土器、石器類ともに、A区グリッドH14、H15～I14、I15周辺の谷地形及びグリッドN13、N14～O13、O14、O15周辺の谷地形に集中して出土した。

遺物は、縄文時代中期から近世までのものが混在する状態で出土し、包含層の上下が時期差を反映するものではなく、時期、種別の判別が困難な小片、摩耗したものも多かった。

そこで、遺物の時期が比定できる土器について、時代ごとに述べる。なお、石器類については、時代比定が困難なものも多く、後に一括して述べたい。

(1) 縄文時代中期の土器 (210～234)

縄文時代中期のものとして比定できる土器として、約50点が出土した。その施文、形態上の特徴から、A類からF類の5類に分かれる。

A類 (210～220)

器形は、口縁部が内湾し、頸部がくびれる形の深鉢で、いわゆる「キャリバー形土器」といわれるものである。口唇部には連続押し刻みを施し、口縁は波状口縁である。

施文は、全体にタテまたは斜方向の撚糸文(または縄文か)を施し、その上半蔵竹管による沈線文が施されている。沈線文には、口縁部上位の弧状のもの(210、212、213、214など)、胴部の斜方向の組み合わせのもの(212、213、217、219など)がある。内面は、いずれもヨコまたは斜方向のナデが施されている。

B類 (221～224)

器形は、口縁部が内湾し、頸部がくびれる深鉢形と考えられる。

施文はナデの上に、タテ方向の沈線文と沈線による曲線文を施したもの(221)、ナデの上に縦方向の凹線文を施したもの(222、223)がみられる。223は、外面全面にベンガラによる赤彩が施されている。224は、横ナデの上に横方向の連続判突文で、幾分異なる可能性があるが、本類に含めた。内面は、いずれもヨコまたはタテナデがみられるが、221はケズリが主で一部ヨコナデが施され、222はヨコナデの前に、横方向の貝殻条痕文が施されている。

C類 (225～230)

器形は、A類、B類に類似した頸部がくびれる深鉢形と考えられる。また、口縁端部が大きく内側に屈曲しているのが特徴である。

施文は、内側に屈曲した口縁部に横方向の2条または3条の沈線文が施され、その下位には沈線による連弧文、波状文が施されている。内面は、いずれもナデ調整が施されている。227は、ヨコナデの後に工具による沈線文が施されている。

D類 (231)

器形は、逆くの字状に屈曲する頸部が特徴で、外面には沈線による波縄文が施されている。内

面はヨコ方向の貝殻条痕文の後、ヨコナデが施されている。

E類 (232~234)

A類~C類に比べて、比較的直口する口縁を持つ深鉢形と考えられる。口唇部に貝殻腹縁による連続押圧刻みが施されている。

施文は、斜方向の貝殻条痕文の後にヨコナデが施されている。内面は、いずれも斜方向の貝殻条痕文の後にヨコナデが施されている。

(2) 縄文時代後期の遺物 (235~240)

縄文時代後期のものと思われる土器約10点が出土した。

235~239は、器形は、頸部がくの字状に屈曲する深鉢形を呈すると考えられ、口縁部は、やや肥厚する。口縁部と胴部の上位にのみ施文がみられるのが特徴である。口縁部上位に2条の沈線文が施されたもの(236、239)口縁部状に2個単位の横方向の列点文のもの(235)がみられる。胴部には、ヨコナデの上に5条の沈線文と2個単位の刺突文(237)、2条の沈線文(238)がみられる。239は、ヨコナデの上に横ミガキを施し、頸部には竹管工具による横方向の刺突列点文がみられる。

240は、幾分口縁が広がる形の深鉢形を呈し、内面、外面ともに横方向のヘラミガキが施されている。口唇部は丸みをもって、先端が細くなるように作られている。

(3) 縄文時代晩期の土器 (241~292)

縄文時代晩期のものと比定できる土器として、約110点が出土した。施文、形態上の遅疑から、a類~d類の4つに分類できた。

a類 (241)

241は、幾分肥厚する口縁を持ち、外面は横方向の3条の沈線文が施され、内面はヨコナデが施されている。

b類 (244~277)

b類は、b1類(口縁部が肥厚する口縁帯を持つ)、b2類(b1類に類似する口縁帯をもち、横方向の孔列文が施されている)、b3類(b1類、b2類と比較して、肥厚しない口縁に孔列文が施されている)の3つに細分される。

b1類 (244~258)

口縁が直口する深鉢形を呈し、口縁部が肥厚するのが特徴である。口唇部は、いずれも丁寧な調整だが、ヒレ状の突起をもつもの(244)、丸みを持って先端が細くなるもの(248、249、257など)、口唇に平坦面を作るもの(252、253、254など)がある。

施文は、外面、内面ともにヨコナデを施し、一部外面に、横または斜方向の条痕文が施されているものがある。(247、249、252など)

b2類 (259~271、276、277)

口縁部の肥厚帯、口唇部の形状はb1類に類似し、口縁もほぼ直口するが、226、271などは、

大きく外反している。

施文は、外面、内面ともにヨコナデが施され、口縁の肥厚帯の下位に横方向の孔列文が施されているものが多いが、268、270は、肥厚する口縁帯の上に孔列文が施されている。276は、口唇部にヒレ状の突起を持ち、277は、リボン状の突起を持ち、その下位に孔列文が施されている。

b3類 (272~275)

全体の器形は、b2類に類似する深鉢形 (272~274) と、胴部から底部に欠けて屈曲し丸底を呈する浅鉢形のもの (275) がある。

施文は内面、外面ともにヨコナデが施され、口縁部上位には、横方向の孔列文が施されている。

c類 (278~292)

c類は、器形はb類に類似した深鉢形を呈し、口縁部に無刻目突帯文が施されるのが特徴である。cl類 (ヨコナデに、無刻目突帯文が施されている)、c2類 (ヨコナデに、無刻目突帯文が施され、その下位に孔列文が施されている) に細分される。

cl類 (278~283)

全体の器形はb類に類似した深鉢形を呈し、口縁に無刻目突帯文が施される。

施文は、外面、内面ともにヨコナデが施され、一部、外面または内面に横方向の条痕文が施されている。(281、282、283など)

c2 (284~292)

全体の器形、口縁の無刻目突帯文などは、Cl類に類似するが、突帯文の下位に横方向の孔列文が施されているのが特徴である。

施文は外面、内面ともにヨコナデが施され、一部条痕文がみられるものもある (287、289など)。284は、孔列文の下位に帯状の赤彩が施されている。

d類 (242、243)

242、243は、くの字状に外反する口縁を持ち、胴部は大きく張り出す鉢形を呈すると考えられる。外面、内面ともに横方向のヘラミガキが施されている。縄文時代晩期の中でも、最も新しい時期のものと考えられる。

(4) その他の縄文土器 (293~314)

前述の類に含まれない少量出土の無文土器で、縄文時代の土器と判断できるものを本類に含めた。

293~295は、幾分外に広がる形の口縁を持つ無文土器である。293、294は、外面、内面ともにヨコナデを施し、内面の口縁部上位に、1条または2条の横方向の沈線文が施されている。295は、外面、内面ともにヨコナデが施され、口唇部が丸みを持って肥厚している。

296は、外面に縄布圧痕がみられる鉢で、内面はミガキが施されている。

297~304は、外面、内面ともに横または斜方向のナデが施された無文土器である。口縁部が直口するもの (297、298など)、かなり外に広がるもの (299、300など)、湾曲するもの (302、303) がある。

305~314は、外面、内面に条痕文を施したものである。口縁部は直口するもの (305)、外に

広がるもの (308)、湾曲するもの (306、313) がある。

底部 (315~331)

縄文土器の底部と考えられるものを本類に集めた。平底のもの (315~324) と、上げ底のもの (325~331) の2つに分かれる。

315、316は、底部から胴部にかけて直線的に広がる器形で、底面には網代圧痕がみられる。315は、外面に斜方向のナデ、縦方向の貝殻条痕文が施され、内面にはヨコまたは斜方向の貝殻条痕文が施されている。316は、外面、内面ともに横または斜方向のナデが施されている。

317、323は、底部から内側に屈曲して胴部に延びていく器形で、外面には縦方向のナデ、内面には横方向のナデが施されている。

318~320は、底部から幾分屈曲して胴部に延びていく器形で、外面、内面ともに、ヨコまたは斜方向のナデが施されている。

321は、底部から幾分屈曲して胴部に延びていく器形で、外面、内面ともに、ヨコまたは斜方向の貝殻条痕文が施されている。

322は底部から胴部にかけて著しく広がる器形で、外面にはヨコまたは斜方向のナデが、内面には横方向のヘラナデが施されている。

324は、底部から胴部にかけて直線的に延びていく器形で、外面、内面ともに、ヨコまたは斜方向のナデが施されている。

325 327 330は、底部から胴部にかけて幾分屈曲して広がっていく器形で、外面、内面ともに、ヨコまたは斜方向の貝殻条痕文と一部ナデ調整が施されている。

326は、底部から胴部にかけて直線的に延びていく器形で、外面、内面ともにヨコまたは斜方向のナデが施されている。

328、329は、底部から胴部にかけて屈曲し、外面、内面ともにヨコまたは斜方向のナデが施されている。

331は底部から胴部にかけて直線的に延びていく器形で、外面には縦方向の後丁寧なナデが、内面にはヨコまたは斜方向の貝殻条痕文が施されている。

(5) 古代の土器 (332~385)

古代から中世、近世にかけての遺物が、次のように出土した。

332~379は、古代のものと考えられる土師質土器で甕、壺、杯、皿がみられる。

甕 (332~344)

332、333、338は頸部がくの字に屈曲する口縁部で、特に333、338は、頸部内面に明確な稜をもち、口唇部も先細りとなる。334~337、343は、緩やかに外反する口縁部で、口唇部はあまり鋭角化していない。344は、幾分内湾する口縁部である。334、337、344の口唇部には平坦面が作られている。

339、340は、くの字に屈曲する頸部、341、342は、緩やかに外反する口縁に続く胴部である。調整は外面にナデを施したもの (332、334~338など)、タタキを施したもの (339~341など)、

ハケメのみられるもの (342) がある。内面はいずれもナデ調整が施されている。

壺 (345~352)

345、346は、屈曲する頸部からほぼ直口する口縁部、347は朝顔形に開く口縁部である。348~352は、くの字に屈曲する頸部で、特に351は内面に明確な稜をもつ。

調整は外面にナデを施したもの (345~348、350など)、タタキを施したもの (349) がある。内面はいずれもナデ調整が施されている。

底部 (353~368)

353~355は、平底の壺の底部である。353、354は、しっかりした底部を持ち、355は底部外面がやや丸みを帯びている。353、355は、外面、内面ともにハケメが、354は、外面にタタキ、内面にナデが施されている。366は、胴部が丸く張っていく平底の壺である。外面、内面ともにナデ調整が施されている。

356~363は、甕または壺の底部と思われるものである。底部の接地面がしっかり作られ安定したもの (356、362、359など)、底部が丸みを持ち接地面がせまく不安定な感じのもの (360、361、363など) がある。

調整は外面にナデを施したもの (360)、タタキの施されたもの (356、358、363など)、ナデの後、ハケメのみられるもの (357)、内面はナデを施したもの (356~361など)、タタキを施したもの (362) がある。

364、367は、小型の甕の底部である。平底の底部からあまり広がらずに胴部に延びている。外面、内面ともにナデ調整が施されている。いわゆる「増」といわれるものである。

365、368は、甕の底部と思われるもので、365は外面にナデ、ミガキが施され、368は外面にナデ、タタキが施されている。内面はいずれもナデ調整が施されている。

杯・皿 (369~376)

369、370は土師質の杯である。いずれも外面、内面ともにナデ調整が施され、370は、ヘラ切り底で、内面には回転ナデが施されている。

371~373は、高杯の底部、脚部である。371、373は、外面、内面ともにナデ調整が施され、372は、外面、内面ともにハケメが見られる。

374~376は、土師質皿の底部、胴部である。いずれも、外面、内面ともにナデ調整が施され、374、375はヘラ切り底である。また、375は回転ナデが施されている。

布目痕土器 (377~379)

内面に布目圧痕がみられ、外面にはナデ調整が施されている。377、378は、口唇部が鋭角になるように作られ、379は、円錐形の底部を持つ。いわゆる「製塩土器」といわれるものである。

須恵器 (380)

380は、須恵器の高台付杯である。外面には、回転ナデが、内面にはナデが施されている。

(6) 中世から近世にかけての陶磁器類 (381~385)

381は、青磁碗の底部である。外面、内面ともに施釉貫入がみられ、高台内には釉剥ぎがみられる。

明代末期のものと考えられる。382～384は、いずれも中世のものと考えられる磁器の椀、または皿の底部、胴部片である。382は、稜花皿の胴部片、383は、外面に線描蓮弁文を施した椀、384は、白磁の小杯である。

385は、型作りの人形の一部である。外面はミガキ、内面は指押さえがみられ、時期的には近世のものに比定される。

(7) 縄文時代中期以降の石器

縄文時代中期以降のものと思われる石器類184点が、A区の第IV層を中心として、出土した。(一部はA区の第II層、C区、D区の第IV層より出土)

石斧8点、スクレーパー1点、石錐3点、磨石・敲石4点、砥石3点、石鏃、石核、垂飾品各1点で、その他に剥片、破片が出土した。石鏃、石斧、スクレーパーは縄文時代後期から晩期のものと考えられるが、他は時期不詳である。

使用された石材は、多くがホルンフェルス、流紋岩類で、磨石・敲石、砥石には砂岩または尾鈴酸性岩類が用いられていた。

石斧 (386～391)

石斧は 磨製石斧 (386～389)、局部磨製石斧 (390)、打製石斧 (391) に分かれる。出土位置は、いずれもA区、特にN14グリッドで4点出土している。用いられた石材は、8点中6点がホルンフェルス、2点が流紋岩類である。

磨製石斧 (386～389) は、いずれも両側から研ぎだして刃部を形成している。また、386、387は両刃で、388は片側だけに刃部を作っている。390は、先端の一部のみを研磨し刃部を作り出している。391は、打ちかちのみで刃部を形成している。

スクレーパー (392)

A区第IV層のO14グリッドで出土した。一面に自然面を残す縦長剥片を用い、左側面に加工を加え刃部を作り出している。石材はホルンフェルスが用いられている。

石錐 (393～395)

A区第IV層のO14、O15グリッドで、4点が出土した。いずれも流紋岩類のやや扁平な小型礫を用いている。

393は、両端を打ち欠いた打欠石錐、394、395は両端に切り込みを施している、いわゆる「切目石錐」といわれるものである。

磨石・敲石 (396～398)

4点が、A区から2点、C区、D区から各1点、いずれも第IV層から出土した。石材は、3点が砂岩、1点が尾鈴酸性岩類であった。

396は、やや縦長の円礫を用い、397、398は、小型の円礫を用い、いずれも上部に打痕がみられる敲石である。

垂飾品 (399)

399は、流紋岩類を持ちいた垂飾品で、A区O14グリッドの第IV層で出土した。中央に両側より

加工した穿孔がみられる。

砥石 (400、401)

砥石は、3点 (C区2点、A区1点) が第IV層で出土した。用いられた石材は、2点が砂岩、1点が流紋岩類であった。

400は、砂岩の扁平な礫を用いて、両面に広く研磨痕がみられる。401は、流紋岩類の剥片を用い、一面に研磨痕が、裏面には剥離痕がみられる。

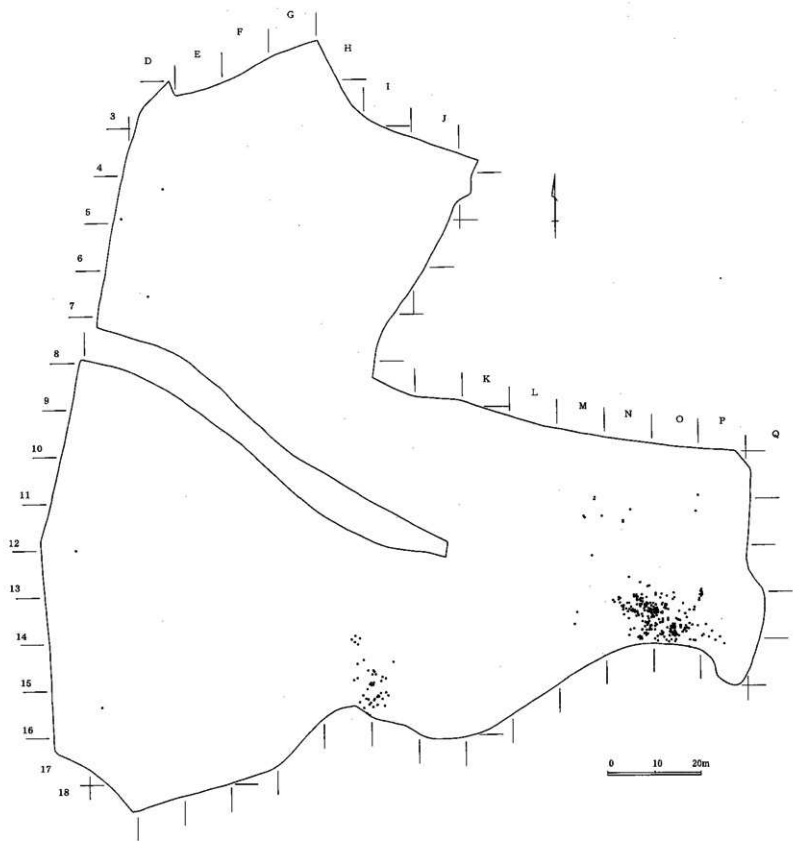
石鏃 (402)

402は、A区I15グリッドの第II層で出土した。流紋岩類を用いた扶りのみられない平基式の打製石鏃である。両側縁は、かなり円味をもってふくらみ、全体形は五角形に近い。

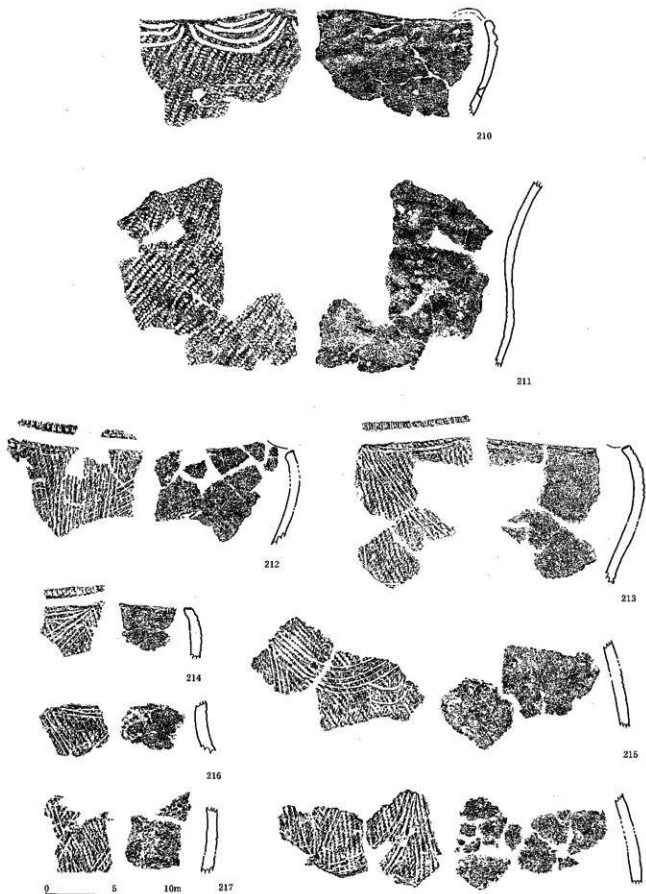
使用痕のある剥片 (403、404)

使用痕のある剥片は、7点がA区第IV層で出土した。石材は、4点が流紋岩類、3点がホルンフェルスであった。

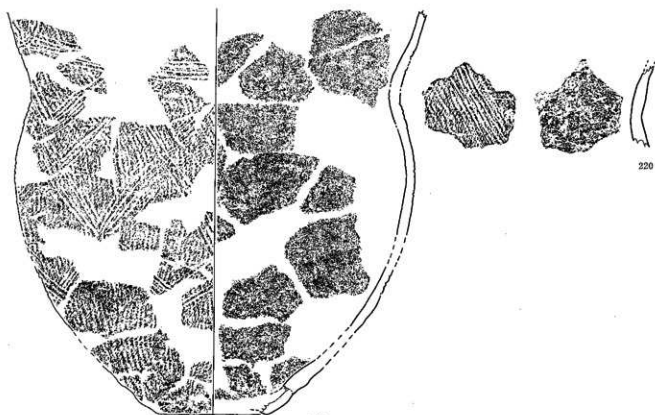
403、404いずれもA区O14グリッドで出土し、403は、縦長剥片の一侧縁に使用痕がみられ、404は、幅広い剥片の一侧縁に使用痕がみられる。



第42図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器分布図

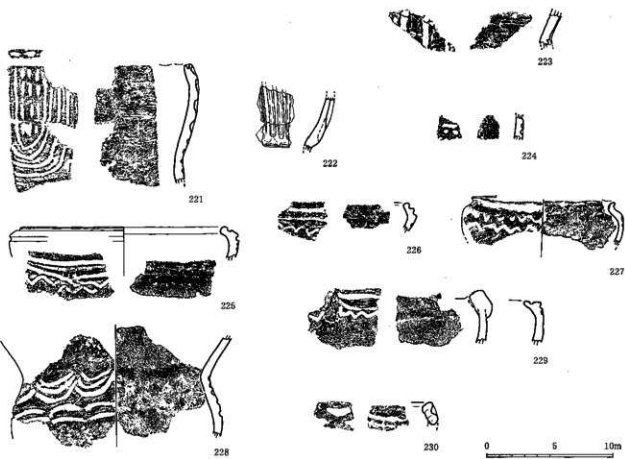


第43圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(1)



219

220



221

222

223

224

225

226

227

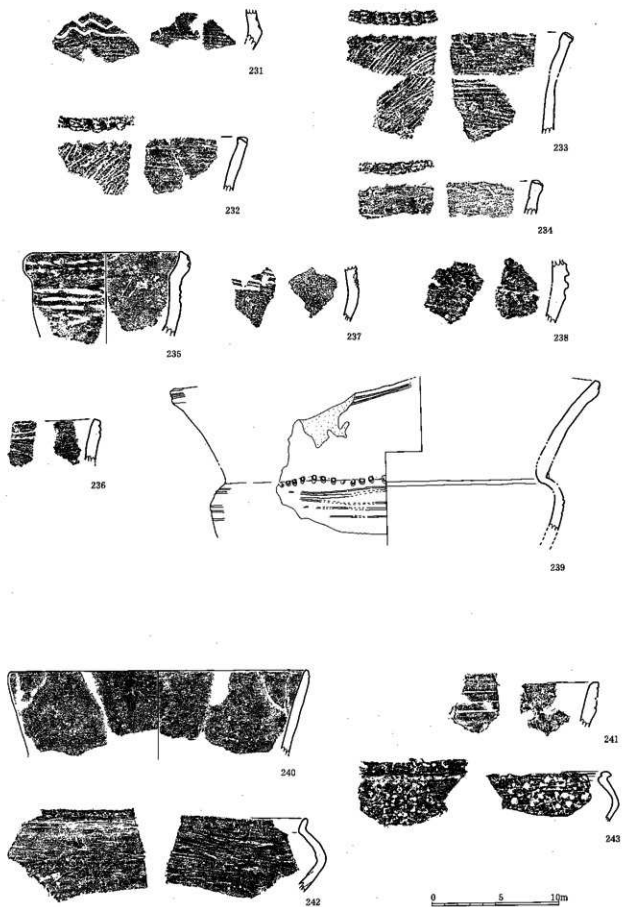
229

228

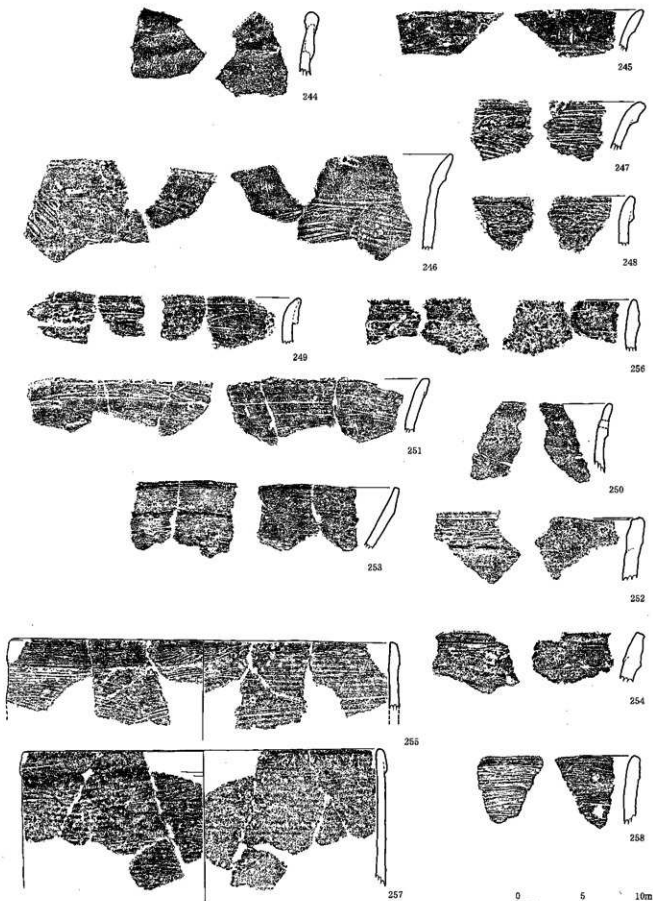
230

0 5 10cm

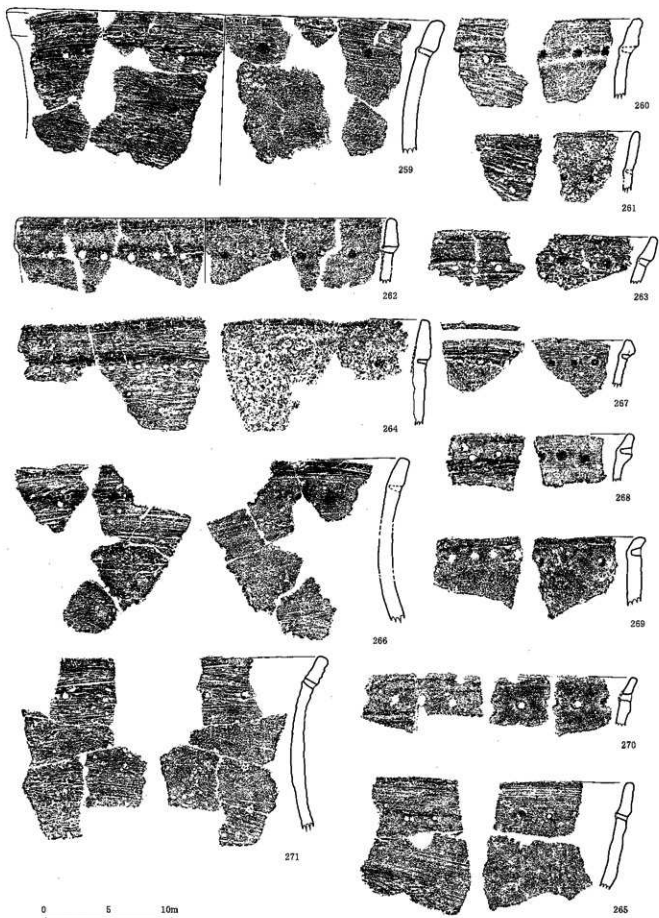
第44圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(2)



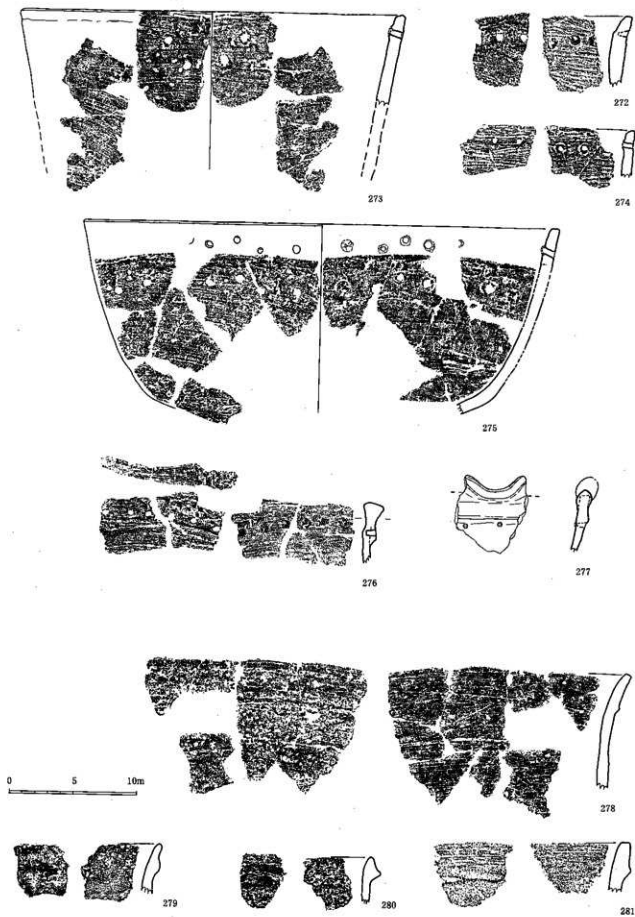
第45図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(3)



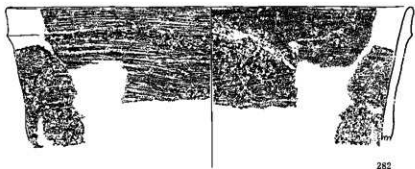
第46圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測圖(4)



第47圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測圖(5)



第48圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(6)



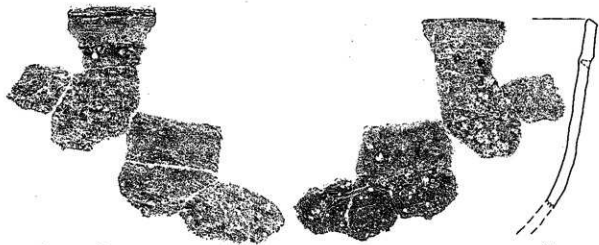
282



283



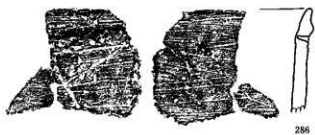
284



285

0 5 10m

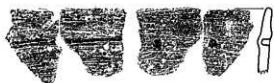
第49図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(7)



286



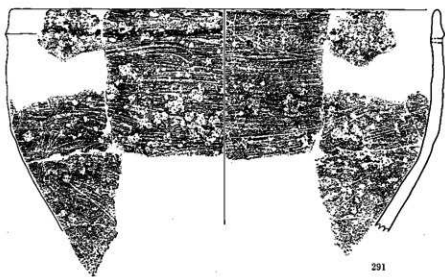
287



288



289



291



290



292



293



294



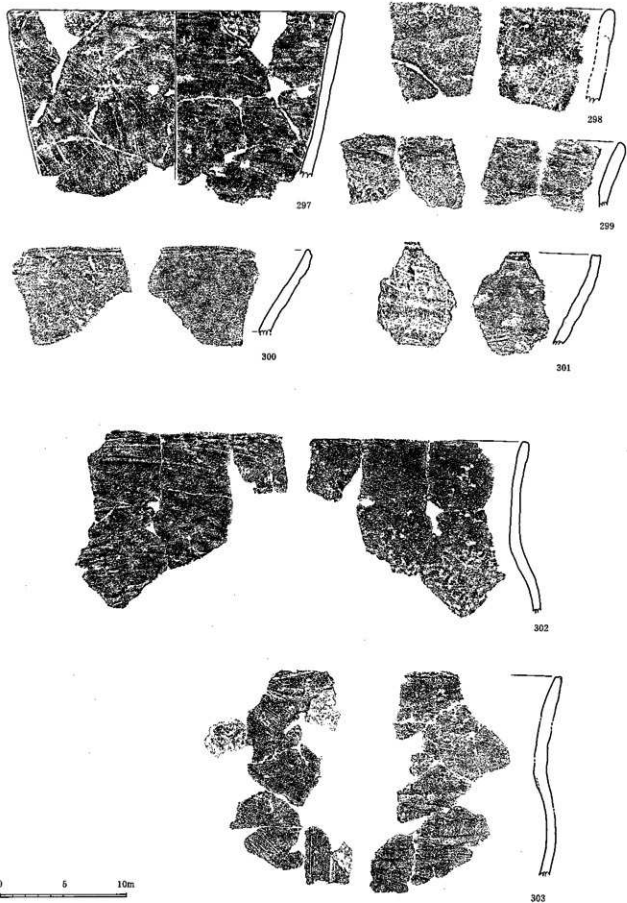
295



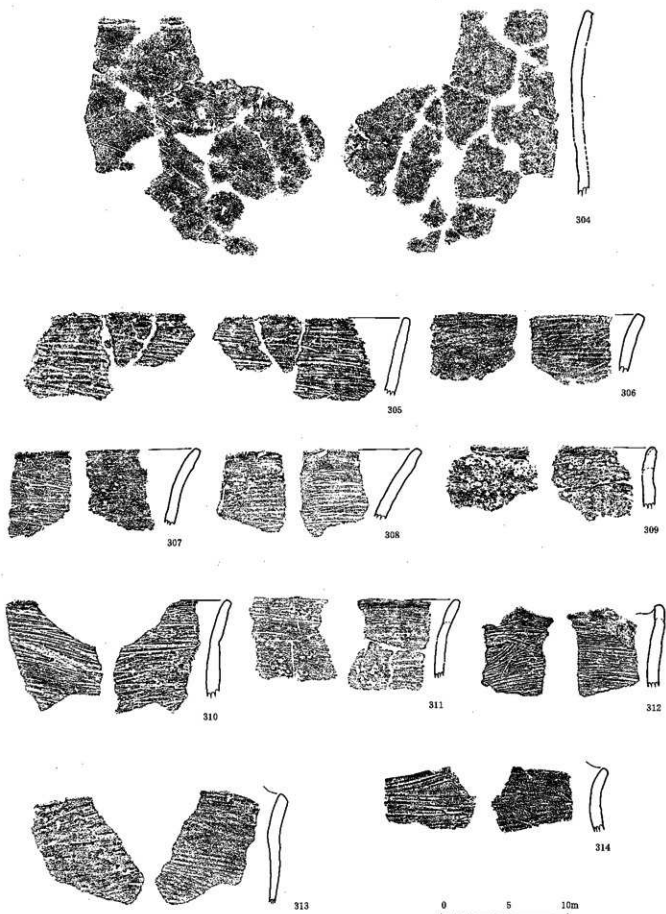
296

0 5 10m

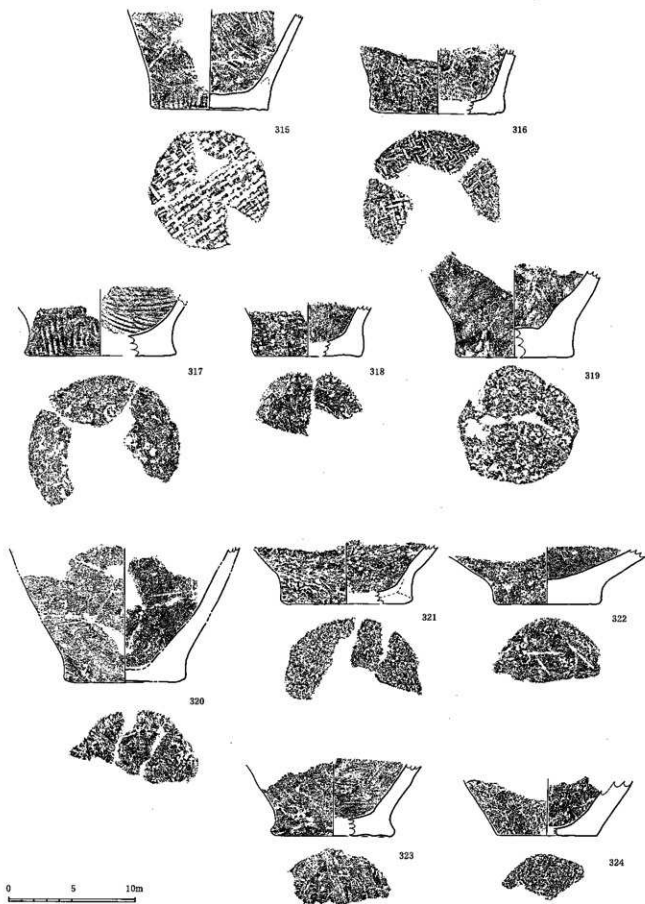
第50圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(8)



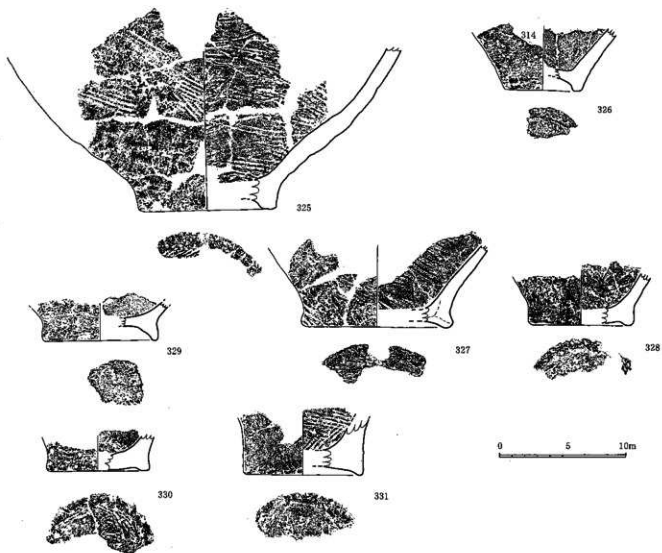
第51圖 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(9)



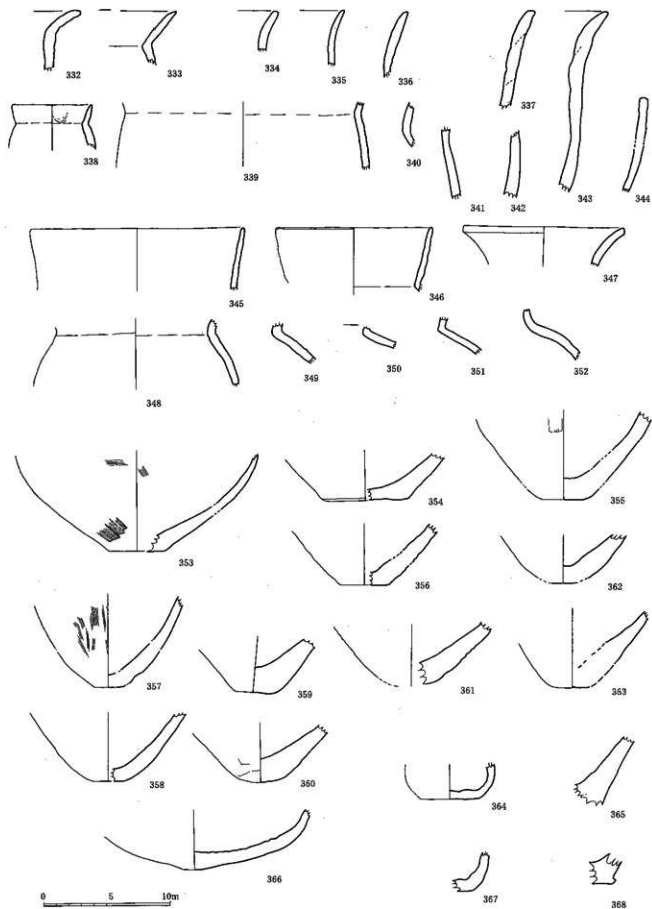
第52図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(10)



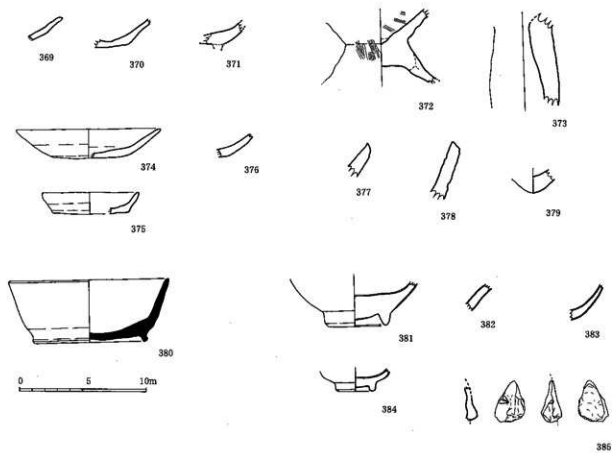
第53図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(11)



第54図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(12)



第55図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(13)



第56図 上ノ原遺跡縄文時代中期以降出土土器実測図(14)

表42 上ノ原遺跡 土器観察表(2)

図番号	区	種別	器種	部位	文様および調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
247	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	よこナテ、一部に赤褐色文あり、斜方向の呉須条痕文	横ナテ(板状工具?)	灰黄	に濃い黄褐色	3mm以下の白色粒、に濃い黄褐色粒、2mm以下の灰白色粒、黒褐色粒を含む。	外面にスス付層
248	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、口縁部	横ナテ(板状工具?)	灰黄	に濃い黄褐色	4mm以下の褐色粒、黒褐色粒、棕色粒を含む。	
249	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、一部斜方向の呉須条痕文、口縁部	横状工具等による横ナテ	灰黄	に濃い黄褐色	4mm以下の褐色粒、灰白色粒を含む。	
250	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、穿孔あり	横ナテ	灰黄	黄褐色	3mm以下の褐色粒、黒褐色粒、灰色粒を含む。	孔列文土器
251	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ(陶文不明)、口縁部把持部	横ナテ(板状工具?)	黄褐色	に濃い黄褐色	0.5mm-4mm以下の赤褐色粒、0.2mm-6mm以下の乳白色粒、0.5mm-3mm以下の灰白色粒を含む。	内面にわずかに灰化層付層
252	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(呉須条痕文?)	横ナテ、指紋圧痕	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	3mm以下のに濃い黄褐色粒を多く含む。	
253	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、口縁部	横ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	4mm以下の黄褐色粒、灰白色粒を含む。	
254	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、口縁部	横ナテ	灰白	灰黄	4mm以下の砂粒を含む。	わずかにスス付層
255	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	板状工具による横ナテ	板状工具による横ナテ	黄褐色	に濃い黄褐色	2mm以下のに濃い黄褐色粒を含む。	外面に部分的にスス付層
256	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ(板状工具?)、わずかに肥厚	ナテ、風化著しい	黄褐色	灰黄	4mm以下の砂粒を含む。	一部断面にスス付層
257	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の呉須条痕文(一部横ナテ?)	斜方向の指紋以上を指すか、指紋らしい	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	3mm以下の褐色粒、乳白色粒、灰色粒を多く含む。	外面に一部スス付層
258	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(呉須条痕文?)、口縁部	横ナテ	灰黄	に濃い黄褐色	2.5mm以下の赤褐色粒を含む。	口縁上部に黒炭あり。
259	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、板状工具による横ナテ、口縁部	横状工具による横ナテ、横ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	6mm以下の赤褐色粒、3mm以下の赤、白、灰色粒、2mm以下の黒褐色粒を含む。	穿孔あり、孔列文土器。
260	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	口縁部、孔列文、横ナテ	横ナテ(板状工具?)のナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	3mm以下の赤褐色粒、赤褐色粒を多く含む。	
261	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	斜方向の赤褐色文(板状工具?)の上を横ナテ、孔列文	横ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	3mm以下のに濃い赤褐色粒、赤灰色粒を多く含む。	孔列文土器、103と同一個体か。
262	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	口縁部、孔列文、横ナテ	横ナテ(3角状遺物?)	に濃い黄褐色	黄褐色	5mm以下の赤褐色粒を含む。	孔列文土器
263	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	口縁部、孔列文、横ナテ(工具不明、表面の赤褐色がみられる)	横ナテ(割断が多し)	黄褐色	黄褐色	3mm以下の赤褐色粒を含む。	孔列文土器
264	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、孔列文、口縁部	横ナテ(割断が多し)	黄褐色	灰黄	4mm以下の赤褐色粒、灰色粒、7mm以下の褐色粒を含む。	孔列文土器
265	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	板状工具による横ナテ、斜方向の呉須条痕文、口縁部、孔列文	板状工具による横ナテ、1.5mm以下の指紋付ナテ	黄褐色	灰黄	1.5mm以下の褐色粒、灰白色粒を含む。	3角状遺物と同一個体か、動物糞。
266	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(呉須条痕文?)、口縁部	横ナテ、横ナテ(板状工具?)	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	5mm以下の褐色粒、4mm以下の褐色粒を含む。	孔列文土器
267	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	孔列文、横ナテ、肥り付突部	横ナテ、指紋らしい文層あり。	に濃い黄褐色	黄褐色	6mm以下の灰白色粒、黄褐色粒を含む。	外面に一部スス付層。
268	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、板状工具による横ナテ、孔列文、口縁部	横ナテ(板状工具?)	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	約6mmの灰白色粒、3mm以下の灰褐色粒、2.5mm以下のに濃い黄褐色粒を含む。	孔列文土器、外縁に一部スス付層。
269	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、斜方向のナテ、横ナテ、孔列文	横ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	4mm以下のに濃い黄褐色粒、2mm以下の乳白色粒、黒褐色粒を含む。	胎土の調整、一部にスス付層あり。
270	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ? (風化している) 孔列文、口縁部	横ナテ? (風化している)	黄褐色	に濃い黄褐色	2.5mm以下の乳白色粒、2mm以下の灰褐色粒、1.5mm以下の赤褐色粒、2.5mmを含む。	孔列文土器
271	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(図体不明、板状工具?)、口縁部	横ナテ、板状工具による横ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	5mm以下の赤褐色粒、黒褐色粒、3mm以下の赤褐色粒を含む。	穿孔あり、孔列文土器
272	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	孔列文、横ナテ、強い横ナテ、斜方向の肥りナテ	横方向の指紋条痕文、指紋らしい文層あり。	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	6mm以下の灰白色粒、赤褐色粒を含む。	孔列文土器。
273	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、上下に不規則な孔列文、板状工具による横ナテ	横ナテ、横ナテ、横ナテ、横ナテ	黄褐色	黄褐色	無糖0-5mm以下の黒褐色粒を含む。	穿孔あり、外面にスス付層。
274	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(呉須条痕文?)、口縁部	横ナテ、横ナテ(板状工具?)	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	3mm以下のに濃い黄褐色粒を含む。	孔列文土器
275	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(呉須条痕文?)、口縁部	横ナテ、横ナテ(板状工具?)	に濃い黄褐色	黄褐色	3mm以下の褐色粒、灰色粒、乳白色粒を含む。	胎土の調整、一部にスス付層あり。
276	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	ヒレ状突部、孔列文、口縁部、工具による横ナテ(部分的に板状工具)	工具による横ナテ(部分に板状工具)	灰黄	灰黄	4mmの灰白色粒を含む。	孔列文土器、165と同一個体か。
277	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	リムに状突部、突部、孔列文、横ナテ	横ナテ、一部に指紋条痕文を含む。	に濃い黄褐色	黄褐色	2mm以下の赤褐色粒を含む。	孔列文土器、外面にスス付層。
278	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、指紋による横方向のつまみ(板状工具?)、やや肥厚した横ナテ	横ナテ(板状工具?)	に濃い黄褐色	黄褐色	0.2mm-3mm以下の黒褐色粒、0.2mm-4mm以下の赤褐色粒を含む。	胎土の調整、一部にスス付層あり。
279	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、突部	横ナテ	黄褐色	黄褐色	5mm以下の赤褐色粒、3mm以下の赤褐色粒、灰白色粒を含む。	胎土の調整、一部にスス付層あり。
280	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ(風化著しく調整不明)、突部	横ナテ(風化著しく調整不明)	に濃い赤褐色	に濃い赤褐色	2mm以下の灰白色粒を含む。	胎土の調整、一部にスス付層あり。
281	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、横方向の赤褐色文(呉須条痕文?)	横ナテ(工具不明)	に濃い黄褐色	黄褐色	4mm以下のに濃い黄褐色粒を多く含む。	胎土の調整、一部にスス付層あり。
282	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	胎土調整不明の工具による横ナテ、突部	横ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	6mm以下の赤褐色粒、5mm以下の灰褐色粒を含む。	外面にスス付層。
283	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、口縁部	横ナテ	黄褐色	黄褐色	5mm以下の赤褐色粒、3mm以下の赤褐色粒、灰色粒を含む。	外面にわずかにスス付層。

表43 上ノ原遺跡 土器観察表(3)

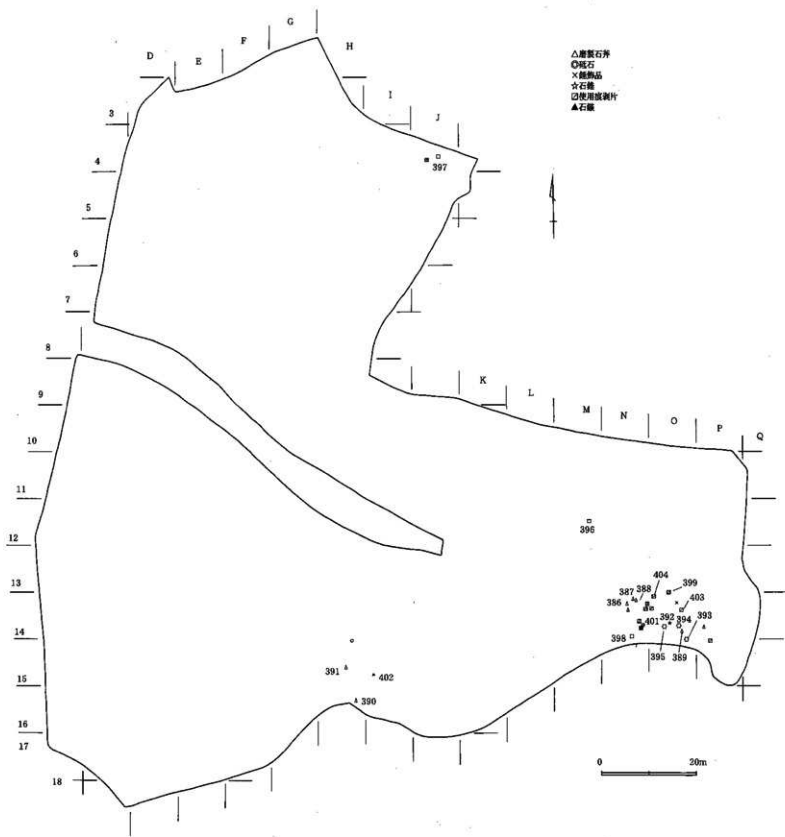
図番号	区	種別	器種	部位	文様および器型		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
284	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、工具による彫刻、横ナテ多方向のナテ溝(口縁部一筋目を除く)の残存あり。	竹ノ糸工具による横ナテ	褐色	褐色	5mm以下の灰色粒、乳白色粒を含む。	胎土に赤褐色の鉄質を多く含む。
285	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	口縁部、孔文、横ナテ(風化痕跡)	横ナテ	にない	にない	褐色	褐色
286	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横い、横ナテ(横紋工具?)、磨製器目	横い、横ナテ(横紋工具?)	にない	にない	褐色	褐色
287	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	磨製器目	横ナテ	にない	褐色	褐色	褐色
288	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	磨製器目、横ナテ、無彫目突等文、横紋工具による横ナテ	横ナテ	にない	にない	褐色	褐色
289	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横方向の横線文(全体不揃、横紋工具?)、口縁部、磨下ノ孔列文	横ナテ	にない	褐色	褐色	褐色
290	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、突等文、孔列文	横ナテ(横紋工具?)	褐色	褐色	褐色	褐色
291	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横方向の横線文(横ナテ?)、斜方向の横線文(ナテ?)、孔列文、磨下ノ孔行突等	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
292	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	突等文、孔文、横ナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
293	A	縄文	深鉢	口縁部	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ、2条の突等	褐色	褐色	褐色	褐色
294	A	縄文?	深鉢	口縁部	横ナテ	横ナテ、1条の横い突等	褐色	褐色	褐色	褐色
295	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ(孔文?)、磨下ノ孔文、磨下ノ孔文、磨下ノ孔文、磨下ノ孔文	横ナテ(孔文?)、磨下ノ孔文、磨下ノ孔文、磨下ノ孔文	褐色	褐色	褐色	褐色
296	A	縄文・弥生	深鉢	磨下ノ底部	磨下ノ底	磨下ノ底	褐色	褐色	褐色	褐色
297	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、磨下ノ底部、磨下ノ底部、磨下ノ底部	横ナテ、磨下ノ底部、磨下ノ底部、磨下ノ底部	褐色	褐色	褐色	褐色
298	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、磨下ノ底部、磨下ノ底部、磨下ノ底部	横ナテ、磨下ノ底部、磨下ノ底部、磨下ノ底部	褐色	褐色	褐色	褐色
299	A	縄文・弥生	深鉢	口縁部	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
300	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
301	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
302	D	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
303	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
304	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
305	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
306	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
307	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
308	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
309	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
310	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
311	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
312	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
313	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
314	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
315	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
316	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
317	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
318	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
319	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色
320	A	縄文・弥生	深鉢	口縁一筋目	横ナテ、斜方向のナテ	横ナテ	褐色	褐色	褐色	褐色

表44 上ノ原遺跡 土器観察表(4)

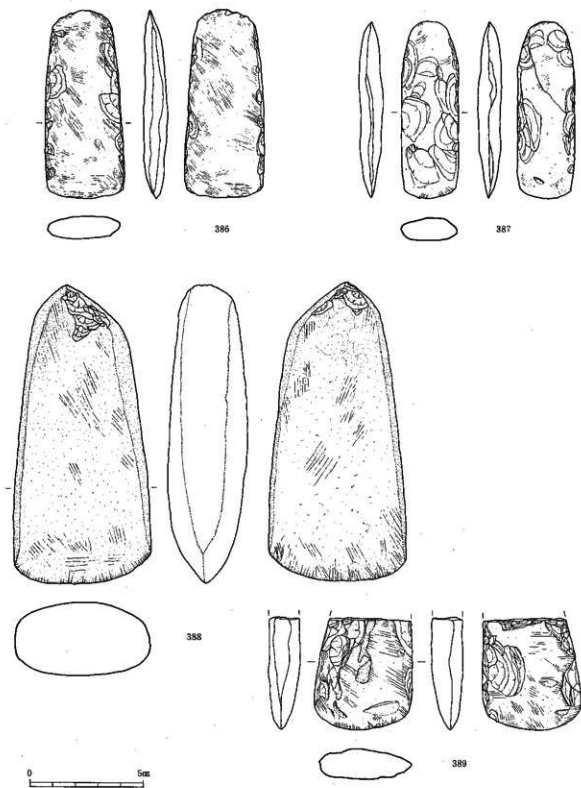
図番号	区	種別	器種	部位	文様および装飾		色 調		土	備 考
					外 面	内 面	外 面	内 面		
321	A	縄文・弥生	深鉢	底部	斜方向と横方向の貝殻条文、ナテ	斜方向の貝殻条文、横方向の貝殻条文	浅黄	黄灰	5mm以下の赤褐色粒、灰白色粒、乳白色粒を多く含む。	
322	A	縄文・弥生	深鉢	底部	斜めもしくは斜方向のナテ、指痕あり、平高	横方向のへらナテ	横	に強い黄褐色	4mm以下の灰白色粒をわずかに含む。	内面に指痕に並行條紋あり。
323	A	縄文・弥生	深鉢	底部	斜方向のナテ、横ナテ、指痕あり、底部はナテノテのナテ(横ナテ)	斜めと横方向のナテ、横ナテ、横方向のナテ	に強い黄褐色	黄褐色	1mm以下の白色粒、灰白色粒を含む。	外側に筋状入肌。
324	D	縄文・弥生	深鉢	底部	ナテもしくはミガキ、黒化が著しいが全体にミガキが残存	丁字ナテもしくはミガキ、黒化が著しい。	に強い黄褐色	に強い黄褐色	1mm以下の白色粒、黄褐色粒、0.5mm以下の黄褐色粒をまばらに含む。	
325	A	縄文・弥生	深鉢(山形)	胴部～胴部	斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文	斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文	に強い黄褐色	浅黄	4mm以下の白色粒、赤褐色粒、1mm以下の黒色、透明光沢粒を含む。	内面に筋状入肌。
326	D	縄文・弥生	深鉢(山形)	底部	斜めまたは横ナテ、黒化多い	ナテ?	に強い黄褐色	に強い黄褐色	1.5mm以下の黒と、1mm以下の石灰、2mm以下の砂粒を含む。	内面に筋状入肌。
327	A	縄文・弥生	深鉢(山形)	胴～胴部	斜方向と横方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文	斜方向と横方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文	に強い黄褐色	黄褐色	3mm以下の白色、赤褐色粒、2mm以下の乳白色粒を含む。	
328	A	縄文・弥生	深鉢(山形)	底部	斜方向のナテ、指痕あり、黒化が著しい	横ナテ	横	に強い黄褐色	黒部～4mm以下の黄褐色粒、0.2mm～1.5mm以下の白色粒を含む。	
329	A	縄文・弥生	深鉢(山形)	底部	横ナテ、指痕あり	ナテ	浅黄	灰	微細粒の石灰、黒石を少量含む。	内面に筋状入肌。
330	A	縄文・弥生	深鉢	底部	横ナテ(黒化が著しい)、ナテ?横ナテ	斜方向と横方向の貝殻条文、斜方向のナテ	に強い黄褐色	浅黄	1cm以下の褐色の塊、4cm以下の乳白色粒、灰白色粒を含む。	内面に筋状入肌。
331	A	縄文・弥生	深鉢(山形)	底部	斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文	斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文、斜方向の貝殻条文	黄褐色	灰黄褐色	1mm以下の白色、黄褐色粒、灰白色粒を含む。	
332	A	縄文	口縁部	口縁部	工具による横ナテ、横ナテ	工具による横ナテ、横ナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	4mm以下の褐色粒を含む。	
333	A	縄文	口縁部	口縁部	ハケ目	横ナテ、上部が斜め	浅黄褐色	浅黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む。	外側に筋状入肌。
334	D	縄文	口縁部	口縁部	工具による斜方向のナテの横ナテ	工具による横ナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	2mm以下の褐色粒、1mm以下の灰白色粒、灰白色粒をわずかに含む。	
335	A	縄文	口縁部	口縁部	ナテ	ナテ	横	横	4mm以下の灰褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む。	
336	A	縄文	口縁部	口縁部	工具による横ナテ	横ナテ、斜方向の工具によるナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	4mm以下の赤褐色の塊、3mm以下の褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む。	外側に筋状入肌。
337	A	古代	口縁部	口縁部	斜方向のナテ、指痕あり	横ナテ、指痕あり	浅黄褐色	浅黄褐色	4mm以下の茶褐色を多く含む。	
338	A	縄文	口縁部	口縁部	ナテ	ナテのち指痕あり	に強い黄褐色	に強い黄褐色	4mm以下の赤褐色粒、1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の灰白色粒を含む。	
339	A	縄文	口縁部	口縁部	横方向のタタキ	ナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	5mm以下の褐色粒、4mm以下の乳白色粒、灰白色粒、1mm以下の赤褐色粒を含む。	
340	A	縄文	口縁部	口縁部	横方向のタタキ	横ナテ、ナテ	浅黄褐色	浅黄褐色	4mm以下の砂粒1個、2mm以下の砂粒を少量含む。	外側に筋状入肌。
341	A	縄文	胴部	胴部	工具による横方向のタタキ	横ナテ、斜方向の工具によるナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	5mm以下の赤褐色の塊、2mm以下の褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む。	外側に筋状入肌。
342	A	縄文	胴部	胴部	ハケ目	斜方向のナテまたは横ナテ	横	横	4mm以下の褐色粒を含む。	
343	A	古代	口縁部	口縁部	横ナテ、斜方向のナテ、一部横ナテ	横ナテ、斜方向のナテ、一部横ナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	2mm以下の茶褐色を含む。	
344	A	古代	口縁部	口縁部	斜方向ナテ	ナテ	横	横	4mm以下の砂粒を含む。	外側に筋状入肌。
345	A	古墳	口縁部	口縁部	ナテ、ナテ面に指痕あり	ナテ	横	横	3mm以下の茶褐色粒、2mm以下の灰褐色粒、黒褐色粒を含む。	
346	A	古墳	口縁部	口縁部	ナテ	ナテ	横	横	2mm以下の茶褐色粒を含む。	
347	A	古墳	口縁部	口縁部	ナテ	ナテ	横	横	4mm以下の灰褐色粒、3mm以下の赤褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む。	
348	A	古墳	口縁部	口縁部	ナテ	工具による横ナテ	に強い黄褐色	黄褐色	4mm以下の赤褐色粒、灰白色粒、乳白色粒を含む。	
349	A	古墳	口縁部	口縁部	タタキ	斜方向のナテ	に強い黄褐色	に強い黄褐色	2mm以下の乳白色粒、褐色粒、灰白色粒を多く含む。	
350	A	古墳	胴部	胴部	丁字ナテ	丁字ナテ、斜方向のナテ	に強い黄褐色	横	2.5mm以下の褐色粒、1mm以下の褐色粒、灰白色粒、ガラス片、黒褐色粒をわずかに含む。	
351	A	古墳	胴部	胴部	横ナテ	横ナテ、ナテ(黒化が著しい)	横	横	微細な褐色粒、ガラス片、黒褐色粒を含む。	
352	A	古墳	胴部	胴部	横ナテ、ナテ(黒化が著しい)	斜方向のナテ、斜方向のナテ、斜方向のナテ	に強い黄褐色	浅黄褐色	0.3mm～3mm以下の褐色粒、微細～3mm以下の褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む。	
353	A	古墳	胴部	胴部	横ナテ、ナテ(黒化が著しい)	ハケ目? (黒化が著しい)	に強い黄褐色	浅黄褐色	5.5mm以下の褐色粒、3.5mm以下の褐色粒、2mm以下の褐色粒、1.5mm以下の灰白色粒を含む。	外側に筋状入肌、内面に筋状入肌。
354	A	古墳	胴部	胴部	斜方向にタタキ、タタキ(黒化)、横ナテ(黒化が著しい)	ナテ(黒化)	浅黄褐色	浅黄褐色	4mm以下の褐色粒、2.5mm以下の褐色粒、2mm以下の褐色粒、1.5mm以下の灰白色粒を含む。	外側に筋状入肌、内面に筋状入肌。
355	A	古墳	胴部	胴部	ナテのちハケ目(黒化が著しい)、横ナテ	ナテのちハケ目(黒化が著しい)	に強い黄褐色	灰黄	1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の褐色粒を含む。	外側に筋状入肌、内面に筋状入肌。
356	A	古墳	胴部	胴部	平行タタキ	ナテ	に強い黄褐色	横	5mm以下の褐色粒、5mm以下の褐色粒、1mm以下の褐色粒を含む。	
357	A	古墳	胴部	胴部	ナテのちハケ目(黒化が著しい)、横ナテ	ナテ(黒化が著しい)	に強い黄褐色	横	1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の褐色粒、1.5mm以下の褐色粒を含む。	内面に筋状入肌。

表45 上ノ原遺跡 土器観察表(5)

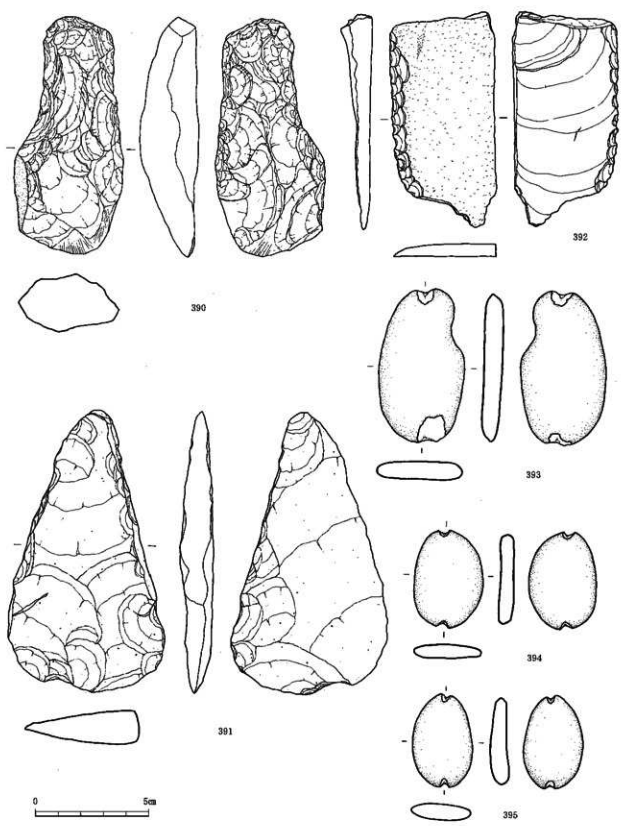
目録号	区	種別	器種	部位	文様および胎線		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
358	A	古墳	?	底部	横・斜方向のタタキ	縦ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	3cm以下の赤褐色胎、灰色胎、褐色胎を含む。	
359	A	?	?	底部	斜方向のタタキ、タタキの上をナテ	工業によるナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	4cm以下の赤褐色胎、灰色胎、乳白色胎、半褐色胎を含む。	
360	A	?	壺	胴部	ナテ(黒化焼)、工業痕(ハウ状)	ナテ(黒化焼)	に濃い黄褐色	黄褐色	1.5cm以下の赤褐色胎、1cm以下の褐色胎、1.5cm以下の褐色胎、1.5cm以下の褐色胎を含む。	
361	A	?	壺?	胴部一胴部	縦・斜方向の平行タタキ	ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	3cm以下の白色胎、灰色胎を含む。	底に2スリ痕。
362	A	?	壺又は甕	胴部	タタキ・ナテ	タタキ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	1.5cm-3cm以下の褐色胎、1.5cm-4cm以下の褐色胎、1.5cm-2.5cm以下の褐色胎を含む。	底に1スリ2スリ痕。
363	A	?	壺?	胴部一胴部	縦・横の平行タタキ	黒化灰胎	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	1cm以下の褐色胎を含む。	
364	A	?	壺	底部	ナテ	ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	5cm以下の赤褐色胎、灰褐色胎、3cm以下の黄褐色胎を含む。	
365	D	?	壺?	底部付近	縦方向のミガキ、ナテ	ナテ(黒化濃しい、横ナテ)	に濃い黄褐色	灰	1.5cm以下の褐色胎、1.5cm以下の褐色胎、3cm以下の赤褐色胎を含む。	底に2スリ2スリ痕。
366	?	?	壺	胴部一底部	丁寧なナテ(黒化焼)	ナテ(黒化濃しい)	に濃い黄褐色	灰黄	3cm以下の赤褐色胎、灰色胎、黄褐色胎を多く含む。	
367	A	?	壺	底部	ナテ	ナテ、指痕?	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	4cm以下の赤褐色胎、3cm以下の黄褐色胎を含む。	
368	A	?	壺	底部	ナテ、斜方向のタタキ	ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	0.5cm-3cm以下の褐色胎、0.3cm-1.2cm以下の白色胎を含む。	
369	A	古代	杯	口縁一胴部	ナテ	ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	1cm以下の褐色胎、灰色胎、黄褐色胎を含む。	
370	A	?	土器	胴部一底部	回転ナテ、ヘラ切り底	回転ナテ	黄褐色	に濃い黄褐色	1cm以下の赤褐色胎をわずかに含む。	
371	A	?	杯	底部	ナテ	工業による横ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	2.5cm以下の赤褐色胎を含む。	高台付。
372	D	古墳	高杯	胴部一胴部	縦及び斜方向のハケメ	横方向のハケメ	黄褐色	黄褐色	4.5cm以下のに濃い黄褐色胎、黄褐色胎を含む。	
373	A	?	高杯	胴部	ナテ	ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	5cm以下の赤褐色胎、乳白色胎を含む。	
374	B	?	皿	口縁一胴部	ナテ、ヘラ切り底、割口縁?	ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	黄褐色	
375	?	古代	土器	胴部一底部	回転ナテ、ヘラ切り底	回転ナテ	に濃い黄褐色	に濃い黄褐色	1cm以下の赤褐色胎、褐色胎をわずかに含む。	
376	?	?	製塩土器	口縁	ナテ、横ナテ	ナテ、横ナテ	に濃い黄褐色	黄褐色	1cm以下の褐色胎、0.5cm以下の灰色胎、黄褐色胎をわずかに含む。	
377	A	?	製塩土器	口縁	ナテ	布目胎	黄褐色	黄褐色	5cm以下の褐色胎を含む。	
378	A	?	製塩土器	口縁	ナテ	布目胎	黄褐色	黄褐色	黄褐色	
379	A	?	?	底部	工業によるナテ	布目胎?黒化濃しい	黄褐色	黄褐色	0.5cm-3cm以下の赤褐色胎を含む。	
380	A	?	?	口縁一底部	ナテ、回転ナテ、若いナテ	ナテ	灰オリーブ	灰オリーブ	0.5cm-3cm以下の赤褐色胎、黄褐色胎-1.5cm以下の褐色胎を含む。	
381	近世(近世)	?	?	底部	胎線貫入あり、高台内輪割ぎ	胎線貫入あり	(胎線)黄褐色	(胎線)灰白		
382	近世	?	?	底部	胎線	胎線	(胎線)オリーブ	(胎線)オリーブ	黄褐色	
383	近世	?	?	底部	胎線	胎線	(胎線)オリーブ	(胎線)オリーブ	黄褐色	胎線貫入付
384	B	近世?	?	底部	胎線、指痕	胎線	(胎線)灰白	(胎線)灰黄	黄褐色	
385	A	近世	?	?	ミガキ?	指押さえ	黄褐色	黄褐色	黄褐色	



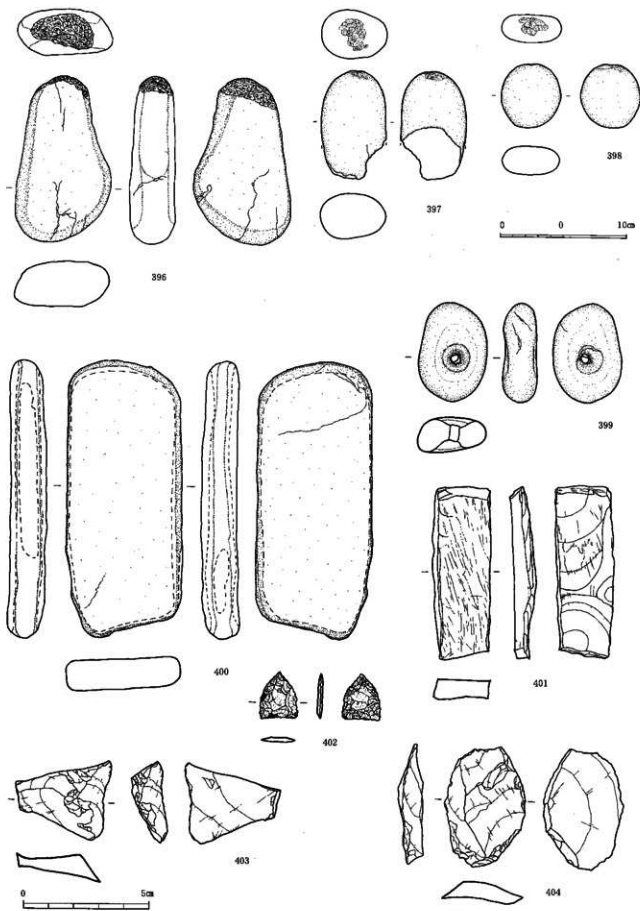
第57圖 石器出土分布状況



第58圖 上ノ原遺跡縄文中期以降出土石器実測圖(1)



第59圖 上ノ原遺跡縄文中期以降出土石器実測圖(2)



第60圖 上ノ原遺跡縄文中期以降出土石器実測圖(3)

表46 上ノ原遺跡石器計測表

図番号	実測番号	区	層	遺物番号	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考	
	386	62	A	IV	341	N14	磨製石斧	8.35	3.45	1.05	47	ホルンフェルス	
	387	83	A	IV	264	N14	磨製石斧	7.9	2.6	1.05	30.2	ホルンフェルス	
	388	58	A	IV	350	N14	磨製石斧	13.2	6.05	3.55	403.3	流紋岩a	
	389	61	A	IV	538	O14	磨製石斧	4.97	4.3	1.4	43.7	ホルンフェルス	
	390	60	A	II	79	H16	局部磨製石斧	10.7	4.8	2.4	134	ホルンフェルス	
	391	59	A	IV	20	H15	打製石斧	12.55	6.9	1.5	110.6	ホルンフェルス	
			A	IV	36	P14	磨製石斧	4.1	2.1	0.6	9	流紋岩f	
			A	IV	250	N14	打製石斧	5.35	4.35	1.5	44.3	ホルンフェルス	
392	337	A	IV	779	O14	スクレイパー	9.6	4.65	1.45	56.3	ホルンフェルス		
	393	67	A	IV	87	O15	石錐	6.85	3.8	0.82	33	流紋岩a	
394	85	A	IV	540	O14	石錐	4.3	3	0.7	13.3	流紋岩b		
395	68	A	IV	576	O14	石錐	4.12	2.63	0.95	11.3	流紋岩f		
			A	III	15	H15	礫石	7.65	7.15	2.4	200	庵鉢酸性岩	
396	99	D	IV	32	M12	礫石	13.2	7.6	3.6	43.45	砂岩		
397	254	C	IV	2	J4	礫石	8.7	5.2	3.7	186.2	砂岩		
398	253	A	IV	47	O15	礫石	5.1	4.75	2.3	65.2	砂岩		
			A	IV	365	N14	石核	8.2	6.9	7.85	527.2	流紋岩g	
399	101	A	IV	333	O14	錘形品	3.98	2.75	1.4	21.9	流紋岩g		
400	105	C	IV			礫石	11.1	4.6	1.4	125.8	砂岩		
401	104	A	IV	85	N14	礫石	6.9	2.3	1	19.8	流紋岩b		
			C	IV			礫石	10.9	3.5	1.4	9	砂岩	
402	115	A	II		I15		石錐	18.7	15.5	2.4	0.8	流紋岩f	
			C	IV	11	J4	二次加工	8.15	3	1.1	23.7	ホルンフェルス	
			A	IV	513	N14	二次加工	3.2	2.9	0.7	7.8	チャート	
403	250	A	IV	622	O14	使用痕	3.23	3.8	1.5	7.9	流紋岩b		
404	251	A	IV	776	O14	使用痕	4.8	3.2	0.7	13	流紋岩g		
			A	IV	331	O14	使用痕	6.05	3.3	1.5	21.2	流紋岩f	
			A	IV	817	O14	使用痕	9.05	5.3	1.1	42	ホルンフェルス	
			A	IV	58	P15	使用痕	5.7	3.45	1.3	21	流紋岩g	
			A	IV	193	N14	使用痕	8.5	8.4	1.5	101.8	ホルンフェルス	
			A	IV	322	N14	使用痕	4.6	3.3	0.55	6.1	ホルンフェルス	

第VI章 上ノ原遺跡自然科学分析

I. 上ノ原遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、始良火山や桜島火山さらに霧島火山などから噴出したテフラが多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な土層の認められた上ノ原遺跡において、地質調査と屈折率測定を合わせて行い、示標テフラの層位を求めて土層の形成年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、L-15グリッド、I-15グリッド、溝状遺構1の3地点である。

2. 土層の層序

(1) L-15グリッド

この地点では、下位より黒褐色土（層厚20cm）、白色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚22cm）、成層したテフラ層（層厚18cm）、褐色土（層厚43cm）、暗褐色土（層厚28cm）が認められる（図1）。成層したテフラ層は、下位より黄色細粒火山灰層（層厚3cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚11cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚4cm）の連続からなる。

(2) I-15グリッド

ここでは、下位より黄色粗粒火山灰層（層厚5cm以上）、暗褐色土（層厚49cm）、黒褐色土（層厚49cm）、黒褐色土（層厚18cm）、黄色軽石混じり黒褐色土（層厚11cm、軽石の最大径4mm）、黒色がかかった暗褐色土（層厚16cm）、黒褐色土（層厚22cm）、黒色土（層厚18cm）、黄橙色細粒火山灰層（層厚5cm以上）が認められる（図2）。

これらのうち、黒褐色土中に含まれる黄色軽石は、その岩相から約1.4～1.6万年前に霧島火山から噴出した霧島小林軽石（Kr-Kb、伊田ほか、1956、町田・新井、1992、早田、1997印刷中）に由来すると考えられる。また最上部の黄橙色細粒火山灰層は、その層位や層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（町田・新井、1978）に同定される。

(3) 溝状遺構1

この遺構の覆土は、下位より褐色土のブロック混じり黒褐色土（層厚10cm）、黒色土（層厚26cm）、褐色がかかった黒色土（層厚22cm）、黒褐色土（層厚49cm）、暗褐色土（層厚27cm）が認められる（図3）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

L-15グリッドの成層したテフラ層より下位にある土層の堆積年代及び溝状遺構1の構築年代に関

する資料を収集するために、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの合計10点の試料について、テフラ検出分析を行って、示標テフラの検出を試みた。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。L-15グリッドの試料番号5から11にかけての試料には、とくに軽石やスコリアを検出することはなかった。これらの試料には、 β 石英が比較的多くまたは少量認められた。これらの β 石英は、より下位にある始良岩戸軽石 (A-Iw, Nagaoka, 1988) や、始良カルデラから約3.1~4.1万年前に噴出した始良荒崎テフラ (A-Ar, 佐藤ほか, 1971) に由来するものと考えられる。

一方、溝状遺構1では分析の対象としたいずれの試料からも、暗灰色土や暗褐色のスコリアが比較的多く検出された。スコリアの最大径は、1.5mmである。このスコリアは、その岩相から9~13世紀に霧島火山群高千穂火山から噴出した霧島高原スコリア (Kr-Ths, 井ノ上, 1988, 早田, 1997印刷中) に由来すると考えられる。したがって、その産状から溝状遺構1の構築については、9世紀以降の可能性が考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

L-15グリッドおよびI-15グリッドで認められたテフラの起源を明らかにするために、位相差法 (新井, 1972) によって屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。L-15グリッド試料番号2には、火山ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスは透明で、平板状いわゆるバブル型のほかに軽石型のガラスも少量認められる。火山ガラスの屈折率(n)は1.498-1.501、中央値は、1.499-1.500である。重鉱物としては、斜方輝石のほかに少量の角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率(γ)は1.726-1.734、中央値は1.730-1.733である。このテフラは、その特徴から約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰層(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田, 1995)に同定される。

一方、I-15グリッドの試料番号1には石英が多く含まれている。重鉱物としては斜方輝石が認められ、その屈折率(γ)は、1.719-1.723である。このテフラは、その特徴から、A-Arに同定されると思われる。

5. 小結

上ノ原遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、本遺跡には、少なくとも下位より始良荒崎テフラ (A-Ar, 約3.1~4.1万年前)、始良Tn火山灰 (約2.4~2.5万年前)、霧島小林軽石 (Kr-Kb, 約1.4~1.6万年前)、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約6,300年前)、霧島高原スコリア (Kr-Ths, 9~13世紀)の堆積していることが明らかになった。また溝状遺構1の構築年代については、9世紀以降の可能性が大きいと推定された。

文 献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, P.254-269.

池田晃子・奥野充・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器14C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.

伊田一善・本島公司・安国 昇 (1956) 宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告. 地調報告, 168, p.1-44.

井ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史. 岩鉱, 83, p.26-41.

町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.

町田洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.

町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.

Nagaoka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ, 23, p.49-122.

佐藤和郎・荒牧重雄・佐藤純 (1971) 南九州の火山噴出物のC-14年代とフィッシュン・トラック年代 (演旨). 火山, 16, p.43.

早田勉 (1997印刷中) 宮崎県のテフラとその特徴. 宮崎県史.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			β石英
		量	色調	最大径	
L-15	5	—	—	—	++
	7	—	—	—	+
	9	—	—	—	++
	11	—	—	—	++
溝状遺構1	1	++	暗灰>暗褐	1.5	—
	3	++	暗灰>暗褐	1.5	—
	5	++	暗灰>暗褐	1.5	—
	7	++	暗灰>暗褐	1.5	—
	9	++	暗灰>暗褐	1.5	—
	11	++	暗灰>暗褐	1.5	—

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度,
+: 少ない, -: 認められる. 最大径の単位は, mm.

表2 屈折率測定結果

グリッド	試料	火山ガラス				重鉱物	
		量	形態	色調	屈折率	組成	opxの屈折率 (γ)
L-15	2	++	pm>bw	透明	1.498-1.501 (1.499-1.500)	opx(ho)	1.726-1.734 (1.730-1.733)
I-15	1	-	-	-	-	opx	1.719-1.723

opx:斜方輝石、ho:角閃石、重鉱物の()は量の少ないことを示す。
 屈折率は位相差法(荒井、1972)による。屈折率の()は中央値を示す。

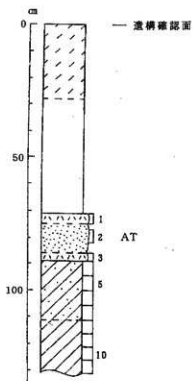


図1 L-15グリッドの土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

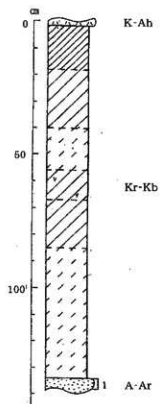


図2 L-15グリッドの土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

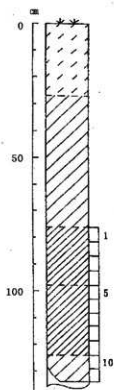


図3 溝状遺構1種土の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号



II. 上ノ原遺跡における植物珪酸体分析(1)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

2. 試料

試料は、L-15グリッドで3点、I-15グリッドで6点の計9点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40 μm ・約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20 μm 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキッパ) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物の体乾重、単位: 10-5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物の体生産量を算出した。ススキ属型 (ススキ) の換算係数は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

機動細胞由来：キビ族型、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、Aタイプ（くさび型）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウ節、ヤダケ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等
〔樹木〕

その他

（2） 植物珪酸体の検出状況

1) L-15グリッド（図1）

AT直下層（試料1、2）およびその下層（試料3）について分析を行った。その結果、試料3と試料2ではタケ亜科（未分類等）や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族やクマザサ属型なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツクリグサ科やヤダケ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。AT直下（試料1）では各分類群とも大幅に減少している。

2) I-15グリッド（図2）

K-Ah直下層（試料1）からA-Ar直上層（試料6）までの層準について分析を行った。その結果、A-Ar直上層（試料6）ではタケ亜科（未分類等）や棒状珪酸体が比較的多く検出され、ウシクサ族やクマザサ属型も検出された。Kr-Kb直下層（試料5）ではクマザサ属型やタケ亜科（未分類等）、棒状珪酸体が大幅に増加し、ネザサ節型も検出された。Kr-Kb混層（試料4）およびその上層（試料3）でもおおむね同様の結果であるが、K-Ahの下層（試料2）ではウシクサ族やネザサ節型が増加し、ススキ属型やメダケ節型も出現している。K-Ah直下層（試料1）ではネザサ節型が大幅に増加し、メダケ節型も増加しているが、クマザサ属型は大幅に減少している。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、K-Ahの下層（試料2）より下位ではクマザサ属型が優勢であるが、K-Ah直下層ではネザサ節型が圧倒的に卓越していることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

始良Tn火山灰（AT、約2.4-2.5万年前）の下層から霧島小林軽石（Kr-Kb、約1.4-1.6万年前）の上層にかけては、クマザサ属などのササ類を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくに霧島小林軽石混層およびその下層ではクマザサ属が繁茂する状況であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標とされている。また、ネザサ節とクマザサ属の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の水期-間水期サイクル変動とよく一致することが分かっている（杉山・早田、1996）。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、

大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている (高槻, 1992)。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

その後、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 約6,300年前) の下層では、ネザサ節を主体としてススキ属なども見られる草原植生が成立したものと推定される。この植生変化は、完新世初頭における気候温暖化に対応しているものと考えられる。

参考文献

- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, P.27-38.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, P.70-83.
- 杉山真二・早田勉 (1996) 植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の氷期—間氷期サイクルの検討—. 日本第四紀学会 講演要旨集, 26, p.68-69.
- 高槻成紀 (1992) 北に生きるシカたち—シカ, ササそして雪をめぐる生態学—. どうぶつ社.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

Ⅲ. 上ノ原遺跡における放射性炭素年代測定結果(1)

1. 試料と方法

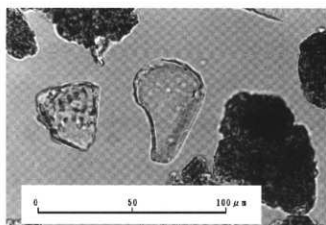
試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	土壌3内	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法

2. 測定結果

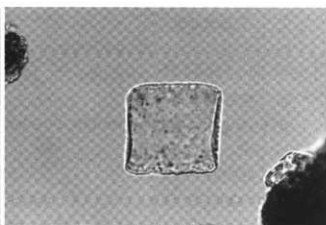
試料名	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代 交点 (1 σ)	測定No. (Beta-)
No.1	930 \pm 50	-23.6	950 \pm 50	AD1040 (BC1020~1170)	101076

1) 14C年代測定値

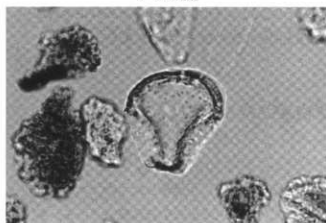
試料の14C/12C比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前 (BP) かを計算した値。14Cの半減期は5,568年を用いた。



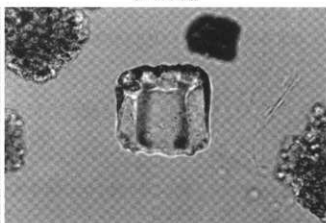
1. ススキ属型



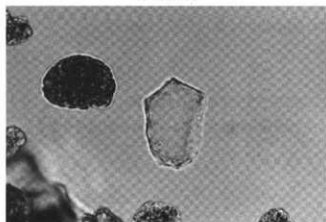
2. ウシクサ族



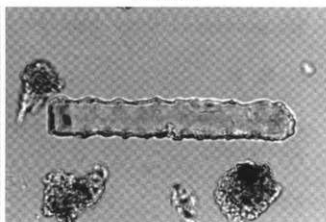
3. ネザサ節型



4. ネザサ節型



5. クマザサ属型



6. 棒状珪酸体

植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	ススキ属型	I-15グリッド	2
2	ウシクサ族	I-15グリッド	2
3	ネザサ節型	I-15グリッド	1
4	ネザサ節型	I-15グリッド	1
5	クマザサ属型	L-15グリッド	1
6	棒状珪酸体	I-15グリッド	1

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比から千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

IV. 上ノ原遺跡における植物珪酸体分析(2)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となつて土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山、1987)。

2. 試料

調査地点は、B区B15グリッド、C区F6グリッド、C区H9グリッドの3地点である。分析試料は、現表土から霧島イワオコシ軽石の下層までの層準から計29点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原、1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対して直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W ・ 42KHz ・10分間) による分散
- 5) 沈底法による $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成

表3 宮崎県、上ノ原遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	L-15グリッド			I-15グリッド						
	1	2	3	1	2	3	4	5	6	
イネ科										
キビ類型						15				
ススキ属型		7			22					
ウシクサ属	27	134	96	30	118	30	30	15	7	
ウシクサ属(大型)				7						
Aタイプ(くまび型)	7									
タケ亜科										
ネザザ属型				778	155			7		
クマザザ属型	21	15	52	30	317	243	285	351	45	
メダケ節型				67	22	7				
未分類等	7	341	452	667	854	524	533	694	178	
その他のイネ科										
表皮毛起源	21	30		7		7	8	7	7	
棒状珪酸体	144	579	725	749	972	649	691	746	288	
未分類等	267	497	533	606	803	516	609	819	320	
樹木起源										
その他	7		7							
植物珪酸体総数	459	1903	1865	2943	3262	1992	2156	2439	825	

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²-cm)

ススキ属型	0.09				0.27				
ネザザ節型				3.74	0.74			0.04	
クマザザ属型	0.15	0.11	0.39	0.22	2.38	1.83	2.14	2.63	0.33

※資料の仮比重を1.0と仮定して算出。

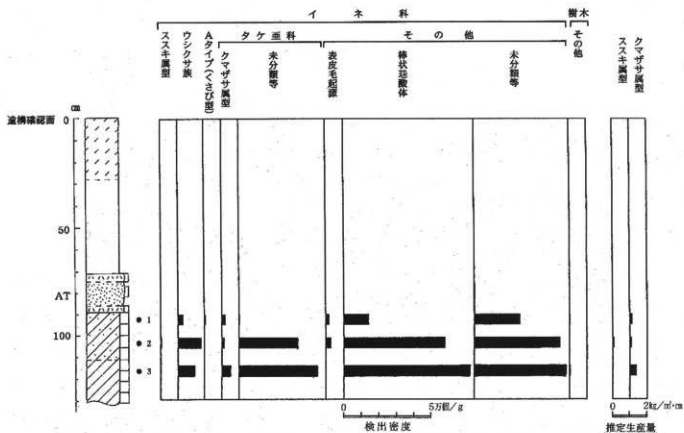


図4 上ノ原遺跡、L-15グリッドにおける植物珪酸体分析結果

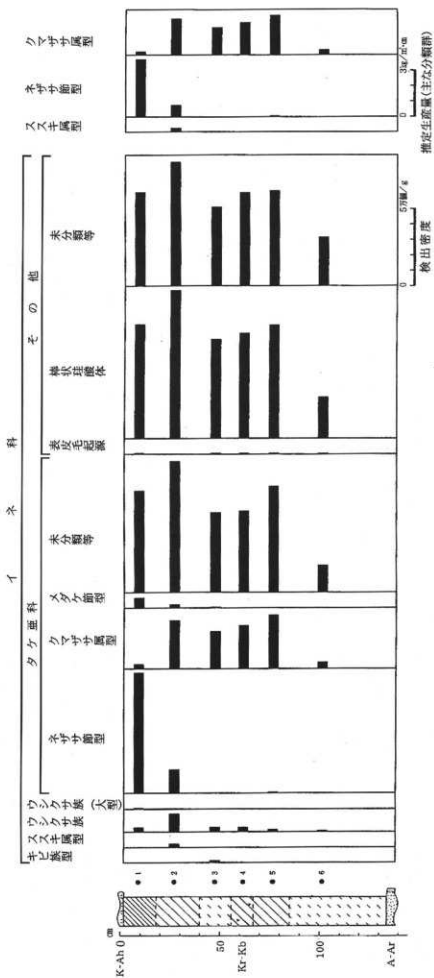


図5 上ノ原遺跡、I-15グリッドにおける植物珪酸体分析結果

7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算計数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75に、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1~3に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属やチガヤ属）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、シハ属

〔イネ科—タケ亜科〕

機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) B区B15グリッド（図1）

現表土（試料1）から始良Tn火山灰より下位の11層（試料17）までの層準について分析を行った。その結果、11層（試料15~17）では、ウシクサ族型やミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。10b層（試料13）から6b層（試料7）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型が多量に検出され、ウシクサ族型なども少量検出された。6a層（試料6）から5層（試料3）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型が減少し、かわってネザサ節型が大幅に増加している。また、ススキ属型やメダケ節型も検出された。現表土（試料1）ではイネが出現し、ブナ科（シイ属）やクスノキ科などの樹木（照葉樹）も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、10b層から6b層に

かけてはクマザサ属型やミヤコザサ節型が卓越しており、5層より上位ではメダケ節型やネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

2) C区F6グリッド (図2)

霧島小林軽石直下の8層 (試料1) から12層 (試料5) までの層準について分析を行った。その結果、12層 (試料5) ではミヤコザサ節型などが少量検出された。11層 (試料4) と10層 (試料3) では、ウシクサ族型、シバ属、ネザサ節型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。9層 (試料2) と8層 (試料1) では、ミヤコザサ節型が多量に検出され、クマザサ属型も比較的多く検出された。

3) C区H9グリッド (図3)

12層 (試料1) から17層 (試料7) までの層準について分析を行った。その結果、16層 (試料5) より下位では、ミヤコザサ節型などがごく少量検出された。14層 (試料3、4) では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、シバ属、ネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。13層 (霧島アワオコシスコリア混、試料2) と12層 (試料1) では、ウシクサ族型やミヤコザサ節型などが少量検出された。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

以上の結果から、上ノ原遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。霧島アワオコシ軽石 (Kr-Iw) より下位の17層から始良Tn火山灰 (AT、約2.4-2.5万年前) 直下の11層までの堆積当時は、ミヤコザサ節などのササ類を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生が継続されていたと考えられ、霧島アワオコシスコリア直下の14層ではシバ属やネザサ節なども見られたものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属 (ミヤコザサ節を含む) は寒冷の指標とされており、両者の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の水期の一寒水期サイクルの変動とよく一致することが知られている (杉山・早田、1996)。このことから、当時は比較的寒冷な気候条件下で推移したと考えられるが、霧島アワオコシスコリア (Kr-Aw) 直下層の堆積当時は、その前後の時期よりも比較的温暖な気候であったものと推定される。この温暖期は、約3万年前頃とされる最終水期の亜間水期 (酸素同位体ステージ3) に対比されるものと考えられる。

クマザサ属のうち、チシマザサ節・チマキザサ節は、現在でも日本海側の寒冷地などに広く分布しており、積雪に対する適応性が高いとされている (室井、1960)。一方、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ないところに分布しており、両者は積雪約50cmを境としてすみわけを行っている (鈴木、1978)。ここでは、ミヤコザサ節が卓越していることから、当時は積雪量の少ない比較的乾燥した気候条件であったものと推定される。

始良Tn火山灰混の10b層から霧島小林軽石 (Kr-Kb、約1.4-1.6万年前) より上位の6b層にかけては、クマザサ属 (ミヤコザサ節を含む) などのササ類が多く生育するイネ科植生であり、周辺ではウシクサ族なども見られたものと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をりしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけ

はシカなどの草食動物の重要な食物となっている(高槻, 1992), 気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

その後、6a層の堆積当時には、クマザサ属(ミヤコザサ節を含む)の減少に伴ってネザサ節が増加し、鬼界阿カホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)直下の5層の時期には、ネザサ節を主体としてススキ属やチガヤ属、メダケ節なども見られるイネ科植生が成立したものと推定される。このような植生変化は、完新世における急激な気候温暖化の影響と考えられる。ススキ属やチガヤ属は、日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

現表土層の堆積当時は、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられ、周辺ではシイ属やクスノキ科などの照葉樹林も見られるようになったものと推定される。

参考文献

- 杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号, p.27-37.
- 杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二・早田勉(1996) 植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定-中期更新世以降の氷期-間氷期サイクルの検討-. 日本第四紀学会 講演要旨集, 26, p.68-69.
- 杉山真二・早田勉(1997) 南九州の植生と環境-植物珪酸体分析による検討-. 月刊地球, 19, p.252-257.
- 杉山真二(1997) 人類をとりまく植生と環境. 宮崎県史通史編「原始・古代」p.150-172.
- 杉山真二・早田勉(1997) 植物珪酸体分析による古環境推定-ササ類の植生変遷と積雪量の変動-. 日本第四紀学会 講演要旨集, 27, p.134-135.
- 鈴木貞雄(1978) 日本タケ科植物総目録. 学習研究社. 384p.
- 高槻成紀(1992) 北に生きるシカたち-シカ、ササそして雪をめぐる生態学-. どうぶつ社.
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

V. 上ノ原遺跡における花粉分析

1. 試料

試料は、B区B15グリッドとC区のH9グリッドから採取された計9点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

第4表 宮崎県、上ノ原遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/)

分類群 \ 材料	日原B13グロット										C区B群グロット					C区D群グロット																				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7							
イネ科																																				
イネ	15																																			
キビ属	7	8			7	30	7	22	7	7	7	7	7	7	7	7													7						8	
ヨシ属																																				
ススキ属	37	15	29	15	33			15																					7						7	
ウシカサ属	110	30	66	44	53	74	43	44	84	37	30	7	29	22	45	73	73	15	14	15	7								7	7					21	
ウシカサ属(大型)																																				
シバ属	7																													7						30
シバ属																																				63
メダカ属	58	23	66	110	33	7	7																													
ネコヤナ属	299	63	439	494	153	37																														
クマヤナ属	7	23	44	51	153	194	143	175	66	175	165	122	66	30																						45
ミヤコヤナ属	15	8	7	51	67	111	300	117	183	86	165	201	338	140	30	51	15	200	217	39	33	15								45	22	30	128	7		7
共分類等	117	45	197	242	213	119	79	183	183	166	15	93	95	61	38	29	37	44	29	10	7									22	25	75	49			
その他のイネ科	15																													7						8
藻類等植物	643	181	745	585	466	319	257	394	380	416	133	230	198	140	186	190	286	126	109	49	27								52	52	30	230			7	
雑草類植物	7																																			
葉緑体	739	75	672	678	718	586	590	540	669	541	679	639	595	467	605	697	669	437	369	334	254	52								135	112	136	523	52		6
葉緑体	7																																			
ブナ科(シイ属)																																				
クスノキ科	15																																			
(植物体)																																				
植物珪酸体総数	2091	449	2273	2189	1993	1394	1345	1488	1646	1446	1228	1293	1285	930	767	663	908	881	848	467	367	67							277	209	370	1053	60		60	

おもな分類群の検出密度 (単位: 個/μm²)

イネ科	0.43
イネ	0.45
ヨシ属	0.68
ススキ属	0.68
ウシカサ属	1.44
ウシカサ属(大型)	0.05
シバ属	0.04
シバ属	0.04
メダカ属	0.45
ネコヤナ属	0.68
クマヤナ属	0.68
ミヤコヤナ属	0.68

珪酸体の比率 (%)

イネ	0.09
ヨシ属	0.22
ススキ属	0.06
ウシカサ属	0.13
ウシカサ属(大型)	0.06
シバ属	0.13
シバ属	0.09
メダカ属	0.02
ネコヤナ属	0.02
クマヤナ属	0.02
ミヤコヤナ属	0.02

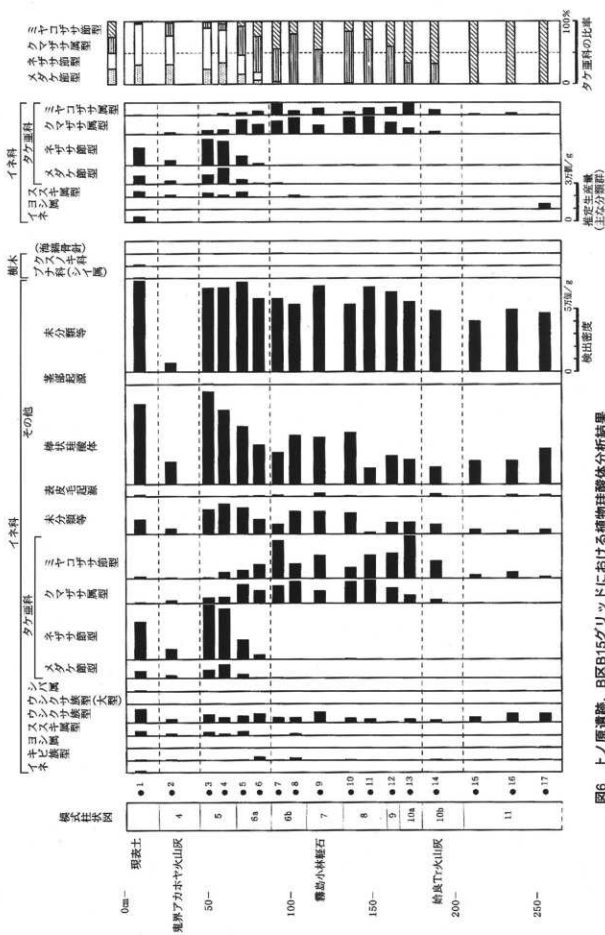


図6 上ノ原遺跡、B区B15グリッドにおける植物珪酸体分析結果

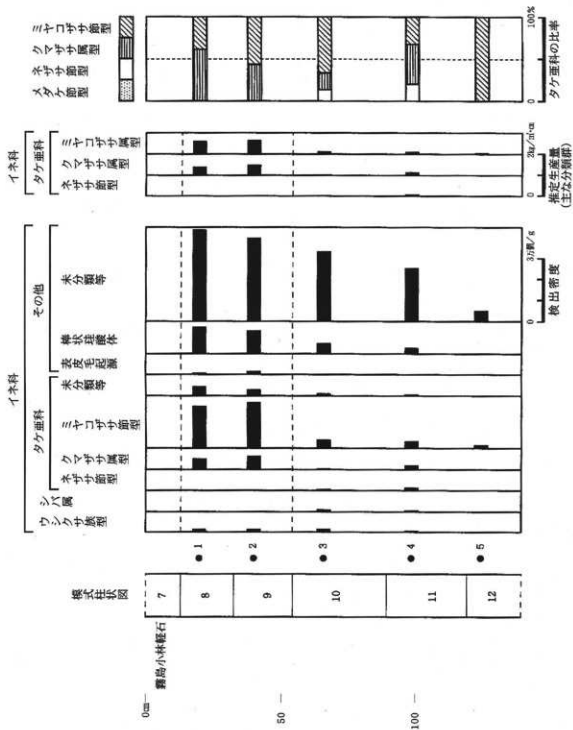


図7 上ノ原遺跡、C区F6グリッドにおける植物硅酸体分析結果

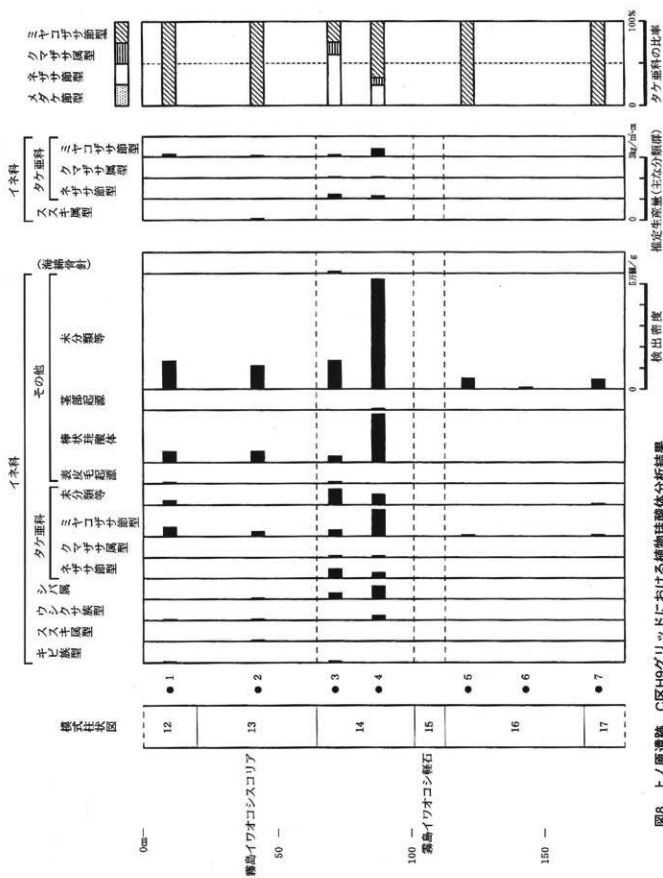
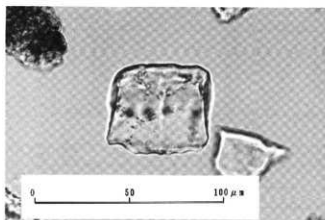


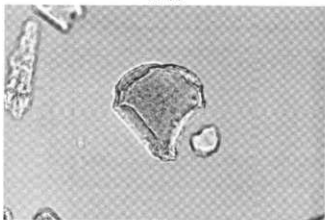
図8 上ノ原遺跡、C区H9グリッドにおける植物珪酸体分析結果



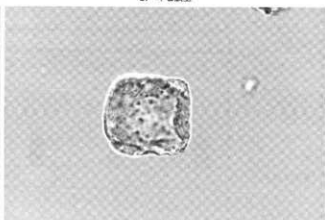
1. イネ



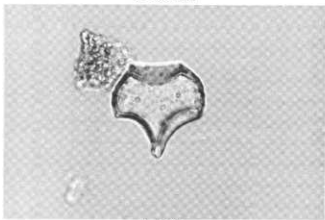
2. キビ飯型



3. ススキ飯型



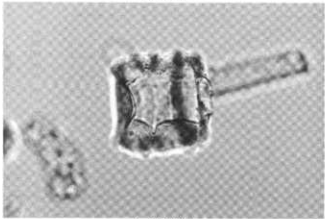
4. ウシクサ飯型



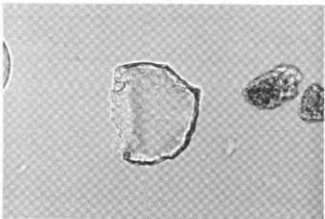
5. シバ飯



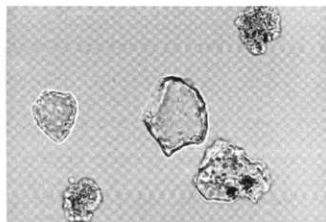
6. メダケ飯型



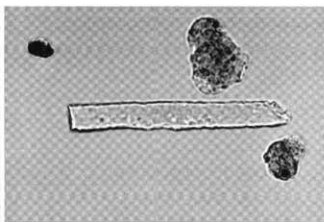
7. ネザサ飯型



8. クマザサ飯型



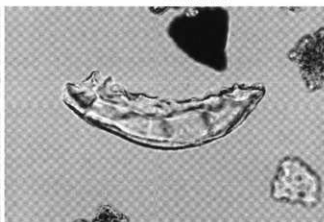
9. ミヤコザサ型



10. 棒状珪酸体



11. プナ科 (シイ属)



12. クスノキ科

植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	B区西壁	1
2	キビ族型	B区西壁	6
3	ススキ属型	B区西壁	1
4	ウシクサ属型	B区西壁	15
5	シバ属	B区西壁	1
6	メダケ節型	B区西壁	1
7	ネザサ節型	B区西壁	1
8	クマザサ属型	B区西壁	11
9	ミヤコザサ節型	B区西壁	6
10	棒状珪酸体	B区西壁	14
11	プナ科 (シイ属)	B区西壁	1
12	クスノキ科	B区西壁	1

2. 方法

花粉粒の分離は抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
 - 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去をおこなう。
 - 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
 - 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
 - 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
 - 6) 沈渣に石灰酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。
- 以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるといふ操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級での分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部りが属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉6、シダ植物胞子2形態の計14である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

スギ、クレーシイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、サンショウ属、シナノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

4. 花粉分析から推定される植生・環境

(1) B区B15グリッド

5層（試料3）から11層（試料17）までの層準について分析を行った。その結果、全体的にキク亜科やヨモギ属などが検出され、6a層（試料5）ではサンショウ属なども検出されたが、いずれも

く少量である。このため、詳細な古環境の推定は困難であるが、これらの植物は相対的に乾燥した環境を好むため、当時は乾燥した環境で推移したものと推定される。サンショウ属は、クロボク土など火山灰土壌の乾燥した環境下で疎林を形成することが多い。

(2) C区H9グリッド

霧島イワオコシ軽石 (Kr-Iw) 直下の16層 (試料5) と直上の14層 (試料3) について分析を行った。その結果、花粉はいずれの試料からも検出されなかった。おそらく、乾燥した環境下で花粉が分解されたものと考えられる。

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料. 研究の方法, 角川書店, p.248-262.
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
 中村純 (1980) 日本産花粉の標微. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 90p.

VI. 上ノ原遺跡における放射性炭素年代測定結果(2)

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	B区1号炉穴	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法
No.2	C区3号土坑底	土 壤	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法
No.3	C区10号土坑底	土 壤	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	14C年代 (年BP)	$\delta 13C$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No. (Beta-)
No.1	9250±50	-26.0	9230±50	BC8215 (BC1765~1675)	114253
No.2	5880±50	-24.0	5900±50	BC4785 (BC4825~4734)	114254
No.3	11310±50	-21.4	11370±50	-	114255

表5 上ノ原遺跡における花粉分析結果

分類群		B区B15グリッド					C区H9グリッド			
学名	和名	3	5	7	10	12	15	17	3	5
Arboreal pollen	樹木花粉									
Cryptomeria japonica	スギ							1		
Castanea crenata-Castanopsis-Pasania	クリーシイ属-マテバシイ属		1							
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1		1						
Zanthoxylum	サンショウ属				5					
Tilia	シナノキ属		1							
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	1								
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Gramineae	イネ科			1						
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1								
Cruciferae	アブラナ科					1				
Lactucoideae	タンポポ亜科		2						1	
Asteroidae	キク亜科		1	1		4	1	3		
Artemisia	ヨモギ属	3	1			4	1	2		
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子	5	8	2						
Trilate type spore	山条溝胞子		1							
Arboreal pollen	樹木花粉	1	7	1	0	1	0	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	4	5	1	0	9	2	6	0	0
Total pollen	花粉総数	6	12	2	0	10	2	6	0	0
Unknown pollen	未同定花粉	1	2	0	0	1	1	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	5	9	2	0	0	0	0	0	0

1) 14C年代測定値

試料の14C/12C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。14Cの半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}C$ 測定値

試料の測定14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比(13C/12C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

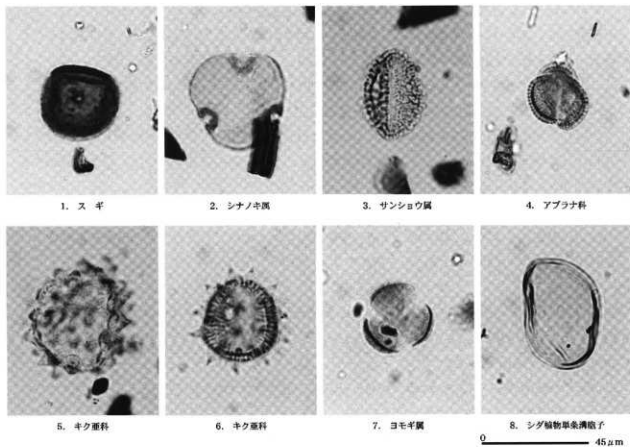
3) 補正14C年代値

$\delta^{13}C$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正14C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ は補正14C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ 値が表記される場合もある。

上ノ原遺跡の花粉・胞子遺体



第七章 ま と め

後期旧石器時代

上ノ原遺跡では、後期旧石器時代における複数の石器群が検出された。報告では、これらの石器群について主に検出層位に基づき、三つの文化層を担うものと判断した。

第Ⅰ石器文化はAT火山灰層直下の第XⅠ層において、ナイフ形石器やスクレイパー類、敲石で構成される石器集中部と土坑一基が確認されたものである。平面・垂直分布や石器群の様相からは、時間的一活性の高い資料と評価できる。近年、本県域においてもAT降灰以前の石器群の事例（佐藤1999、宮崎県旧石器研究会2000）が増加しつつあるが、それらとの比較検討により、第Ⅰ石器文化の石器群についてもより細かなレベルでの位置付けが可能となろう。土坑一基が検出されたが、その機能・用途などは不明である。自然為である可能性も含め、今後、類例の検索を要する。

第Ⅱ石器文化には、各種のナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、山稜尖頭器を含む、複数の石器集中部が確認された。これらが、いくつかの時間差を持った単位に細分される可能性はきわめて高く、今後の検討が必要である。また、礫群の良好な残存状況が確認された。これらの遺構は、Ⅲ層において検出され一定の時間幅に収まるものとみられる。本県における礫群の分析は、これまで活発でないが、今後これらの資料をもとに検討を進めることができる。また礫群の出土レベルに着目することによって、石器群のグルーピングをおこなうアプローチも試みられるべきであろう。

第Ⅲ石器文化は細石刃石器群を主体とする。細石刃剥離が進行し、作業面が石核の周囲にめぐる船野型や、黒曜石の小礫を素材とした野岳・休場型の範疇に含まれるものなどが確認されている。これらの編年論における位置付けについては、今後に俟つところが大きい（重山1997）。

また、陥し穴を含む複数の土坑の存在が明かとなった。一般にこの種の遺構は遺物を伴うことが稀で、時期判定は困難なことが多い。本遺跡では、埋土の堆積状況の観察と、埋土をサンプルに実施した年代測定結果をの主材料として、細石刃石器群に伴うものとの判断を下した。わずかに出土した遺物の様相もこれと矛盾しない。ただし、今後、他の遺跡において、埋土を構成する土壌のよりミクロな視点からの検討を進める必要を痛感する。また、遺跡内における分布論的検討においても課題は多い。

以上、必ずしも詳細な分析に基づく報告には至らなかったが、豊富な内容を擁する本遺跡の石器群が、宮崎平野の歴史叙述の一頁を飾るよう、今後の詳論を望む次第である。

参考文献

佐藤宏之 1999 「西南日本における中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行：宮崎県後牟田遺跡 発掘調査の中間報告」 『早水台から上高森まで—世界から見た日本列島の前期・中期旧石器時代—』 東北福祉大学

重山郁子1997 「宮崎県における細石器文化の編年への試案」 『九州の細石器文化—細石器文化の開始と編年研究—』 九州旧石器文化研究会

宮崎県旧石器文化談話会2000 「宮崎県」 『九州における後期旧石器時代文化の成立』 九州旧石器文化研究会



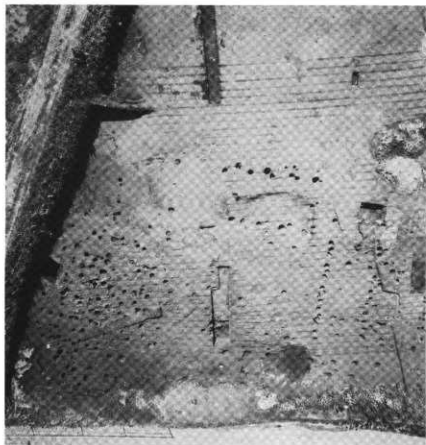
灌 跡 遠 景



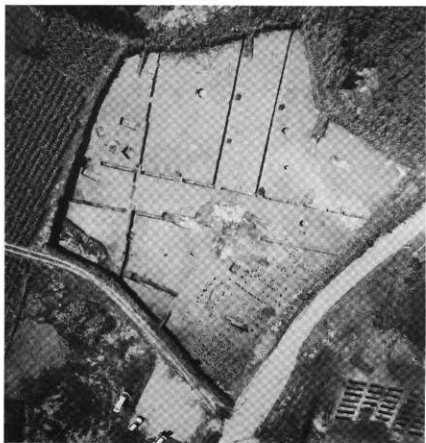
A区全景



B区全景



C区柱穴群出土状况



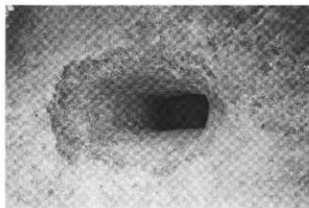
C区全景



SC4



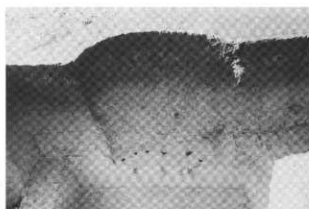
SC10



SC5



SC11



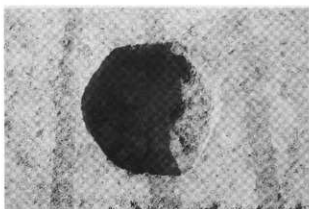
SC8



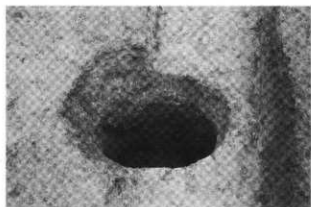
SC12



SC9



SC14



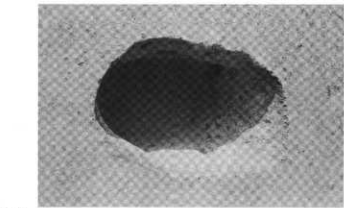
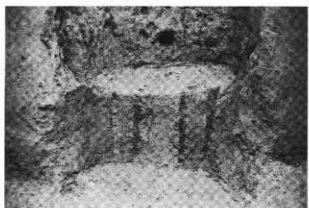
SC17

SC24



SC20

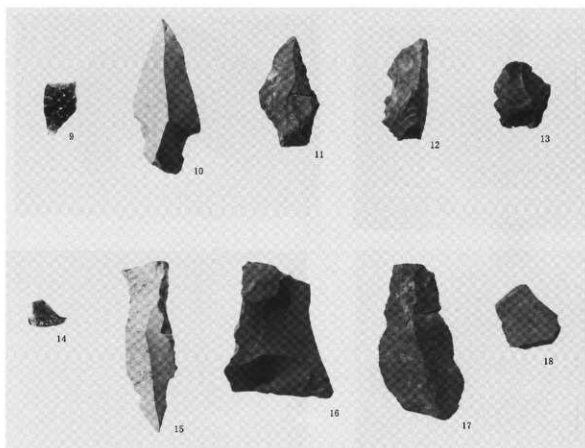
SC26



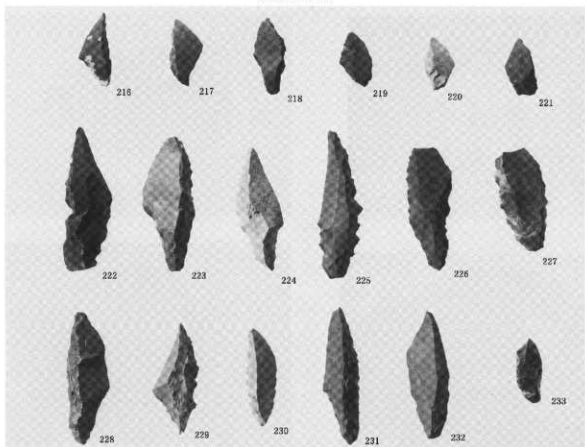
SC20



SC23



津島出土石器



ナイフ形石器